
モンスターハンター 弱虫ハンター奮闘記

日平 雅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター 弱虫ハンター奮闘記

【Nコード】

N7693H

【作者名】

日平 雅人

【あらすじ】

一人の弱虫ハンター、アロンと、その仲間達の成長を書いたバトル重視のモンハン小説！！若干コメディーやシリアス要素あり！主にモンスターハンター3の世界設定で、ストーリーは進みます！！※只今、小説本文大量修正中につき、物語更新は一時停止中です。

第0戦：プロローグ（前書き）

皆さん初めまして。作者です。今回の小説が初投稿となります。なので、途中文脈がおかしかったり、わかりづらい表現があるかもしれません。そのへんは勘弁して下さい。それではっ！！

第0戦：プロローグ

その日は晴天だった。

キラキラと光る海は透き通り、ピカッと太陽の光りを反射する。
透き通るクリアな海、その海面からは、海底を色どるカラフルな
魚や珊瑚がはつきりと視認できる。

ザザーン、ザザーンと、海面をさざ波が移動する。
とても綺麗な海だ。

そんな海の上を、ある一隻の、木製の手漕ぎの船が、目前に広がる一つの島に向かい進んでいた。

屋根がなく、人が10人乗れるか乗れないかぐらいの、簡素な作りの船。

その船には今、9人の男が乗っていた。

9人の内の8人は、筋肉ムキムキの、船の漕ぎ手の男達だ。

8人全員が上半身裸で、下には麻でできたボロボロでダボダボのズボンを着用している。

全員肌は茶色になるまでに焼けており、髪は角刈り頭、そして額には手ぬぐいを巻いている。

まさに、たくましいといった感じだ。

そして、その男達とは別に、一人の若い青年も船には乗っていた。
全身を完全武装した若い青年は、目前に広がる島、（ゼナン島）
を見ながら、ため息をなく。

「はあゝ・・・」

青年はその場にそーっと腰を下ろす。

青年の名はアロン。アロン・プラクティア。18歳のハンターだ。

ハンター・・・それは、広大な大地に住まう巨大なモンスターに、武器と防具を纏った我が身一つで挑む狩人の事。

時にモンスターから人々を守り、時に人々からの願いでフィールドへ採集に、まさにハンターは民から尊敬される職業の一つだ。

アロンも、そんなハンターの一人。

全身を赤い鳥竜種イーオスの鱗や皮と、マカライト鉱石をふんだんに使った「イーオスシリーズ」の剣士バージョンと呼ばれる防具を着用していた。

「アロン、もうすぐ島に到着するぞ、降りる準備をしとけ」

漕ぎ手の一人が、アロンに向かい言った。

「分かりました・・・」

アロンは元気なさ気に答える。

少し細めの体型に茶色の髪、すっきりとした顔立ちにネイビー色の目。

ぱっと見、まあまあな容姿だ。

しかし、今彼の顔は強張っていた。

「・・・アロン、どうした？元気がないぞ？」

漕ぎ手の一人が心配してアロンに話し掛けた。

「いや、少し緊張しちゃって・・・」

アロンは目の前の島を見ながら言う。

アロンはこれから、あのゼナン島にある唯一の村、ピチの村でハンター業を営むつもりだ。

今、18歳のアロンは、つい最近まで大都市ドンドルマでハンター業をしていた。

第一、アロンはドンドルマ出身だから。

アロンの両親は、二人とも腕の立つハンターだった。
アロンも、そんな両親に憧れて15歳の時にハンターになった。

しかし、アロンは昔から気が弱く、いつもモンスターに怯えてばかり。

両親が両親だけに、多少なら体力はあるものの、その体力の使い所はもっぱら、モンスターから逃げる時がほとんど。

アロンがハンターを始めて一年、16歳の時に初めてドスイーオスを倒したが、同期の仲間はいヤンクックを倒していたり、ババコングを倒していたりしていた。

完璧にその弱虫の性格のせいで、周りの仲間から遅れをとり、置いてかれた。

次第に、それが原因でドンドルマにアロンの居場所はなくなっていった。

そしてさらに一年後、狩りに行っていた両親は、狩りに失敗しモンスターに殺された。

何のモンスターかは分からない。確か、古龍がどうか……。アロンはそのせいでますます弱虫になり、ドンドルマから居場所が消えていった。

そんなある日、アロンはあるチラシを見つけた。
内容は、

「現在ハンター0人、南の海域にあるゼナン島ピチの村は現在、在住してくれるハンター大募集中！まずはお気軽にご相談下さい！」

アルバイト並の気軽いチラシを見て、アロンは考えた。

（この島に行ったら、今の弱虫の僕から変わるかな？・・・いや、変わるんだ、僕は今のままじゃいけない。ちゃんと変わらないといけないんだ）

アロンは自分を変えるためにピチの村へ行く。

「おーし、到着だ！」

船はゆつくりと村の港に到着。

港の栈橋にロープを掛け、船を固定。

「・・・よしッ！！」

アロンは自らを一喝、その足で船から降りる。

・・・アロンの奮闘記は、ここから始まった！

第0戦：プロローグ（後書き）

以上がプロローグでした。プロローグなのでストーリー進展が全く無し。コメディ要素も無しです。文脈もバラバラ。はい、何かありませんでした。次回より本格的にストーリーは進展しますし、アロンの武器も判明します。そして今作のヒロインも登場予定です。お楽しみに。では次回でお会いしましょう。サヨナラ！！

第1戦：VSメラルー（前書き）

皆さんおはようございます。今現在、午前4時30分ぐらいです。昨日は眠くなく、まさかの徹夜投稿となりました。今はさすがに眠い。そのため、今回は脱字がいくつかあるかもしれません。もしあったら教えて頂くと助かります。では、【モンスターハンター弱虫ハンター奮闘記】第1戦、ご覧下さい。

第1戦：VSメラール

ピチの村・・・

ゼナン島の南に位地するこの村は四季が無い村で、一年中夏。

村の北側は穏やかな丘陵地帯となっている。

主にアプトノスやケルビと言った草食モンスターから、ジャギイやジャギイノス、オルタロスやアイルーなどいろんな種類のモンスターが生息している。

村の東側は、鬱そうとした密林地帯が広がっている。

その奥には、「水没林」と呼ばれている水が川からどつと流れだし、まるで密林が水没しているんじゃないかと思わせるほどの場所もある。

ルドロスやブナハブラなどが生息している。

そして西側。西側は人の手が行き届いており、農場として活用されている場所だ。

その名もピチ農場。

そして南側は海。来客にとっての玄関的役割や、他の島へ行く時はここから船に乗り目的地まで行くのだ。

そんな島に、アロンはやってきた。

「ここがピチの村かあ」

こんな独り言もアロンの癖の一つ。

「とりあえず村長さんの家を探さなきゃ」

ボソツとつぶやき、アロンは村の中心へ歩いていく。

ピチの村の住居のほとんどは木製。

世界中でも、かなりの南に位置するこの村は、毎日かなり暑く、これといった災害等もない。

そのため、村では風通し重視の家が目立つ。

「あれ？地図だとこのへんなんだけどなあ？」

村中心部辺りの広場。

丸い形の広場には石畳が敷かれ、ちょっとした噴水もある。

地図を頼りに広場まで来たアロンは、周りをキョロキョロとうかがう。

「あれ？確か、村長の家は噴水広場の北の道の先の・・・」

その時、

「誰かぁー！！ソイツを捕まえてー！！」

「えッ！？」

すごい叫び声が、辺りにこだました。

「な、何だ？」

疑問に思ったアロンは、声のしたほうを確認。

「・・・へ？」

何もなかった。

しかし・・・

「誰か、助けて！！」

何か、助けを求める声が聞こえる。

「・・・もしかして」

何かモンスターが村に入り込み、村人を襲っているのでは・・・

アロンは恐る恐る、声のした方へ行ってみる。

その間にも・・・

「誰かぁー！！早くうー！！」

相変わらずすごい叫び声。

（なんか事件でもあったのかな？）

などと考えるアロン。

そして、声のした方へ行ってみると、そこには魚屋があった。
ここまでは普通の風景。しかし、その魚屋の前には無数の黒い
毛の塊みたいなものが・・・。

「あ、あれは確か・・・メラルーだ!!」

しかし、気付いたときにはもう遅かった。

メラルー達は一斉に魚屋に特攻隊の如く突入。

それを阻止せんとばかりに店の店主が木の棒を振り回しメラル
ー軍に対抗している。

しかしメラルー軍兵士達は店主の攻撃をすらりとかわし、店内に
侵入。

各自好きな魚を口に加え、店内から脱出。次々に戦線離脱してい
く。

それをぼーっと眺めているアロンを、店主は見逃さなかった。

「あんた、そんな所に突っ立てないでメラルーをなんとかしてお
くれえ！」

「えっ・・・あ、ハイ!!」

ハッと我に返り、状況を確認。

メラルーだったら怖くない。

だったら大丈夫だ。

「いくぞッ!!」

アロンは背中に手を伸ばす。

やる気はばっちり。今ならいける!

しかし・・・

「あれ? 僕の〔鉄刀(神楽)〕が・・・な、ないっ!!」

武器を取るために背中にやった手は、虚しく空気を掴んだ。

現在アロンの顔は真っ青。

なんとアロンは、ハンターにとって命の次に大切な武器を何処かに無くして来てしまったようだ。

「やばい・・・あれ? 何処だっけ? まさか船だったりして・・・」

ますます青くなるアロン。

「ちょっと、あんた、何してるのよ! 早く手伝ってちょうだい!!」

店主が叫ぶ。

しかし、アロンの頭の中は自分の武器の事でいっぱいだ。

(やばい・・・どうしよう・・・!!)

そんなアロンを見た店主は、アロンからの救援を断念。

「誰かあゝ!!」

このままではメラルー特攻隊は、特攻隊のくせに犠牲者無しで、魚屋店主軍に大打撃を与えてしまう。

「今月は赤字だわあ」

店主が半泣きでそう言いかけた時、魚屋店主軍に希望の兆しが。

「皆さん!伏せて下さゝい!」

突然の声。

その瞬間、上空から無数の鉄の塊が、雨のように降り注いだ。
その鉄の塊はメラルー達に次々に当たっていく。

「ニヤッ!!」

メラルー達はたまらず魚を捨て、地中に潜り、この場から避難。
アロンはそれに見覚えがあった。

(あれは確か・・・)

「確か・・・ボウガンの拡散弾だ!!」

アロンがハッと思い出した瞬間、拡散弾はアロンにも向かって飛んできた。

「え、なんでっ!?うわっ、うぎぎやややあああ!!」

拡散弾の雨はメラルー、アロン、店主、そして売り物の魚、強盗未遂で終わった魚にも降り注いだ。

「ヤバッ・・・少し・・・やり過ぎちゃった・・・かな？」

そう言うと、魚屋の屋根上から射撃をしていた少女がストツと、下に降りてきた。

そして、うつぶせで倒れているアロンの元へやってきて・・・顔をペチペチ叩く。

「あのお・・・？もしもーし？生きてますかぁ？生きてたら返事を・・・てっうわぁあ！！！」

呼びかけの途中でムスツと起き上がるアロン。
そして辺りをキョロキョロ。

「い、生きてた！！！」

少女は目を見開き、アロンを確認。

「・・・ん？」

その時、アロンは少女と目が合った。

目の前にいたのは、アロンより若干幼いであろう少女。

体格は細くスラッとしている。

髪はショートヘアでオレンジ色だ。目は大きくクリクリしている。瞳は髪と同じくオレンジ色。

そして、彼女が着ているのは服ではなく、ハンターが纏う防具だった。

全身を楯蟹ダイミョウザザミの赤い甲殻やマカライト鉱石で作っている「ザザミシリーズ」のガンナータイプを纏っていた。

そして彼女の手には、桃毛獣ババコンガの毛皮で作られたライトボウガン、「アサルトコンガ」が握られていた。

それを見た瞬間、アロンの頭の中である回路が繋がった。

「もしかして・・・君か？僕を鉄の雨で串刺しにしようとしたのは？」

いつもは見せない、アロンのキレかけた顔。アロンだって怒るときは怒る。

「串刺しって・・・あんな所で突っ立てるあんたの方が悪いんじゃない！」

開き直って悪いのはアロンだと言ってくる少女。

「それに私はメラルーから魚を守るために撃ったのよ。私はちっとも悪くないわ」

少女は強気な態度。

「じゃあ、あれは何なんだ？」

アロンが前に向かって指を指す。

そこには、見るも無惨な魚が。

いたる所に穴があき、もう売り物にはならない事を表していた。

「あっ・・・えっと・・・」

流石に、少女は少し動揺。

「・・・あ！ほら！このサシミウオは無事だよ！！」

少女はたまたま無事だったサシミウオを発見。

「違うよ。僕が言ってるのは・・・あれ」

そこには・・・店主が仰向けで倒れていた。

怪我は無いようだが、鼻血が出ている。何ともシュールな画だった。

「あ・・・」

少女は一瞬フリーズ。

その後、ポケットからティッシュを取り出すと、気絶している店主の鼻に突っ込んだ。

そして・・・

全力ダッシュで逃げて行った。

その間、わずか2秒。
アロンはただただ、見てることしかできなかった。

第1戦：VSメラル（後書き）

以上が第1戦です。びみよくな所で終わりにしてしまい申し訳ないです。もう眠くて。アロンの武器は太刀でした。普通です。はい。で、次回は少女ハンターの名前とピチの村村長を登場させるつもりです。魚の店主も少し登場します。ではまた次回で。

第2戦：VS少女

何が起こったのだろう。

目が覚めた魚屋の店主が辺りを見回す。そこには無数の魚の残骸が・・・

「うーん」

バタッ！！

店主はまた気絶してしまった。

一方、アロンはさっき逃げたガンナー少女を追っていた。とりあえず捕まえて、一緒に魚屋さんに謝ろうと考えているのである。もちろん、魚は全部買い取るつもりだ、律儀な青年である。

「ちょ、ちょっと待って・・・」

「誰が待つか！！」

アロンは目の前を走る少女を見て、（なんて足の速い子なんだろう）なんて考えていた。

たが実際には少女はそんなに速くはない。ただ、アロンの足が遅いだけなのだが・・・

「ま、まっでえ」

「だがらまだないって・・・はあはあ」

二人とも限界が近かった。

特にアロンはもうバテバテ状態。

「しつこいなあーもう！！」

少女が十字路を右に曲がる。すると

バァン!!

少女は誰かと正面からぶつかった。仰向けに倒れる少女。

「痛ったぁーってあれ？村長さん？」

「いてて・・・ってあれ？なんだ、ルリアちゃんか!!」

少女——名はルリア。ルリア・ミサーラ。16歳。

今、ルリアがぶつかったのは、このピチの村の村長だった。名はガドラス。

ガドラス・ビルザーク。37歳。リアルな年齢だ。村長は少し太りぎみ。今はインナー姿だ。顎にはうっすらとヒゲが生えており、まさにキングオブ中年と言った感じ。少し引く。

「ルリアちゃん、どうしたの？こんなに急いで？」 「はっそうだ！村長！今変な人に追われるんです!!」

村長も充分変なのだが。 「変な人？」

「そうです。変な人に・・・ってキター！」

遠くにアロンが見える。ヘハヘハと、かなりしんどそうだ。村長は目を細めながらルリアに聞き返してくる。

「あの人？」

「そう、あの人！」

アロンに指を指すルリア。

「ああ、あの人か」

村長はルリアの方に振り向きながら言う。

「あの方はアロン君。今日からこの村のハンターになってくれる人だよ」

・・・数秒の沈黙。

「え？マジで？」

「うん、マジで」

「だってこの村のハンターってもういるじゃん。あんたの目の前に。」

「だって君だって昨日来たばかりじゃん」

実はそうなのだ。ルリアも例のちらしを見て、昨日この村に到着したのだ。アロンとルリアは見事にカブッてしまった。村長は少し迷ったが、二人とも村のハンターとして迎え入れることにしたのだ。その方が安心感があるし、剣士とガンナーだったと言うこともあったし……。

ただ、二人に互いの事を説明しておかなかったのがミスだったか……。

などと村長が考えていると……前方からアロンがやってきた。

「あ、村長さん！こんにちは！」

「あ、アロン君か。長旅お疲れさん」

「いえ。で、村長。この娘は誰ですか？」

アロンはルリアを顎で指す。

「あー……実は……」

村長は気まずそうに説明する。

この村に二人、ハンターを置くと言う事などを……。

その後、アロンの一言でルリアが魚屋に謝りに行った事は言うまでもない。

時間は流れ、今は夕方。夕日がオレンジ色に輝いている。

人口は約30人いるかいなか。道路は全く舗装されていない。のどかな辺境の村。こんな村でこれからアロンは寝泊まりし、生活し

ていく。少し不安だが、大丈夫だろう。

「・・・よし!!」 アロンはグツと拳を握る。

弱虫ハンターアロンの、弱虫克服ハンター生活はまだ始まったばかりだ。

・・・その頃、アロンを乗せてきた船では、もう既に忘れられてるアロンの太刀が、ポツンと悲しげに置いてあった。

第2戦：VS少女（後書き）

こんにちは。ついに村長初登場です！めざせ！世界一のうざキャラ！そしてアロンとルリア、メインキャラ2人登場！なので、次回は2人で狩りにいきます。アロンは今、武器は無いですが・・・なんとかなるでしょう。やっとモンハンっぽくなってきました。次回、初めての2人での狩り、お楽しみに。

第3戦：VS村長（前書き）

今回より初狩り篇スタートです。今回は導入文的な感じですよ。

第3戦：VS村長

ザザーン、ザザーン。

少し荒い海の波の音でアロンは目を覚ました。

空はどんよりと曇り、今にも雨が降りそうな天気だった。風が強い。海からは潮の香りがする。

「ここどこ？」

アロンは少し寝ぼけているようだ。ここはピチの村のアロンの家。昨日、村長に与えられたこの家は、お世辞にも広いとは言えないが、造りは頑丈そうだった。

「あっ・・・ここピチの村だった」

ベッドから起き上がるアロン。うーんと伸びをするとキッチンへ向かった。

この家はキッチン、リビング、寝室、風呂、トイレの5部屋構造。しかし、長年使われて無かったのか、風呂には蜘蛛の巣が張っており、トイレのタイルは剥がれかけ・・・。少しやだなあと感じたが、タダで住まわせて貰ってるので文句は言えない。

キッチンにある氷結晶式冷蔵庫から、キンキンに冷えた牛乳を取り出す。それを飲みながら今日の予定を考える。

まずは武器を何とかしなくては。

最悪、新しいのを買わなければならない。あまりお金がなく、素材もほとんどない。

「参ったなあ」

そう言いながら朝食の準備。とりあえずは空腹を満たそう。

冷蔵庫から砲丸レタスと激辛ニンジンを取り出し、まな板の上に乗せ、軽く刻んでいく。それを器に盛り、上からドレッシングをかける。はい、完成。

辛口サラダ。（アロンいわく料理らしい）

そして次に取り出したのは頑固パン。それを軽くスライスし、上

にワイルドベークンとチリチーズ、ケチャップをかけ、燃石炭式オーブンで焼く。部屋にぷーんという臭いが立ち込める。そろそろかなと言う時、「アロン君いる？」

ドアの向こうから聞こえる声。村長の声だ。

「はい。」

アロンがドアを開けると、そこには一本の太刀を持った村長が立っていた。「やあアロン君。昨日船屋から太刀を預かったんだけど、これ、アロン君のだよな？」

そこには昨日無くした「鉄刀（神楽）」が！

「ああー」

刀を受け取るアロン。

「ありがとうございます！」

「そうか、じゃあお礼として一つお願いがあるんだけど！」

図々しい男だ。

「実はは昨日の夜、村の北側の丘陵にジャギイの群れが発見されただ。この頃丘陵には鳥竜種が爆発的に増えてきていてね。そこでアロン君には生態系維持のため、ジャギイを20匹ぐらい狩ってきてほしいんだ」

「は、はあ……」

戸惑うアロン。たしかジャギイはランポス達と同じサイズの鳥竜種だ。一匹ではたいして怖くないが、集団で襲われると、中級ハンターでも苦戦するとか。

それ以前にアロンはジャギイの実物を見た事がないのだ。ランポスなら散々見てきたのに。

「いいかな？一応ルリアちゃんも行くって言ってるけど？」

うーん、と悩むアロン。本当は行きたくない。けど、村長の手前、断る訳にはいかない。何より、この島に来たのは自分自身を鍛えるためだ。

「は、はい。わ、わかりました。」

声が震えていた気がした。自分が情けなく思う。

「分かった。よろしく！アロン君」
村長は満面の笑み。

その頃、オーブンではパンが真っ黒に焦げていた。

第4戦：VS ジャギイ

ドクン、ドクン、ドクン……。

心臓の鼓動が早い。

変な汗がでてる。

顔は真っ青。そして両足はブルブル震えている。緊張がピークに達してきた。

「あんた・・・顔が凄い事になってるよ」

「えっ・・・はっ！」

我にかえるアロン。しかし、周りの風景を見たたん、また気が遠くなりそうだ。

ここはピチの村から北へ進んだ所にある丘陵。その名も《ダバサカラ丘陵》。フィールドの南側は草がびっしり生えた草原地帯。主にアプトノスやケルビが生息し、今もモシヤモシヤと草を食べている。

フィールドの中央部分はゴツゴツとした岩肌がむき出している。確かこのへんにジャギイの巣があるはずだ。

そして北側。北側は高い岩山が連なっている。極稀に飛竜が滞在しているらしいが、今はいないようだ。

そんな狩り場のベースキャンプに、アロンとルリアはいた。二人とも出発の準備をしている。

今回の目的はジャギイの討伐。それも20匹は最低でも狩ってこいと、村長は命令？してきた。ルリアは平気な顔をしているが、アロンはもう限界が近かった。

（なんでだろう・・・。ドスィーオスの時より緊張するなあ。）
まあ、あの時はアイツらがいてくれたし・・・。）

「ちょっと、何ボサツとしてるのよ。準備が終わったらさっさと行くわよ」

「あ、ゴメン」

「・・・もう、あんた私より年上なんですよ。もっとしゃきつとしなさいよ、しゃきつと!!」

「ゴメン」

謝るばかりのアロン。

「・・・あんたさ、昨日と今日とでは大分テンションが違うのね」
「えっ・・・?」

「昨日のテンション。昨日のテンションを今ここで出しなさい」
「え? どう言うこと?」 「え? だから・・・つまり・・・きつ、緊張するなって事よ。あっ! 勘違いしないでよ。狩り場では少しは緊張しなくちゃダメ! ただ、今そんなに緊張したら出来る狩りも出来ないよって事よ」

「ん?・・・よくわからないや」

アロンの頭には? が沢山付いている。

しかし、幾分緊張はほぐれてきた。人と会話するだけで結構ほぐれるもんなんだと、改めて感じた。

「・・・あっそ。じゃ、そろそろ行きましようか」 「あ、うん」
こうして二人はまず南側の草原エリアに向かって歩いていった。

草原エリア。エリアの中央にはオアシスとも言えるべき大きい池がある。その池を中心にアプトノスの群れがいくつか確認できる。

二人は近場にあった岩の影に隠れた。そしてルリアがそーっと顔をだす。そして辺りをうかがう。

「ここにはいないみたいね」

ルリアが振り返ると、そこには顔面蒼白の青年が岩の影に座りこんでいた。

「はぁ……。さっきのやる気はどこに行ったのよ。まったく」
「そ、そんな事言ったって……」

「あんた本当に男なの？なんか弱い女の子に見えるんだけど」
「仕方ないだろ、怖いものは怖いんだから」

「うわっ、まさかの開き直りい！」

「べ、別に開き直るわけじゃ……」

「！！。しっ。静かに」 「???」

静まる空気。静かな静寂の時間が流れる。すると 「ギヤオ、ギヤヤヤヤオオ」

（この鳴き声は……） ルリアがそーっと岩から顔を出す。そして、池の方を見てみる。

そこにいたのは、灰色の草食モンスター、アプトノス……ではなく、ピンク色の小型のモンスターだった。大きさは成人男性の腰ぐらい。目は鋭く、口からは鋭利な牙が見える。

それは肉食獣、鳥竜種ジャギィ——二人が探していたモンスターだった。

「みーつけた！」

「見つけてしまった」

全く反応の違う二人。

目の前にいるのはジャギィが5匹。本来、ドスィーオスを倒したことがあるアロンにとっては簡単のはずなのだが……

「どうしよう……」

アロンがあわわわしていると、ルリアが軽くニヤツと笑った。

「よし、じゃあここは私が考えた作戦を実行するわよ！」

「さ、作戦!？」

アロンはビックリ！しかしルリアはそんなアロンを無視して作戦の説明を開始する。

「まず、あんたは向かいの岩まで行き、岩の影に隠れる。」

ふと、アロンは岩から少し顔を出してみる。なるほど、池を挟んだ向こう側にこの岩と同じくらいの岩がある。

「どうやって向こうまでいくのさ!」

今、ジャギイ達はこちらから見て、左側の方で5匹まとまって池の水を飲んでいる。

「そんなの簡単じゃん。池の右側を這って進めばジャギイにはバれないよ!」 「そ、そんなあゝ」

露骨に嫌そうな顔をするアロンを横目に、説明を続行する。

「で、説明の続きね。向こうに付いたら私の合図で一気に飛び出して、ジャギイに斬りかかって!」

「えー!?!」

「そうするとジャギイはあんたに気を取られこっちに背を向ける。その隙に私がボウガンで奴らを狙撃する。そして、両方から攻撃を受けて混乱しているジャギイにあんたがとどめを刺す。わお! 我ながら完璧な作戦ね」

「マジでか?」

「マジでよ。ほら、さっさと行った!」

そう言うと、ルリアは思いっきりアロンをプッシュ!!

「うわっ!!」

よろめきながらも、何とかバランスを保ったアロン。

(あ、危ないなあ)

アロンは一瞬迷ったが、仕方なく震える体に鞭打って、恐る恐る前へ進み始めた。途中、ジャギイがこっちに気が付くのではないかと思うと、背筋が凍りそうになる。

時間にして約30秒ぐらい。しかしアロンにとっては凄く長く感じた。

何とか向かいの岩に到着、さっと岩影に隠れ、ルリアの合図を待つ。

シーン、と静寂な時間が流れる。

その時、ペチャットとした音が聞こえた。それはペイントボールを思いつき岩に叩きつけてでた音。

これが合図だった。

（もう、行くしかないんだ。自分を変えるんだ）

アロンは決心をつけた。恐怖を押し込めて背中越しにある刀――鉄刀（神楽）を抜き放つ。その刀はシルバーに輝いていた。

「うおおおおおおおおお」

雄叫びをあげ、一番近くにいたジャギイに斬り下ろしをしかけた。しかし、アロンに気付いたジャギイはとっさに右へ攻撃回避のジャンプ。

鉄刀（神楽）は空気を斬り、ジャギイがさっきまでいた地面に叩きつけられた。

「ギャオ、ギャヤヤオオオ」

残りのジャギイが全員こっちを向いて威嚇。それにビクツとしたアロンは少し後ずさる。ジャギイはそれを見逃さなかった。

まず、右にいた2匹がアロンに跳び掛かる。

アロンはとっさに左へ回転回避。すぐ後ろにジャギイが着地した。それに気を取られると、1匹が前方から飛び掛かってきた。

しかし、何かがおかしい。そのジャギイはアロンの左側を素通りすると、地面にバウンドし、動かなくなった。

そのジャギイの腹にはボウガンの弾、通常弾レベル1が刺さっていた。

（ルリアだ！）

ジャギイは完全に混乱しているらしい。あっちこっちをキョロキョロ見ている。

（いまだ！！）

アロンは自らの太刀を掲げ、近くにいた1匹に刀を振り下げた。ジャギイは一瞬反応が遅くれ、攻撃をもろに喰らう。

ジャギイはアロンの攻撃になんとか耐えが、アロンはそのまま刀

を自分に対して垂直にし、突きを放つ。

ジャギイはそれももろに喰らい、地面に突き倒された。そして動かなくなった。アロンはルリアの方を見る。彼女の周りには2匹のジャギイの死体が。最後の1匹がアロンに飛び掛かってくる。アロンはそれを回転回避。そしてすぐに起き上がり、目の前にいるジャギイに向かい、太刀を放つ。

グサッ!!

・・・その一撃でジャギイは動かなくなった。

「・・・ふう」

アロンは軽く息を吐き出す。

(な、何とかなった・・・)

・・・池にいたジャギイ5匹は、二人のハンターの手により、見事討伐された。

第5戦：VS ジャギィノス

ピチの村から北に数キロ離れた場所にある、ギルド認定の狩り場、《ダバサカラ丘陵》。

今、そこには5匹のジャギィを倒したばかりの、二人のハンターがいた。もちろん、アロンとルリアだ。

「あんた、やれば出来んじゃない」

「いや、まぐれだよ・・・」

そう言いながら、アロンはジャギィの血が付いた太刀を一振り。ジャギィの血を落としてから、鞘にしまった。

「うーん・・・。今度こそここにはいないみたいだから、中央の岩場地帯、行ってみる？」

「えっ!!」

アロンは少し躊躇った。岩場地帯と言えば確か、ジャギィ達の巣があるはずだ。

「さ、行くわよ!」

「ちょ、ちよつと待ってよお」

アロンはあたふたと出発の準備を始めた。

中央の岩場地帯。足元はゴツゴツしておぼつかず、時折、凄く強い風が吹き抜けてくる。

(何か歩きづらいなあ) アロンの足は、ゴツゴツの足場と緊張

でフラフラだ。

「・・・なんか喋ってよ、空気が重いんだけど」
ルリアからの突然の要望。

「え！？えーっと？」

アロンは考える。

（喋べれてことは、場の空気を明るくしたいと言うことだ。暗くなるようなワードは厳禁。なら、何がいい？）

そんな事を考えながら歩いていたので、地面のでこぼこに気付かず・・・

「うーん・・・っう！？」

見事につんのめった。

「・・・全く、アンタは何をしてんのよ」

呆れ顔のルリア。

「あ・・・ははは」

笑ってごまかす作戦に出たアロン。

その時、彼の目の前にはルリアの姿が。

（あ！そうだ！相手を褒めよう！）

話の話題発見！！

（ん？何を褒める？服？いや、防具だから意味ない。射撃の腕？いや、まだ実際にこの目で見たことはないし・・・）

考えすぎのアロン。

（じ、じゃあ顔は？意外と目、大きいし。って言うか、よくよく見たら、案外可愛いな）

いつの間にかルリアの顔をまじまじと見ていたアロン。

「なっ！なに？なんか顔に付いてる？」

その一言で、アロンは今、ルリアの顔をずーっと見ていたということに気が付いた。

（ハッ！！）

一気にパニックになるアロン。

（早く何かを褒めなくちゃ！）

それだけが頭に浮かんだ。その時、アロンの目にはルリアの防具「ザザミシリーズ」のザザミレジストが入ってきた。それも胸の部分が少し削れている。

そして、超パニックっていたアロンは、とんでもないワードを口にした。

「ル、ルリアって結構体つき綺麗だよね！？なんかとってもセクシー・・・ん？」

その時、アロンは冷静になった。

（ん！んん！僕は何を言ったんだ！！）

その時

「な、なに言ってんじゃ！！っこおのお弱虫エロ豚外道野郎がああああ！！」

顔を真っ赤にしたルリアの強烈な蹴りがアロンの腹にクリーンヒット！！。

「ぐへええええ！！」

かなり飛ばされるアロン。凄いスピードで。

「最っ低えね」

ルリアは真っ赤になりながらくねくねもじもじ。

その頃アロンは、ゴツゴツした岩場に体をぶつけながら、なんとか停止、その場に倒れた。

「痛ったあゝ」

その時、顔に何やら温かい水？みたいな液体が一滴かかった。

ぴちゃ！

「ん？」

そーっと目を開けるアロン。

そこには、上からこちらを凝視するジャギィ・・・より一回り大きい個体の鳥竜種、ジャギノスが・・・

「っ！ぎゃーーーー！」

さっきの温かい液体はジャギノスの唾液だ。

ルリアはアロンの叫び声がした方を向く。そこにはジャギノスが3匹で、倒れたアロンを囲んでいる。

そして、そのうしろには無数のジャギイを従えた、ジャギイの親玉、鳥竜種ドスジャギイの姿が・・・。「う、嘘でしょ!」

ルリアはとりあえず、アロンの救助をするため、ジャギノスに向けてライトボウガン、アサルトコンガを構える。弾は通常弾レベル2をチョイス。

「いけっ!!」

まずは3発をアロンの真上にいるジャギノスにむけて、発射した。バン!バン!バン!

見事命中。突然の攻撃にジャギノスはひるんだ。「アロン、早くその場を離れて!」

アロンはそれを聞いて、自分の勘に任せ、右にとんだ。

しかし、その先には大きな恐竜みたいなモンスターが・・・

「・・・っ!!」

その時、初めてアロンはドスジャギイの存在に気が付いた。

ドスジャギイの周りには無数のジャギイが。

「グガガガアアアアアアアアアアアオオ」

ドスジャギイが雄叫びをあげる。

「うっわ・・・」

ポカンとするアロン。

・・・今、アロンとルリアの、命懸けの狩りが始まった。

第6戦：VSドスジャギイ前編（前書き）

今回はルリア目線でストーリーは進んでいきます。
そんなにドスジャギイは出てきません。

あと、今話は

第6戦：VSドスジャギイ前編

「グガアアアアアアアアオオ!!」

ドスジャギイの雄叫びが響いている。

「ギャオ!ギャオオオ」 それに合わせてジャギイ達も雄叫びを上げる。

「アロン!よく聞いて」 遠くの方からルリアの声が聞こえた。

「いい、今から私達だけでドスジャギイ達を倒すわよ!」

「ええっ!?!」

アロンビックリ!

普通大型モンスターを狩猟するときは、前もってモンスターの生態や攻撃方法、弱点部位や有効属性を調べ、それに合った最善の状態で狩りに出る。

しかし、今はそう言った情報は何も無く、大型モンスターとも突然の遭遇。普通だったら一旦ベースキャンプに引き返す、もしくは狩猟自体をリタイアするのだが・・・

「もしここで私達がリタイアしたら、ジャギイ達は間違いなく村を襲うわ」

確かに今ここでリタイアしたら、ジャギイ達は野放しになる。しかもここから数キロの所にはピチの村がある。つまり・・・

アロンは自らの腰に付けているアイテムポーチの中身を思い出す。たしか、

応急薬・回復薬・携帯食料・砥石・ペイントボール・元氣ドリンクが数本ぐらいだ。

「私がジャギイやジャギノスを引き付けるから、あんたはドスジャギイをお願い」

「えええ〜!」

恐怖のあまり声が裏返るアロン。

「じゃ、よろしく！」

そう言うのと、ルリアはアサルトコンガを構え、ジャギノスへ向ける。

今の状況は、ドスジャギイが1匹・ジャギノスが3匹に、ジャギイが・・・えーっと・・・たぶん10匹程度。

ルリアは一番手前にいたジャギノスに向かい、引き金を引いた。ちなみに弾は通常弾レベル2。

「ギャオオオッ！」

見事命中。ジャギノス3匹はルリアを発見。3匹ともこっちに向かって走ってくる。

しかし、まだ充分距離がある。

ルリアはボウガンのスコープを覗く。そして手前のジャギノスの頭に向かって狙いを定める。

「発射あ！」

ルリアは引き金を引く。銃口から弾が勢いよく発射される。

そして見事に弾はジャギノスの頭を貫いた。弾が当たったジャギノスは勢いよく地面に倒れた。そして二度と動く事は無かった。

それを見た残りのジャギノス達は皆動揺している。ルリアはそれを見逃さない。

すぐさまボウガンを構え直すと、再びスコープを覗く。狙いは二匹の内の左側の奴、その頭。

狙いを定めた。そして引き金を引く。

ジャギノスはそれに一瞬早く気が付いた。ジャギノスは右に跳躍。しかし・・・。

ジャギノスは勢い余って右側にいたジャギノスに激突。二匹ともバランスを崩し、その場に倒れた。

（バカだ、こいつら）　そんな事を思いながら、ルリアは弾を通常弾から散弾レベル1に変更。倒れている二匹に向かい、容赦な

く撃つ。撃つ。撃つ！

ジャギノスは、最初こそはもがいていたが、次第に動かなくなつた。

ルリアはそれを確認すると、今度はドスジャギイの方を確認する。そして、ドスジャギイと覚束ない手つきで戦うアロンを発見。周りにはジャギイ達もいる。

それを確認すると、ジャギイ達に向かい散弾を撃つ。

ジャギイ達に弾は命中。ジャギイ達はルリアを発見すると、一斉にこちらに向かって走ってきた。

（単純な奴らなこと）

そう思いながら、散弾を撃つ。相手は10匹程度。狙いを定めている暇はない。ジャギイ達がルリアの前に来るまでに、もう8匹は死んでいた。目の前には3匹。どうやら11匹いたらしい。

3匹ジャギイの内の1匹がルリアに向かって飛び掛ってくる。

ルリアは回転回避で避ける。すると、3匹ジャギイのもう1匹が飛び掛ってくる。

それもルリアは回転回避で避ける。そして立ち上がり、飛び掛ってきた二匹に向かい、ボウガンを向ける。そしてスコープを覗いたその時！

「ギャオ！ギャオ！」

ルリアが振り返ると、そこには3匹ジャギイの最後の1匹が、いつの間にか後ろにいた。

「・・・やば！」

ジャギイの攻撃を回避するために回転回避の姿勢に入るルリア。しかし、もう遅かった。ジャギイは思いつきり地面を蹴り、ルリアに体当たり。それをもろに喰らったルリアはバランスを崩し、地面に倒れた。

「うわっ！！」

そして、地面に倒れているルリアに向かって、ジャギイ達は牙をむけた。

（しまった！油断した）　ルリアはボウガンを振り回し、抵抗を試みるが、効果なし。

3匹ジャギイの1匹がルリアの左手に噛み付いた。　「キヤヤヤアアア！」

ルリアは悲鳴を上げ、目をつぶる。ガンナーの防具は剣士の防具よりも動きやすさを重視しているため、防御力が低い。

そのため、ジャギイの牙がルリアの腕の防具「ザザミガード」を貫き、ルリアの腕に直に刺さる。

物凄い激痛。自然と涙が出でくる。血が腕から流れ出ているのがわかる。

「う・・・こんなところで・・・」

ルリアは腹に力をいれ、腹筋だけで起き上がろうとしたが・・・その時、腕に噛み付いていたジャギイが、さらに深く牙を入れた。

「うつ・・・」

何とも細々しい悲鳴がルリアの口からこぼれる。

（もう、死ぬのかな）

そんな言葉が頭にうかんだ。自分が油断をしたばかりに、ジャギイの餌になる。体に力が入らない。たぶん他の2匹が体を押さえつけているのだろう。

（もう・・・だめかも・・・）

ルリアに限界が来ていた。

腕が麻痺してきた。感覚がない。

（最後に・・・あいつに会いたかったな・・・）

・・・その時だった！

「ギヤオオオッ！」

ジャギイの悲鳴が聞こえた。

そして、ルリアを押さえつけていたジャギイと、左腕を噛んでいたジャギイの感覚が無くなった。

恐る恐る目を開けるルリア。

すると、目の前には3匹のジャギイの屍が・・・

「だ、大丈夫？ルリア」

ルリアがハッと振り返ると、そこにはボロボロになった防具を着た・・・

アロンの姿があった。

第6戦：VSドスジャギイ前編（後書き）

こんにちは！第6戦、いかがだったでしょうか！？ アロンVSドスジャギイ、次回、ついに決着です。一体どっちが勝つのでしょうか？ 次回、VSジャギイ篇完結、ご期待下さい！！ ではっ！

第7戦：VSドスジャギイ後編

ルリアは目を疑った。

目の前にいるのは、ジャギイすら怖がっていた青年アロン。しかし今、彼はなんの躊躇いもなくジャギイを斬り捨てた。

「あんた・・・ジャギイ怖くないの？」

当然の質問をした。

「え？あ、ううん、こ、怖いよ。本当は今すぐにでも逃げたい。でも、ルリアが大変そうだったから助けにきた・・・」

震えている声でそう言うとアロンは、太刀を鞘にしまい倒れていたルリアをお姫様抱っこ。

「ちよっ・・・何してるのよ！」

「な、何って、ルリアを安全な場所まで運ぶんだよ・・・つおつとつと！」

そう言うと、アロンはゆっくりと歩き始めた。

・・・かなり覚束ない足取りで。

「違う！あんたまだドスジャギイ倒してないんでしょ！なのになんでこんなこと・・・それに私、自分で歩けるから」

「ドスジャギイには眠り生肉的なものを食べさせて眠らせてある。

あとルリア、右足怪我してるみたいだから。抱っこは当然だと・・・」

「ね、眠り生肉！？って、あんたそんなの持ってたの？」

「あ、違う！携帯食料にそこらへんに生えてたネムリ草をちぎったヤツを混ぜた物を置いてきた」

「なっ・・・」

ルリア絶句。

そしてしばらく歩き・・・

「このへんでいいかな。ルリア、降ろすよ」

「あ、うん」

アロンはルリアをそくつと降ろすと、回復薬をルリアに手渡す。ルリアはそれを右手で受け取り、一気飲み。その間にもアロンはポーチからタオルを取り出すと、応急薬をタオルに染みらせ、ルリアの左腕に巻いた。

「痛っ・・・」

かなり滲みる。

「だ、大丈夫？」

「う・・・なんとか」

左腕にタオルを巻き終えると、アロンはポーチから元氣ドリントを取り出し、ルリアにわたす。

「・・・ありがとう」

ルリアは元氣ドリントを受け取り、ちびちび飲み始める。

「・・・よし、じゃ、じゃあ僕はドスジャギイでも・・・狩って・・・こようなか・・・」

そう言うときアロンは立ち上がり、ドスジャギイの元へ歩きだす。

アロンの足は震えていた。

「あんた、大丈夫なの??？」

「・・・す、すごい怖いよ。けれど僕がやらなきゃいけないんだ。じゃないと・・・」

そこまで言うときアロンはドスジャギイの元へ歩いて行った。

(い、今こそ自分を変えるんだ!!！)

アロンが元の場所に行くと、ドスジャギイは眠っていた。携帯食料は無くなっている。

「えっ!?! 効果あったんだ!?!」

小声でツツコミ、背中の太刀――鉄刀「神楽」を抜き放つ。

手が震えている。変な汗が出てきた。今すぐにも逃げ出したい・

けれど逃げない。逃げられない。つーか逃げたらいけない。恐怖を胸にしまいこみ、太刀を天に向け掲げ上げる。

そして、寝ているドスジャギイに向けて太刀を振りさげる。

「えーっ！！！！」

グサッ！！

「ギャオッ！！」

突然の激痛にドスジャギイは飛び起きた。

アロンは震える腕に鞭を打ち、太刀を振るう。

「うおおおおおおおおお！！！」

突き・突き上げ・振り下ろし・回転斬り・・・

次々に相手を切り刻んでいく。

「グガアッ！！」

突然の痛みに耐えかねたドスジャギイは後ろへ跳躍した。

「っ！！！」

アロンはドスジャギイを追う。

ドスジャギイはそれを見て、身を屈める。そしてドスジャギイは屈めた体をバネにして、体当たりを仕掛けてきた。

「うわっ！！」

アロンはとっさに右側へ回転回避。ドスジャギイの尻尾がちよつとかすった。（あ、危なっ！）

アロンは再び刀を持つと、体当たりを終えたばかりのドスジャギイに斬りかかる。

一方、ドスジャギイがこっちに振り返ろうとしている。

アロンは震える腕に鞭を打ち、一気に斬り下ろしを仕掛け、見事に命中。

「グガアアアアア」

ドスジャギイは悲鳴を上げる。しかしアロンは手を休めずに斬

りかかる。

するとドスジャギイは突然回転し始めた。いわゆる回転連続体当たりと言うやつだ。一回一回に勢いがあり、もし喰らったら骨の一つぐらひは確実に折れるだろう。

アロンはその攻撃を勘一発・・・と言うか偶然よけた。

(こ、怖ええ!!!)

そう思いながらもアロンは回転体当たりが終わったドスジャギイに向かい斬り掛かっていく。

「おりやややややああああ!!!」

グサッ!! ブシャ!! ドスジャギイの背中から大量の血が放出される。

「グアオオオオオン」

またしてもドスジャギイの悲鳴。

しかし、前回の痛みの悲鳴より響きがあり、何となくアロンには違って聞こえた。

「・・・ん？」

その時、近くの岩場からジャギイがひよっこり顔を出した。それも3匹。

「うっ!!」

アロンはびっくり。さっきの悲鳴?は、きっと仲間達へのSOS信号だったのかもしれない。

(まづい!!このままじゃ・・・)

その時、ドスジャギイとジャギイ3匹が同時に飛び掛ってきた。

「ひいっ!!」

アロンは回転回避で攻撃をかわす。しかし、そこで勢い余って近くの岩に頭から激突。

「おふっ!?!」

一瞬アロンの頭には星が回った。

その瞬間をドスジャギイは見逃さ無かった。

ドスジャギイは足に力を入れ、思いつきり突進。アロンに突っ込

んできた。

「うわああ！！」

それに気が付いたアロンは刀を鞘に納め、全力でダイビングジャンプ。

ズザ〜と砂埃を上げつつ何とかかわした・・・と、思ったその時、ジャギイの1匹がアロンに向かって飛び掛かる。

(くそおおっ！！)

見事に攻撃を喰らい、よろけるアロン。そこにジャギイ3匹が一齐に襲い掛かる。

アロンはすぐさま抜刀し、回転斬りを放つ。そしてジャギイ3匹に見事命中し、3匹中1匹は当たり所が悪く、絶命した。

アロンはすぐさまドスジャギイを確認する。

・・・いた。遠くからこっちを見ている。

(なんだ？ボスはだまって高見の見物か？)

しかし、これはアロンにとってはチャンス。

すぐさま狙いをジャギイ2匹へ変更する。

まず手前の1匹に向かい突きを放つ。ジャギイはそれだけで絶命した。

そしてこちらに向かい、残る1匹が飛び掛ってくる。アロンは先ほどの突きとの連携で突き上げを放つ。それを見事に喰らったジャギイは地面に派手にバウンドし、絶命した。

残るはドスジャギイのみとなった。

「ふう〜・・・」

アロンは一旦深呼吸。

その間に、ドスジャギイがこちらに向かい歩いてくる。

その時、たまたまアロンはドスジャギイと目が合った。

その瞬間、急に恐怖と今までの疲れがどっと押し寄せてきた。

「・・・・・・・・っ！！」

ドスジャギイはどんどん迫ってくる。

しかしアロンは動かない。いや、動けない。

今まで何とか押さえこんでいた恐怖が膝を震えさせ、今までの疲れが脳の判断を鈍らせた。

ドスジャギイが身を屈めた。体当たりがくる。

しかし、アロンは恐怖と疲れで動けない。

（誰か！誰か助けて！）

ここに来て弱虫スキルが発動してしまった。

（ヤバイヤバイ！！）

アロン大ピンチ！！

スッ・・・グサッ！！

その時、何かがドスジャギイに刺さった。それと同時にドスジャギイは地面に倒れ、もがいている。

体当たりは不発で終わった。

「・・・これで貸し借りなしだからね」

後ろから声がする。振り返ると、そこにはルリアの姿が・・・。
腕に巻いたタオルは真っ赤に染まり、顔は蒼白だった。ボウガンは右手だけで操作している。

「っ！！ルリア、だっ大丈夫なの！？」

「大丈夫よ。そんな事よりあんた、なにぼーっと突っ立ってんのよ」

「そ、それは・・・」 その時、ドスジャギイが再び立ち上がった。その目は怒りに満ちており、口からは息をハーハー出している。

「はぁ・・・はぁ・・・。少し、やばいかも」

ルリアはとても辛そうだった。

「・・・ルリア、さっきはありがとう。も、もう僕は大丈夫だから、後ろに下がっていいよ」

恐怖で強張った顔で、強引に笑顔を作るアロン。

「えっ・・・」

驚くルリア。

「あのドスジャギイはもう、結構弱ってる。だから僕が気刃斬りでもすれば決着は付くと思う・・・」

残念ながら、声は緊張&恐怖でカスカス。

「本当なの？ そんな声で言われても説得力が・・・」

「大丈夫、多分・・・」 そう言うのアロンはドスジャギイと決着を付けるため、前へ進んだ。

足はガクガク。ぶっちゃけ泣きたい。

しかしアロンはそれをグツと堪える。

お互いを見つめ合うアロンとドスジャギイ。静寂の時間が流れる。

「・・・よしっ!!」

先手を打ったのはアロン。連気は溜まっている。あとは自らの太刀に全力を注ぐだけ。

「グガアアアアア！」 ドスジャギイもこちらに向かい突進してくる。ドスジャギイも相当疲労しているはずだ。

お互い、これが最後の一撃だ。

「うおおおおおおおおお!!」

アロンは恐怖を押し込め、気刃斬りを放つ。

「グガアアアアアアアアアア!!」

ドスジャギイは体当たりだ。

ズサッ・・・!!

砂埃が凄い。

しかし、ルリアは見た。砂埃の中、アロンがドスジャギイを斬り、ドスジャギイが倒れていく所を・

砂埃がはれた。ルリアの目前にはドスジャギイの死体と、その死体を上から見つめているアロンの姿があった。

「あ・・・僕、勝った・・・あのドスジャギイに・・・勝った！！」

その日、その丘陵には、一人の青年の、半泣きの勝利の雄叫びが響いたと言う。

第7戦：VSドスジャギイ後編（後書き）

こんばんは！ついに決着が付きました。アロンの勝利です。で、実はジャギイ篇、今回で完結予定でしたが、あと1話だけ、ジャギイ篇のエピローグ的な物を書きたいと思っています。なので、次回が、正真証明のジャギイ篇最終話となります。その後は何篇にするか、現在模索中です。皆さん、楽しみにしていて下さいね。あと、ジャギイ篇についての感想、意見を募集します。それにより、次のストーリーの構造をどうしようか考えたりしたいと思うので、感想等があったら送って下さい。お願いします。では次回予告。ドスジャギイに勝利したアロン達は、村で宴会を・・・では、また次回で会いましょう！！

第8戦：VS酔っ払った村長（前書き）

ジャギイ篇最終話。今回はシリアス要素多めの会話中心です。

第8戦：VS 酔っ払った村長

ドスジャギイとの戦いから数時間後、二人は村の入口まで戻って来ていた。大量のジャギイ類の素材をもって。

「じゃあ、村長への報告は私がしとくから、あんたは先、帰っていいよ」

ルリアがしれっと言う。

「え、いいよ。報告くらい僕が行くよ。それにルリア、怪我してんだよ？早く診療所行ったほうが・・」 「もう大丈夫だから。出血も止まったし、これくらい平気だから。ちゃんと報酬も半分あんたに渡すからさ」

「・・・？分かった。じゃあよろしくね」

そう言うときアロンはルリアと別れ、家に向かい歩いていった。

家に付いたアロンはそのままベッドにダイブ！！

突然、何かが崩壊したかのようにわんわん泣き出した。

「ま、マジで怖かったあゝゝゝ！！」

本当の事を言うと、ドスジャギイを見た瞬間、恐怖が大きく、今にも泣き出しそうだった。凄く怖かった。ちよっとちびった。

もしあの時、アロン一人だったら、間違いなくあの場から逃げただろう。村の事よりも、自分の安全を優先して。

しかし、あの場にいたのはアロン一人ではなく、ルリアもいたのだ。

女性の前で格好悪い姿は見せたくない。アロンにも少しぐらい男のプライドというものがある。

それに・・・何故だか、アロンの中にルリアを強く守りたいと言う気持ちがあったのだ。

もちろん、まだ出会って少ししか立ってないので、彼女の事はほとんど知らない。

しかし、ルリアがジャギイに襲われてる時、アロンは自分でもびっくりするような行動をとっていた。

ドスジャギイに向かい眠り携帯食料をなげ、ルリアに群がるジャギイ達を、なんの躊躇いもなく斬る事が出来たのだ。

なんかのスイッチでも入ったのだろうか？

その後、ルリアを安全な場所まで運んで、応急処置をし、行きたくないと言ってる脳に鞭を打ち、「じゃあ僕はドスジャギイでも狩ってきますか」って格好付けた所までは覚えている。

その後のドスジャギイ戦は、あまり覚えていない。ただ一心にルリアを守りたいって考えてた気がする。

そんな中でただ一度、記憶がはっきりしている時がある。ドスジャギイと目が合った時だ。

あの時は足が動かず、凄くやばかった。

けど、助けにきてくれたルリアをみたら、また恐怖心がなくなり、ついでに記憶も無くなった。

気づいた時にはもう、帰り道の途中だった。

なんでだろう。涙が止まらない。いまだに恐怖心がある。震えが止まらない。怖い・・・

アロンがふとベッドから起き上がると、辺りはいつの間にか夜になっていた。たしか今日はアロン&ルリアの歓迎会と、ドスジャギイ討伐成功記念祭が村の中央広場で行われるらしい。僕が主役なので絶対に来いって言う内容の手紙がポストに入っていた。

アロンは着替えるのが面倒臭さかったので、防具のままで行くこ

とにする。一応、イーオスヘルムは脱いでいくことにした。

中央広場に行くと、既に宴は開かれており、もう何人かは酒に酔いつぶれ、熟睡している。

「おう！アロンくん、遂に来たか」

呆然としていたアロンに、顔を真っ赤にした村長が話しかけてきた。

「もう始めてたんですね・・・」

「あはははは！アロンくんが遅すぎるんだよ」
バシバシとアロンの肩を叩く村長。

「・・・すみません」

「あはははは！気にするな！　　おいみんな！本日の主役のお出ました」

全員、酒に夢中。

「あはははは！気にするな！あはははは！」

「・・・はい」

「まあアロンくん！こっちへ！腹減っただろ！」

「あー・・・はい」

アロンは村長に強引に連れてかれ、広場に設けられていたいくつかのテーブルの内、一番端っこのテーブルに座らされた。

「ほら、食べて食べて」　アロンの向かいの席には例の魚屋の店主が、右には村長、左には見た事のない老人が座っていた。

そして、その老人がアロンに気付き、ニコッと挨拶。

「はじめまして。あなたがアロン君かな！？ワシはこの村で武具

屋を営んでいる、チェラグ・マーチンと言う者じゃ。よろしく」

マーチンは右手を差し出しながら挨拶。

アロンはそれにつられ、左手を差し出し、挨拶しながら握手。

「あ、どうも。アロン・プラクティアです。よろしくお願いします」

自己紹介が済むとアロンは、テーブルの上に置かれた料理の数々をみて、とりあえずスネークサーモンのムニエルに手を伸ばす。

そして「いただきます」と手を合わせ、パクつと一口。

「あ、うまい!!」

程よい焼き具合のスネークサーモンは、外はカリカリ、中はふんわり。とても美味しい。

そこでアロンはある事に気が付いた。

「村長、ルリアはどこですか?」

村長は相変わらず顔真っ赤。

「ん? ルリアちゃんなら今頃、診療所のベッドの上だと思うが?」

「えっ・・・!」

村長が言うには、狩りの報告にルリアが来た時、凄い熱があり、足元が覚束ない状態だったらしい。村長がそれに気付くと、急いで診療所に連れて行った。診療所での診断の結果、どうやらジャ

ギィに噛まれた時の傷から何らかの病原菌が侵入、現在ルリアは40度近くの熱が出ている・と、言うことだ。

それを聞いたアロンは、村長に礼を言い、診療所に向かい歩いていった。

ピチ診療所。村唯一の医療機関だ。

アロンは医者許可を得て、ルリアの寝ている病室に入室。

部屋はそんなに広くなく、ベッド一台と、小さいテーブルがひと

っだけの部屋。

そして、そのベッドにルリアは寝ていた。

額からは汗が流れており、顔は青く、苦しそうだった。

（僕にもっと力があればな・・・）

アロンは思った。

広場で宴を楽しんでいる村人達、村長やマーチンさん、そしてルリア。

みんなの平和を守りたい。

アロンは自分でもびっくりした。

この島に来たのは自分自身を鍛えるため。

しかし、今は何となく違う。

ドンドルマにいた時は、弱かった自分の事で頭はいっぱいだった。そのせいか、他人の顔まで見る余裕はなかった。そして、他の人は、そんなアロンに見向きもしてくれなかった。

しかし、ピチの村人は、そんなアロンを知ろうとしてくれる。村長、マーチンさん、宴を開いてくれた村のみんな。そしてルリア。

・・・ん？まてよ？ルリアってこの村の人なのか？ 確か僕と同

じちらしを見て来たと言ってたし・・・。

じゃあルリアはどうしてこの村に来たんだ？

こんな小さな村、ちっとも稼ぎになんかならないのに・・・

ベッドを見ると、ルリアは今だ苦しそうに寝ていた。

少し、ルリアの過去について知りたくなったアロンだった。

第8戦：VS 酔っ払った村長（後書き）

はい、ジャギイ篇完全終了です。最後のほうがグダグダになっちゃいましたが、まあ、いいかなって。（よくない！！） で、今篇はアロンのキャラがあまり定まっていなような気がするのは僕だけでしょうか？ 一応次篇では弱虫キャラたっぷりで行きたいと思います。そして、メインハンターの三人目も登場予定です。そしてさらに、ルリアの過去が……。では次回予告。ピチの村に新たなハンターが……。新章お楽しみに！！

第9戦：VS貿易船（前書き）

今話より新章突入です。新ハンターも登場します。では、第9戦、ご覧下さい。

第9戦：VS貿易船

「た！大変だあ！」

・・・まだ太陽が昇ったばかりの、朝早くのピチの村に響く村長の声。

「んだよ・・・」

村人の一人が家の外へ。そこで村長を確認。

「つたく、うるせーぞ！！」

それにつき、他の村人まで起き出す。

「安眠妨害するな！」

「今何時だと思っただよ」

「すこしはだまれブタ村長！」

『そーだそーだ！』（村人一同）

村人達からの安眠妨害に対するお怒りの声が村長の心に大ダメージを与えた。「そ、そんな・・・僕はただみんなに・・・」

その時、武具屋からマーチンがひょっこり顔を出し、少しお怒り気味の声で質問。

「何か・・・事件でもあったんですか？」

「いや・・・そんな事件とかではなくて・・・」

おどおど答える村長。

「じゃあ後でいいだろうっ！！」

そして、安眠妨害されたマーチンはでっかい声で村長を怒鳴り付け、武具屋の中へ帰っていく。

「・・・そんな」

村長は半泣きになりながら走って家に逃げ込んだ。

その日の午後、村長は村人達を村の中央広場に集めた。村長の目

そして、その日は来た。

村の港には村人が総出であるものを待っていた。

「村長、まだか？」

村人の男が村長に問いかける。

「もうすぐだ。・・・ああ！？見えた！！」

その時、海の向こうに一隻の大きな船がみえた。

「あれ？みんな何してんの？」

「ん？」

村長が振り返ると、そこにはアロンがいた。

「なんだ、アロン君かぁ・・・」

「ねえ、みんなここで何してるの！？」

「そういえばアロン君には言っていなかったね」

「え？何が？」

「実は・・・」

その時、

「村長お！船、到着しましたよ！船長に挨拶しに行きましょう！
！」

そう言いながら村人の男が駆け寄ってきた。

「マジで！！いくいく」 「行きましょう村長！」 二人はアロンを無視し、向こうに見える大きな船目掛けて走って行ってしまった。

「まさかのシカト・・・」

アロンの心は少しダメージを受けた。

船来航から数時間後、アロンは自宅で昼寝をしていた。この前のドスジャギィ狩りの報酬が思った以上に多く、一週間は何もしなくても生活出来そうなほどだった。

潮風が気持ちいい。ザザーンという波の音が子守唄に聞こえる。
なんかうとうとしてきた。

バンバンッ！！

「な、なんだぁ！？」

突然、誰かが家のドアを叩いた。

「アロン君、いるかい？」

「ん、この声はまさか……」

アロンは何となくだか悟った。

「はい、今出ます」

そう言うと、アロンはベッドから起き上がり、ドアを開けた。

そこにはやっぱり言うか村長と、もう一人、背の高い青年が立っていた。しかも、彼が着ているのは普通の服でなく、ハンターが着る防具だった。

しかも、彼が着ている防具は、角竜ディアブロスと言う砂漠地帯に住む巨大な飛竜の、最高級の重殻を使った「ディアブロXシリーズ」と言う物だった。

「アロン君、ちょっといいかな？」

「あ、大丈夫です」

「じゃあ、えーっと……まずは彼の事を紹介しよう」

そう言うと、村長は青年の方をちらっと見て、再びアロンの方を見た。

「彼の名前はセルラーク君。セルラーク・フェナス君だ。ちなみに19歳」

青年——セルラークは頭の防具、「ディアブロXヘルム」を脱いだ。そしてアロンの顔をじーっと見つめてきた。

「アンタがこの村のハンターか？フン、弱そうな顔をしているな」
それがセルラークがアロンに向けて放った第一声だった。

「なっ……！！」

アロン絶句。

セルラーグは背が高く、アロン（18歳）より10センチは高い。髪は淡い水色で髪型はレウスレイヤーカット。目は少し大きく、ちよい吊り目。瞳の色も、髪と同じく淡い水色。顔立ちは良く、かなりのイケメンだ。

体格は標準ぐらい。

「セルラーグ君は例の貿易船のメンバーと一緒に行動し、停泊した各地でいろんなモンスターを狩っている流浪ハンターなんだ」

村長はそう言うセルラーグの方を向いた。

「村長の言う通り俺は流浪ハンターだ。この島ではあるモンスターを狩るつもりでいる。しかし、俺はこの島の地理はまるで分からん。何しろ初めての島だからな」

そこでセルラーグは一度ため息をした。

「そこでアンタに頼みがあるんだが・・・俺をこの村の東にある密林まで案内して欲しい」

「えっ・・・」

アロンは少し迷った。アロン自身、この島に来てまだ一週間しかたっていない。

密林への行き方なら知っているが、まだ密林での狩りは未経験だ。

「あの・・・僕も密林の事はまだよく分からないので・・・」

「俺は別に狩りに同行しろとは言ってない。狩り場まで案内してくれと言ってるんだ」

「え・・・？」

「それに君が付いて来ると足手まといになりそうだしな」

「は・・・？」

「で、案内を頼めるか・・・？」

アロンは胸に込み上げてくる怒りを何とか飲み込むと、作り笑顔を作った。

「まあ、僕でよければ案内します」

「んじゃ、ヨロシク」

そう言うセルラーグは「明日の日の出と共に出発だ」

とだけ言って村長と共に去っていく。

その時、ふとアロンに、ある疑問が浮かび上がってきた。
遠くに見えるセルラーグに向かいアロンは叫ぶ。

「セルラーグさん！」

セルラーグはくるつと振り向く。

「なんだ？」

「明日何を狩るんですかああ？」

「……クルペッコだ」

そう言うとセルラーグは今晚の宿となる村長宅へ歩いて行った。

第9戦：VS貿易船（後書き）

どうも！新章「VSクルペッコ篇」がスタート！！密林にクルペッコって出現するの？？と、言う疑問はスルーです。そして新ハンターのセルラークも初登場！彼はなんとG級ハンターだったりします。クルペッコなんか瞬殺出来そうな感じですが、まあ、何とかします。きっと。では次回予告を。何故かアロンはセルラークのクルペッコ狩りを手伝うはめになり・・・そして今ルリアは・・・。次回をお楽しみに！

第10戦：VSアロン（前書き）

今回はあまりモンハンとは関係ない内容になっています。あと、今話はセルラーグ目線でストーリーは進みます。

第10戦：VSアロン

セルラーグは今、村長宅に向かい歩いている。隣には村長。今晚はこの村長の家に泊めて貰うことになっている。

「・・・じゃあ俺は一旦船に戻って荷物を持ってくる」

「分かった。じゃあ家で待ってるよ」

「了解」

そう言ってセルラーグは村長と一旦別れた。

（明日は朝早いからな、早めに荷物を受け取って今日はもう休むとするか）

そう思いながら船に急ぐセルラーグ。

そして港、船が見える。船の入口には多くの村人が今だに村の特産品を船長に売り付けていた。

（・・・ったく、人が多い。これでは船に入れないな）

少し迷ったが、まだ村人達からはどく気配がしないので、仕方なくセルラーグは村を一周してみる事にした。その間に村人が船の入口からどいてくれる事を祈って。

（本当は早く休みたいのにな・・・）

村の西側、ピチ農場前。セルラーグは農場の前に立っていた。

規模は小さいほう。そして今、農場では薬草などの直売をしている。

（ここが農場か・・・そう言えば薬草切らしてたっけ・・・）

買い物がてら、セルラーグが農場に入ろうとしたその時、セルラーグの後ろから奇妙な音がした。

バタっ!!

「・・・ん？」

セルラーグが振り返るとそこには、二人の少女がいた。

その内の一人は地面に両膝を付き、さらに両手も地面に付き、四つん這いの姿勢だった。顔は真っ青。

もう一人の方は、倒れている？子に向かい、大丈夫！？だの、もうすぐ診療所だからね！？とか言っている。

セルラーグは少し躊躇ったが、腰に付けてあるポーチの中身を確認すると、少女達に近付いて行った。

「どうした？」

「えっ・・・！？」

少女はセルラーグを見て怯えた。

(まあ、これが当然のリアクションだよな)

見ず知らずの男の人が突然話かけてきて、しかもその人が着ているのはゴツゴツした変な服。(防具ディアブロXシリーズの事)

「怖がる事はない。俺はセルラーグ。今日の貿易船でこの村へ来たハンターだ。で、そっちの子、具合悪そうだけど大丈夫か？」

「は、ハンター！？。ルリアちゃんと一緒だ」

「ん？」

「な、何でもない。ハンターさん、ルリアちゃんを診療所まで運ぶの手伝ってくれる？」

「何かの病気なのか？」 「わかんない。けど、病気なのは確か」

「そうか」

そう言うセルラーグは倒れかけている少女――ルリアに近づくとまず、口を開けさせ、喉の粘膜を確認。次に脈を計り、瞳孔を見る。続いて呼吸(肺の動き)と心臓の動きを確認する。

「これはジャギ菌発作病だな。確か・・・」

そう言うセルラーグはポーチからいくつかの薬草を取り出した。

「この薬草とこのキノコをブレンドして、そしてこの薬草をこれ

くらい混ぜて、最後にこの木の実を混ぜて出来あがりだ」

そうやって出来た粉をルリアの口に入れ、セルラーグが持っていた水筒のフタを開け、中身の水をルリアに飲ませる。

「これで落ち着くはずだ」

そう言うのとセルラーグは気を失ったルリアを抱っこした。

「おい、アンタ名前は何？」

「え、あつラルです。ラル・タナサです」

「じゃあラル、診療所はどこだ？」

「あ、こつちです。付いて来て下さい」

そう言うって走り出すラル。セルラーグはそれに付いて行った。

ピチ診療所・・・

「いや、ありがとう。君のおかげでルリアちゃんは助かったよ」

そう言うって来るこの人はピチ診療所唯一の医者、ナタザー・カリキラ。そして彼が礼を言っている人物はセルラーグ。

「この子・・・ルリアちゃんはね、ハンターなんだよ」

「この子がハンター？」 「ああ」

セルラーグはベッドで寝ているルリアの顔を見る。幾分顔色が良くなっている気がする。

「ルリアちゃんは最近ジャギイ狩りに行き、そこでジャギイに噛まれたらしいんだ」

「・・・だからジャギイ菌発作病を・・・」

「その通り。最近は少し病状が和らいできたから自宅療養をしていたんだけどね・・・ま、すぐに意識は取り戻すと思う。とりあえず薬を投与しておくかな」 そう言うのとナタザー医師はルリアに薬の投与を始めた。

「そう言えば君、良くジャギイ菌発作病って分かったね。君、見た所ハンターみたいだけど、医術か何かに詳しいの？」

ナタザーがセルラーグに問う。

「ああ、俺はハンター謙薬師だからな・・・」

「ハンター兼薬師か。凄いな君は！」

「別に凄くなんかはないと思う」

ピチの村の空はもう夕焼け色に輝いていた。

「もう村人はいないよな・・・」

セルラーグが船に戻るともう村人は一人もいなかった。

「よし、今の内に荷物を・・・」

「あ、セルラーグさん！！」

「っん！！」

セルラーグが振り返るとそこにはアロンの姿が。

「た、確かアンタ・・・アロンだったか？」

「はい。アロン・プラクティアです」

「で、俺に何か用？」

「実は・・・さっき村長が家にきてさ・・・。で、村長がセルラーグさんのクルペッコ狩りを手伝え、って言ってきて・・・」

「な・・・村長がか」

「はい。何でもG級ハンターの狩りを間近で見れば何か学べる事があるんじゃないかって・・・」

「そうか・・・」

嫌な事になった。

「僕が行ったら足手まといですよ。嫌ですよね！？」

少し考えるセルラーグ。「まあ邪魔だな。見た所アンタ、下位

ハンターだろ？」

「まあ・・・そうですね・・・」

「俺が狩ろうとしているクルペッコってモンスターは、自分がピンチになると周辺にいる大型モンスターの鳴きマネをして助けを求める。そうなるとクルペッコと助けにきた大型モンスターの二匹を同時に相手をしなければならぬ。それに対処できる力量を持ったハンターでないと、まず勝つ事は難しい」

そこまで言うときセルラーグはアロンの目を見る。

「アンタにはそれができるか？」

「そ、それは・・・」

少し怖じけづくアロン。「どうするんだ？」

「えーっと・・・」

ここでアロンのスキル、弱虫と優柔不断が発動。

「早く決めろ。場合によっては作戦会議などが必要になる」

「あ、えーっと・・・」

そんなアロンを見兼ねたセルラーグは

「分かった。じゃあ付いて来い」

少しキレ気味なセルラーグ。

「え、！？」

「俺はそうしたうじうじしている奴は嫌いなんだ。やるならやれ。さ、今からアンタの家で作戦会議だ」 「えー！僕の家！」

「ほら、さっさと行くぞ！！」

「は、はい・・・」

少ししゅんとするアロン。

今日は長い夜になりそうだ。

セルラーグはそう思った。

第10戦：VSアロン（後書き）

皆さん、今回は凄いツツコミ所があったと思います。「ジャギイ菌発作病ってなんだよ!？」　ってな感じだと思います。作者の僕にも分かりません。多分なんか発作を起こす病気だと思います。適当すぎてすみません。セルラーグはハンター謙薬師ってのをアピールしたかったので・・・　なんかルリアが可愛いそうになってきました。まさに悲劇のヒロイン。いつか彼女が主役の番外編でも作ろうか・・・？　さて次回予告。セルラーグとアロンの初狩に出発です。一応ルリアは不参加の方法で。ではまたっ！

第11戦：VS覚悟（前書き）

今回までがクルペッコ篇の導入部分です。今回はサブタイトルにもある「覚悟」がキーワードになっています。

第11戦：VS覚悟

アロン宅。現在アロンはセルラーグにクルペッコを狩る時の注意点を聞かされていた。

「クルペッコってのは、まあ大きき的にはイヤンクックと同じくらいのもンスターだ」

「へえー！」

「んで、クルペッコ最大の特徴は大型モンスターの鳴きまねだな」
「鳴きまね・・・」

「ああ、そうだ。後は火打ち石使用の発火攻撃、体内の酸を吐き出す酸弾攻撃、鳴き声で自らのステータスアップを謀る鳴き声攻撃。あ、今のは攻撃じゃないな。補助技だ」

「なるほどお」

凄く熱心にメモを取るアロン。

「まあ、今のが主な攻撃だな。他にもいくつか細かい技はあるが、気をつけるのは今言った技だ」

「了解です」

「で、次は・・・」

その時、バンっ！！　と言う音と共にアロンの家のドアが開いた。そこにはオレンジ色の髪をしたショートカットの少女が立っていた。
た。

「ちょっとアロン、あんたクルペッコ狩りに行くんだって!？」

少女――ルリアはドスドスと家に入りこみ、突然アロンの胸倉を掴んだ。

（ん？確かあの子は）

セルラーグはさっきの出来事を思いだす。

（意識戻ったのか）

セルラーグは軽く安堵。

「なんで私に一言掛けないのよお―――！」

「がはっ！ちよっ・・・離して・・・ぐへえ」

「フンッ」

ルリアはアロンの胸倉を乱暴に離した。

「はあはあ・・・ルリア、なんでその事を知っているの??」

アロンは軽く涙目。

「村長から聞いたのよ。なんで私には一言もなしなの!??」

「だ、だって今回はセルラーグさんの狩りに付いて行くって感じで・・・って、ルリア、セルラーグさんの事知ってる?」

アロンは隣に座っているセルラーグをちらっと見て、再びルリアを見る。

「えーっと・・・誰?」

ルリアはセルラーグの方を見る。

「俺は君に会った事、あるんだけどな」

「えっ!!どこかで会いましたっけ?」

「・・・覚えてないか。まあ、仕方ない事だ」

「はっ!??」

困惑気味のルリア。

「で、なんでルリアはそんなにクルペ

ツコにこだわるの?」

アロンがルリアに問う。 「だって、彩鳥の羽根が欲しいんだもん」

「彩鳥の羽根え!??」

「うん、彩鳥・・・クルペツコの羽よ!」

「またなんで?」

「それは・・・ねえ・・・あれだからよ」

頬を赤め、もじもじするルリア。

「あれ?」

「あれよ!」

「あれか」

セルラーグは何か知っているようだ。

「セルラーグさん、あれか、のあれってなんですか?」

するとセルラーグは軽く驚く。

「なんだ、お前この村に住んでのに知らないのか??」

「えっ??」

セルラーグは声を小さくした。ルリアには聞こえないぐらいに。

「俺は村長から聞いたんだが、この村の人達は代々異性に告白する時に、その思いを彩鳥の羽根に込め、異性にプレゼントするみたいなんだ。ドンドルマで言う、婚約指輪みたいなもんだな」

「こ、婚約うー!!」

「婚約と言っも、実際には婚約ではなく、付き合いたい時に渡すもんだ」

「ルリアに彼氏が!」

なんかアロンは悲しくなってきた。

(なんだこの敗北感はあるある!!)

良く分からないけど、悲しい。

「で、アロン、私・・・って、聞いてる!??」

ルリアがアロンの方を見ると、アロンは上ななめ45度を向いて、ポカーンとしている。

「ルリア・・・だっけ? 君は一体何が目的なんだ!??」

セルラーグが問う。

「あっ・・・そっか。じゃあ単刀直入に言います。私も一緒に狩りに連れて行ってくれませんか?」

「・・・駄目だ」

「え!?? 何で?」

「だって君はジャギ菌発作病を患っているだろう」

「え!?? なんでそれを・・・」

「あ、しま

つた!!!」

セルラーグはこの場を乗り切るための言い訳を考える。

「それは・・・君の顔を見ればわかるさ」

「顔お!??」

「そうだ。顔だ。そっそんな事より君を狩りには連れていけない」

我ながら凄いごまかしがただなと、セルラーグは思った。

「そんなの分かってます。ちゃんと発作止めの薬持ってくし・・・」

「はぁ・・・」

セルラーグはため息をつく。

「なら俺が彩鳥の羽根、持ってきてやるから。それでいいだろ？」

「それは駄目なんです。自分で手に入れないといけないんです。

絶対に・・・」

ルリアはセルラーグから目を伏せた。

「・・・」

「・・・」

アロンの家に沈黙が流れる。

「セルラー

グさんはルリアの何処が嫌なんですか？なんで狩りに連れて行く事を躊躇ってるんですか？」 さっきまでポカーンとしていたアロンが、真顔でセルラーグの顔を見つめている。

「・・・嫌と言う訳ではない。ただ、この子はジャギイ菌発作病を・・・」 「違うでしょ！？ルリアは薬を持っていって言うんです。別にいいんじゃないですか!？」

セルラーグはルリアの方を見る。ルリアは下を向いている。

(彩鳥の羽根・・・乙女心と言う物か。まったく分からんが・・・)

セルラーグはアロンの方を見た。アロンはじーっとこっちを見ている。

(こいつはこいつで、彼女を思う気持ちがビシビシと伝わって来るな)

セルラーグはため息を一つ吐くと、ルリアの方を見る。

「本当の事を言うぞ」

アロンとルリアはセルラーグの方を向いた。

「本当は二人共狩りには連れて行きたくはない」

「えっ・・・」

「ぼ、僕も・・・!?」

「ああ、本当はな。本来は道案内だけのはずだったんだが、村長がついて行って言ったなら仕方ないと、アロンを連れて行く事には妥協したんだ」

「えっ!!」

「・・・下位ハンターはあまり戦力にならない。ミスばかりでこっちの足を引っ張るだけの奴だっているほどだ。」

「・・・」

アロンはだまってしまった。

「俺は今回のクルペッコ狩りを本気でやろうと思っている。恋だの何だのとは比べ物にならない覚悟でな。俺にとって今回の狩りは初めてのクルペッコ狩りだからだ」

セルラーグは二人の目を見る。

「俺の目的はこの世界に生息する全てのモンスターを狩る事。だからクルペッコに挑む。お前らは何故クルペッコに挑む？」

恋のためか？村長に言われたからか？

そんな覚悟でクルペッコに勝てると思ったら大間違いだ。クルペッコはそんな簡単な相手じゃない。下位ハンターのお前らがミスしても、俺はきっとフォローには行けない」

セルラーグは少し上を向く。

「俺が言いたい事、分かるか？下位ハンターの奴がそんな覚悟で行ったら、ミスした瞬間、間違いなく死ぬぞ・・・ってことだ。」

・・・もし狩りに付いてきたければ、それなりの覚悟をつける事だ」

セルラーグはパツと後ろを向く。

「は!?! 馬鹿にしないでよ」

セルラーグが振り返るとそこには、怒りの形相をしたルリアの姿が・・・

「あんた今、恋の覚悟を馬鹿にしたわね。大事な人を思う覚悟を・・・」

ルリアの手は怒りに震えている。

「あんたには分からないでしょうね。まあ当然か。見た所あんたイケメンだけど、そんな性格じゃあ誰からも好かれなかっただろうし」

「なっ・・・」

ルリアはセルラークグに歩み寄った。

「私をクルペッコ狩りに連れていきなさい。恋の覚悟がどれだけ大きいかわせてあげるから」

ルリアの目の輝きは、その覚悟を表していた。

「・・・あ、フン、勝手にしろ」

ルリアは軽く笑った。

「で、アロンはどうするんだ」

アロンはセルラークグの方を向く。

「僕も行きます!!!」

「そうか。覚悟はあるな？」

「ハイ!!!僕は・・・この島で変わりたいんです。自分自身を。だから、セルラークグさん、よろしくお願いします」

（僕は変わるんだ。弱虫な自分から変わってみせる!!!）

「そうか、じゃあ今から作戦会議だな」

その日、アロンの家の明かりは深夜までついていた。

翌日、日の出。

村の出入口には三人のハンターと村長の姿が。

「セルラークグさん、準備できました」

「私も大丈夫よ。薬も持ったし」

「そうか、じゃあ行くとするか」

アロン、ルリア、セルラークの三人は防具を身に纏い、それぞれ背中には太刀、ボウガン、ランスを背負っていた。

「気をつけてな。頑張って狩ってこいよ」

村長が手を振っている。アロン達はそれに応えながら、密林への道を歩いて行った。

第11戦：VS覚悟（後書き）

こんばんは！早速ですが、皆さんに謝らなくてはならない事が三つあります。まずは昨日、夏風邪を拗らせてしまい、小説を更新出来なかった事、最近結構誤字が多く、今だに修正方法が分からないので、誤字をそのままにしている事、前回の後書きで、ルリアはクルペッコ狩り不参加って言ったのに、やっぱり参加する事になった事（ガンナー不足のため）の三つです。不都合ばかりでごめんなさい。これから出来るだけ毎日更新し、誤字をなくして行きたいです。では次回予告。三人のハンターVSクルペッコ率いる密林モンスター連合。お楽しみに！！

第12戦：VSクルペッコ前編（前書き）

今回はいつもより少し短いです。三人は見事にクルペッコを狩れるのか？

第12戦：VSクルペッコ前編

ピチの村から東に進んだ所にある密林地帯。

その名は「ザメラ密林」。今現在、その密林には彩鳥・クルペッコが生息していると言う情報がある。

まだピチの村にはなんの影響もないが、いずれクルペッコが鳴きまねをして、他の大型モンスターを呼び起こす事があるかもしれない。そうした場合、その大型モンスターが村を襲う事が考えられる。そのため、ピチの村村長はクルペッコ討伐を決意、今日早朝、三人のハンターを密林へ向かわせた。

これが今日、ピチの村とその近辺の村に配布された新聞？の記事だ。

「アロン、まだか？」

「もうすぐです」

アロン、ルリア、セルラーグの三人は現在、ザメラ密林に向けて歩いていた。

「あ、ほら、見えましたよ！！」

三人の目の前には鬱蒼とした森林が。

「なるほど、あれがザメラ密林か」

セルラーグはほほうと頷く。

「・・・とりあえず、ベースキャンプまで行きましょう」

アロン達はザメラ密林の中へ入って行く。

しばらく歩くとベースキャンプにたどり着いた。

「よし、ここで少し休んだら出発しようか」

セルラーグがアロンとルリアに向かって言った。

「はい！」

「分かった！」

アロンはアイテムポーチの中を確認する。今回持ってきたのは回復薬、砥石、閃光玉、ペイントボール、音爆弾、シビレ罠、捕獲用麻酔玉、元氣ドリンク。

それに応急薬、携帯食料、地図をポーチに入れ、準備は完了。

「アロン、準備はできたか？」

既に準備を終えているセルラーグが話掛けてきた。

「は、はい！」

アロンはセルラーグの防具を見て、改めて彼の強さを感じた。

G級ハンターのセルラーグに、「ディアブロXシリーズ」はとても似合っている。

そして彼の背負っている武器は、ランスの「シエルクロウランス」。紫色の体をした、ダイミョウザザミの亜種から取れる「盾蟹の紫殻」をふんだんに使ったそのランスは、紫色に輝いて見えた。

「凄いなあ〜!!」

それに比べアロンは、「イーオスシリーズ」に「鉄刀（神楽）」。
何だか悲しくなってくる。

「私も準備OKよ！」

ルリアがセルラーグに向かい言う。彼女の装備は前回と同じく「ザザミシリーズ」に「アサルトコンガ」だ。

「あれ？ルリア、ザザミガード直してもらったの??」

・
・
確か前回の狩りでザザミガードはジャギイ達により壊されたはず。

「うん。マーチンさんに直してもらったの」

「ふーん・・・」

「さてと・・・おい二人とも、そろそろいくぞ!!」

「「はい!!」」

三人のハンターは密林の奥深くに入って行った。

ザメラ密林の北側のエリア。

ベースキャンプから一番近いこの場所にはオルタロスやアノトプスなど、結構大人しいモンスターが生息している。

エリア全体には木々が沢山生えており、意外と視界が狭まる。地面には木々の根が張り巡らされており、走っていれば転びそうなほどだ。

そんな場所を三人は歩いていた。何処から来るか分からないモンスターを警戒しながら。

(・・・結構静かだな、ジャギィ一匹いやしないし)

先頭を歩くのはセルラークは、辺りをより一層警戒する。

真ん中を歩くルリアは、ボウガンを構えながら歩く。

しんがりはアロン。いつでも敵が来てもいいように、右手には閃光玉を常備。

そして、アロンは自分の前に行くルリアを見て思う。

(こ、今度こそは、る、ルリアを、守って、みせるぞ!!)

ガチンガチンに緊張しているアロン。彼はまだ目の前の木々の根に気付いていない。

そして・・・

クイツ!!

「うっ!？」

足が木の根に取られ、

ドゥン!!

「うわああああ」

見事に転び、顔面を地面に強打。

「ば、馬っ鹿じゃないのアロン!？」

ルリアが笑いながら寄ってくる。

セルラーグはこちらを見ながらため息をついている。

「いてて・・・」

なんとか立ち上がったアロンの顔を見て、ルリアはさらに笑った。

「あははは!! アロン、鼻血出てるよ!」

「・・・っは!？」

アロンは手を鼻に持っていく。

「うぎやああああ」

「あんた馬鹿だね。あははは!!」

セルラーグはそれを見て二度目のため息をついた。

密林の東側。東側には大きな湖があり、その湖に沿って歩いて行くと「ザメラ水没林」と言う、密林とは違った狩場へ行く事が出来る。

このエリアはザメラ密林の中でも木々は少ない方でもある。そのため、ケルビなど地面に生えている草を食べるモンスターが生息している。

「ここにもいないか・・・」

セルラーグはそう言うところから携帯食料を取り出し、封を開け、中身を食べ始めた。

ここまで来るのに狩ったモンスターはオルタロス数匹にブナハブラ数匹、そしてジャギィを少々。

「ふう・・・」

セルラーグのため息に気付いたアロンは、ポーチから元氣ドリンクを三つ取り出し、セルラーグとルリアに一本ずつ手渡す。

「ありがと!」

「すまん。」

二人ともそれを受け取った。

「それにしてもセルラーグさん、クルペッコ、いませんね？」
アロンは元氣ドリリンコをぐいっと飲みながら質問。「ああ、いないな。きつと何処かにいるはずなんだが・・・」

その時、

バサーン バサーン

「・・・っ!？」

三人が上を見る。そこには今、地面に降り立とうとしているクルペッコの姿があった。

「きた・・・」

アロンはポカンとしている。クルペッコのカラフルな体は、周りの木々と明らかに違っていた。見た目はそのまんまで、まさに鳥。

「まさか、このタイミングで現れるとは」

セルラーグは元氣ドリリンコをクイッと一氣し、ビン捨てて。

「おし、みんな武器を構えろ!!」

セルラーグが叫ぶ。

アロンは太刀を背中越しの鞘から抜き放ち、構える。

(見た目が見た目だけにあまり怖くないな・・・)

バサーンと、クルペッコが地面に降り立つ。

「グアアアアアアアアア!!」

クルペッコは着陸と共に三人を発見、威嚇を開始する。

「よし、いくぞ!!」

セルラーグが叫ぶ。

ハンター三人VSクルペッコの熾烈なバトルが今、始まった!!

第12戦：VSクルペッコ前編（後書き）

こんにちは！今回は皆さんにお知らせがあります。実はクルペッコ篇が終了次第、メインハンターの四人目を登場させるつもりですが、まだ何にも決まっていんです。性別すら決まってません。

そこで四人目は読者の皆さんに決めて貰おうかと思っています。何か適當すぎてすみません。感想で四人目の性別、名前、性格、武器、防具などを書いて送って下さい。僕が気に入った一人を四人目にしたいと思います。また、他にも気に入った案があったら、サブキャラぐらいで登場するかもしれません。皆さんに頼ってばかりで申し訳ありませんが、協力してくれると助かります。では次回予告・・・VSクルペッコの続きです。ではまた次回で！

第13戦：VSクルペッコ中編（前書き）

今回はアロンに沢山の悲劇が起こります。果たして、アロン達はクルペッコに勝てるのでしょうか？

第13戦：VSクルペッコ中編

クルペッコが目の前にいる。自分自身を変えるために、僕はこいつを狩る。

「アロン、ルリア。お前達は昨日俺が話した通りに動け。分かったか!？」

「はい!」

二人の返事を聞くと、セルラーグはクルペッコの右側へ回った。アロンはクルペッコの左斜め前。ルリアは近くの岩影に隠れて、アサルトコンガを構える。

「うおおおおおおおおお!!」

セルラーグがクルペッコの羽を突く。

「はああああああああ!!」

アロンがクルペッコの腹の辺りを斬る。

「いくわよ!それ!」

ルリアの撃った弾がクルペッコの頭に刺さる。ちなみに弾は通常弾レベル2

「ギギヤヤヤアアアア!」

突然体の3カ所に痛みが走ったクルペッコは少し怯んだ。

「チャンスだ!!」

アロンはさらに斬りかかる。

「アロン、あまり深追いし過ぎるなよ」

セルラーグは叫ぶ。

アロンはその言葉を聞き一度クルペッコのしぐさを伺う。

「あ・・・」

クルペッコと目が合った。ずっとこっちを睨んでる気がする。

「・・・っ!!」

突然の恐怖がアロンに襲った。外見はあまり怖くないのに、目を

見た瞬間、体が凍りついたように動かなくなる。

「・・・アロン？」

遠くから射撃していたルリアはアロンの行動を見て不思議に思った。

（なんで動かないの？） セルラークはアロンとの間にクルペッコがいるので、アロンの姿が見えないでいる。

その時、クルペッコが両羽の先端に付いている火打ち石を叩き始めた。

「・・・っ！アロン、一旦離れるぞ！！」

セルラークは盾を構えたまま、バックステップで後ろに下がる。

「おいアロン！どうした！？早く下がれ！！」

アロンはピクリとも動かない。

その時、クルペッコが動き始めた。

火打ち石を打ち付けながらアロンに接近する。

「はっ・・・！」

アロンが気付いた時にはクルペッコはもう目の前にいた。

「やばっ・・・」

クルペッコは両羽に付いている火打ち石を打ち付けながらアロンに突進する。

ガチンっ！！

「うあっ・・・」

アロンはクルペッコの攻撃をもろに喰らい、勢い余って地面に叩きつけられた。

「アロン！たくっ」

クルペッコの動きが止まる。

「アロン、湖に飛び込め！！」

今、アロンの体は火打ち石のせいで真っ赤に燃えている。

「くっ・・・」

アロンはなんとか立ち上がると湖に向かって走りだす。

しかし、クルペッコは少し浮き上がる（飛ぶ）と、アロン目掛けて酸弾を放ってきた。

「仕方ない、俺がアロンの盾になる。ルリア、援護を頼む」
そう言うのとセルラーグはランスをしまい、アロン目掛けて走りだす。

「えいっ!!」

ルリアは貫通弾レベル1をクルペッコ目掛けて撃ちまくる。
しかしクルペッコは怯まない。

「うわああああ」

アロンはなんとか湖の中にダイブ。火の消火に成功した。
しかし、アロンに向かいクルペッコの酸弾が……。

「うわああああ!!」

アロンはつい目をつぶった。

その時……

ガキン!!

アロンが恐る恐る目を開けると、そこには盾を構えたセルラーグの姿が。

「セルラーグさん……」

「早く立て。次、くるぞ!!」

アロンは素早く立ち上がり、近くの岩へダッシュする。

クルペッコはしばらくセルラーグとアロンを睨み続けた後、地面に降り立ち急に振り返る。

そこには一つの岩が……

そこでセルラーグが気づいた。

「ルリア、お前狙われてるぞ!!」

「分かってます!」

ルリアは岩から顔を出す。その手には閃光玉が握り絞められていた。
「えいっ!!」

刹那、辺り一面にまばゆい閃光があふれた。

ルリアとセルラーグは顔を伏せたが、アロンは閃光玉の存在に気づかず、見事に閃光を喰らった。

「グエエエエエエエエエエ！？」

「ぎややややややああああ！！」

二つの悲鳴が辺りに響きわたる。

「馬鹿かあいつ？」

そう言いながらセルラーグはクルペッコに接近、ランスを構え、突きを連発する。

ルリアはとりあえず岩から離れ、また違う岩の影に隠れる。

アロンは閃光によって前が見えないので手探りで辺りを確認する。

「グエエエエ！」

クルペッコの視力が回復した。

それを見たセルラーグはバックステップで距離をとる。

ルリアはセルラーグの援護を開始する。

バンバンバン！！

貫通弾レベル1がクルペッコの体を貫く。

アロンはまだびみよくな視力を頼りに近く岩影に隠れる。しかし

そこには先客が・・・

「あ、アロン！？なんでこっち来るのよ！！」

そこにはルリアの姿があった。

「はい！？」

アロンの視力はまだ完全に回復してない。突然の話声にアロンは驚いた。

ルリアの腕が止まる。

「あんた、何してるの！？」

「はひ？ルリア？」

岩の向こう側ではセルラーグとクルペッコが激戦を繰り広げている。

「アロン、あんたあっち行きなさいよ！！」

「はへ？？」

「もう、邪魔なの！」

ルリアが怒鳴る。アロンはそれに戸惑う。

「だって、前が見えな……」

その時、

「おい、クルペッコがそっち行っただぞ!!」

セルラーグの声がする。「やばっ!!」

ルリアの声もする。

しかしアロンには全てがぼやけて見える。

カチッ ドン カチッ ドン

(この音は……)

火打ち石攻撃だ。しかも音はどんどん近付いて来る。かなりやばい。

「アロン、こっち」

ルリアがアロンの手を引っ張る。

後ろにはクルペッコが……

「お、追い付かれる」

ルリアはとっさにアロンを右側へほうり投げると、ルリアは左に跳んだ。

刹那、ルリアのすぐ右側をクルペッコが通過していく。

「危なっかしいなあゝもう」

愚痴をこぼすルリア。

「いてて……あれ？前が見える!!」

視力が回復し、歓喜するアロン。

「お前ら、しっかりクルペッコを見ろ!!」

キレそうなセルラーグさん。

そんなハンター三人を見てクルペッコは叫んだ。

「オオオウ、オオオウ!!」

「はっ!!」

セルラーグはとっさに音爆弾を投げる。

しかし、タイミングが一瞬遅かった。

キイイイイン！！

音爆弾の音が響く。

「くそっ」

バサン バサン

三人はクルペッコを気にしつつ、空を見上げた。

そこには、空の青とは別に、緑色の飛行物体が……。

「あれは……」

緑色の物が地面に降り立った。

「ギヤヤヤアアアアアアアア！！」

辺りに轟音が響き渡る。 「あれは……大地の女王リオレイア

！！」

セルラーグが叫ぶ。

全てが絶望に感じた。

第13戦：VSクルペッコ中編（後書き）

こんにちは！皆さん、四人目ハンターの案件、ありがとうございます。
す。なかなかいい案件ばかりで、とても嬉しいです。現段階ではみ
んな登場させたいなって感じですよ。（もちろん限度はありますが・
・）一応まだハンター案は募集中なので、いい案があったら送って
下さい。お願いします。さて、誰が四人目になるのでしょうか？
もしくはサブキャラになるのでしょうか？ 皆さんの案件、待っ
てます。では次回予告を・・・リオレイア登場！どうするアロン
！？では次回で！

第14戦：VSクルペッコ後編（前書き）

VSクルペッコ・リオレイアタッグ。アロン達はどうするのか・・・
今回、クルペッコとの戦いにピリオドが打たれる。

第14戦：VSクルペッコ後編

目の前にいるのは大地の女王リオレイア。

アロンはただただ、立ち尽くすしか無かった。

「・・・嘘だろ」

クルペッコは楽しそうにこちらを見ている。

リオレイアが思い切り息を吸う。目の前にはアロンが・・・

「アロン！横に跳べ」

セルラーグが叫ぶ。しかしアロンは恐怖で足が動かない。

刹那、リオレイアの口から、轟音と共に火炎ブレスが放たれた。

一瞬遅れてセルラーグとルリアが同時に閃光玉を投げたが、やはり少し遅かった。

（やべーなコレ）

アロンは動かなかった。いや、動けなかった。

火炎ブレスがアロンに迫る。そして・・・

ドッカーーン！！

辺り一面に轟音が響き渡る。それと共に焦げ臭いニオイが・・・そして、アロンがいた場所からは黒煙が立ち込めていた。

セルラーグとルリアの防具の顔の部分に熱風が当たる。二人の目は大きく開けられ、口がポカンと開いている。

一瞬の出来事だった。

セルラーグはすぐに我にかえる。

「・・・っは！！」

セルラーグはポーチから閃光玉を二つ取り出すと、クルペッコとリオレイアに投げた。

ピカアアアア！！

閃光が辺りに広がる。

「グエエエエエ!？」

「グギヤヤヤオ!？」 二匹は不意をつかれ閃光をもろに喰らった。

その閃光でルリアは我にかえった。

「アロンっ!!」

「ルリアはアロンを頼む!! 俺はモンスターどもを引き付けとくから」

そう言うセルラーグはランスを構え、アロンの周りの安全を確保する。

ルリアはセルラーグが確保してくれたルートを通り、アロンの元へ走る。

「アロン・・・っ!」

ルリアは絶句した。

「いてて・・・あれ? ルリア?」

アロンはぴんぴんしていた。普通リオレイアの火炎ブレスをイーオスシリーズで喰らったらまず即死だろうに・・・

「あんた・・・もしかしてユーレイ!？」

「は!？」

アロンはキョトンとしている。

「だってあんた今リオレイアの火炎ブレスをもろに喰らったんじゃない・・・」

「そういえば僕、火炎ブレスを喰らう直前に誰かに押された気がする」

「はあ?」

その時、

「クルペッコトリオレイアの視力が回復するぞ」
セルラーグが叫ぶ。

「アロン、無事か?」

「は、はい。大丈夫だと思います」

「そうか。じゃあアロンとルリア、鼻つまめ」

そう言うのとセルラーグは視力が回復したばかりのリオレイアに向かい、こやし玉を投げた。

「グギヤアアアア」

リオレイアの顔にこやし玉が当たった。すると、
バサーン バサーン

リオレイアは空に向かい羽ばたき、遠くへ飛んで行ってしまった。

「はああああ・・・」

アロンは安度のため息をつく。

「おいアロン、まだ安心するな。前見な」

セルラーグがアロンに言う。アロンは前を見る。

そこには視力が回復したクルペッコの姿が・・・

「さて、リオレイアもいなくなったし、さっさとクルペッコをかつけますかな」

アロンは太刀を構える。ルリアはボウガンを構える。セルラーグはランスを構える。

クルペッコが火打ち石を鳴らした。

「くるぞ!!」

セルラーグが叫ぶ。アロン達はクルペッコの背後に回った。

そしてクルペッコは火打ち石を鳴らしながら移動を開始した。

アロン達は出来るだけクルペッコの後ろをキープしつつ、ルリアは狙撃を始める。弾は貫通弾レベル1を使用。

バンバンバン!!

次々に弾はクルペッコに命中する。

クルペッコの動きが止まった。

「今だ!!」

まず、セルラーグがクルペッコ目掛けて閃光玉を放つ。

ピカアアアア!!

閃光がクルペッコの目を焼いた。

「グエエエエ!!」

そのすきにセルラーグはクルペッコに突きを開始する。アロンは

出来るだけクルペッコの目を見ないようにしながら、腹の辺りを斬る。

「うおおおおおおおおおお！！」

連気が溜まった。アロンは気刃斬りを放つ。

「グエエエエエエ」

クルペッコは痛みに耐えかね、少し怯む。もう視力は回復しているようだ。

「ギギヤヤヤヤ」

クルペッコが何かの鳴きまねをする。しかし

キイイイイイン！！

さっきまでアロン達の援護をしていたルリアが音爆弾を投げた。それによりクルペッコの鳴きまねはさえぎられた。ルリアはガツツポーズ。

「良くやった」

セルラーグはそう言うと言きを一旦止めた。

「セルラーグさん？」

アロンが問い掛ける。

「まだか・・・」

セルラーグはそう言うと言きを再開した。

その時、クルペッコは羽を羽ばたかせ、少し浮いた。

「酸弾くるぞー！！」

セルラーグが叫ぶ。アロンとルリアはクルペッコから少し距離を取る。

バババン！！

酸弾がクルペッコの口から放たれる。

「うわあああああ」

アロンの目の前にも一つ落ちてきた。

「大丈夫！？」

ルリアの声がする。

「うん、大丈夫だよ」

アロンはそう言うのとクルペッコを確認する。地面に降り立とうと
している。

「よし、今だ」

アロンはクルペッコの後ろ側へ再度回った。

そこには既にセルラーグが待機していた。

「セルラーグさん？」

「アロン、シビレ罠を頼む」

「へ!？」

「奴を捕獲する。リオレイアが戻って来る前に」

そう言うのとセルラーグはクルペッコに向かい最後の閃光玉を投
げる。

こっちに振り向こうとしていたクルペッコに見事命中。

光りと共にクルペッコは混乱した。

「今のうちにシビレ罠を仕掛けろ」

「はい!!!」

アロンは出来るだけクルペッコに近づき、シビレ罠を仕掛ける。

びりっ!!

「シビレ罠仕掛けました。次は・・・」

その時、クルペッコの視力が回復した。

「もう!？」

「くそっ・・・アロンは捕獲用麻醉玉を持って少し離れている。俺
がクルペッコを誘導して罠にかける。ルリアは俺の援護!!」

「「はい!!!」」

アロンは太刀をしまい、両手に捕獲用麻醉玉を持つと、後方に下
がった。

セルラーグはランスをしまい、クルペッコに向かいペイントボー
ルを投げる。ルリアはボウガンを構え、いつでも狙撃可能状態の
体制をとる。

クルペッコがセルラーグの方を見る。

「さあ来い、焼鳥にしてやるよ!」

クルペッコは火打ち石を鳴らした。

セルラーグは罨の方へ全力ダッシュ。そして罨を飛び越し、後ろを振り返る。そこには、こちらに向かい突進してくるクルペッコの姿が。そして、その先には……。

びりっ!!

クルペッコが罨に掛かった。

「アロン、今だ!」

アロンは捕獲用麻酔玉を2つ投げた。

ぽん!ぽん!

玉から睡眠ガスが流れた。

ガスはクルペッコを包み混んだ。そしてクルペッコは、夢の中へ入って行った。ぐっすりと……

「やったな。俺達の勝ちだ」

「マジで……」

「ああ、マジでだ」

アロンは涙が出そうになった。今回は誰も（アロン以外）怪我をしていないのだ。

「よっしやああああ!!」

アロンは天に向かい叫んだ。

第14戦：VSクルペッコ後編（後書き）

ついに決着がつけました。クルペッコ篇、次回最終話です。そこで皆さんに悲しいお知らせが。申し訳ないのですが、作者の都合により、約2週間休載をしたいと思います。何しろ私は高校生なんで、これから文化祭の準備が忙しく、小説を更新する暇が無いので・・・2週間後からは通常通り更新しますので、それまで待っていてくれたら助かります。では次回予告——あの時アロンを押したものは・・・そしてルリアの恋人とは？さらに、セルラークとの別れ？ 四人目ハンターまだまだ募集中なのでよろしくお願いします！！！！
では！！！！

第15戦：VSそれぞれの想い（前書き）

クルペッコ篇最終話。今回は凄いスピードで物語は進みます。

第15戦：VSそれぞれの想い

ピチの村唯一の医療機関、ピチ診療所。

今ここに、一人の青年が治療を受けていた。

「凄い火傷だな」

そう言うとなタザー医師は青年――アロンの背中に薬を塗る。

「・・・っ!!」

激痛がアロンを襲う。一生懸命に涙を堪えるが・・・。

「いっつう・・・」

口から情けない悲鳴が出てしまう。

「なあアロン」

ナタザーは薬を塗っていたガーゼを取り替えながら質問。

「はい？」

「お前・・・この火傷、何と戦ったんだ？」

「クルペッコです」

「クルペッコ・・・ああ、彩鳥か」

ナタザーはどこか納得顔。

「って事はお前、火打ち石もろに喰らったんだ」

「まあ、はい・・・っいつつ!!」 アロンはぐっと痛みを堪える。

「・・・はい、治療終わり」

ナタザー医師はそう言うとなロンに包帯を巻いた。なんかミイラみたいだ。

「あ、ありがとうございます、ナタザーさん」

アロンは軽く背中をさする。

「なあアロン、お前保険証持ってるか？」

「え? いや、持っていないです」

「じゃあ治療費は・・・」

ナタザーが紙に金額を書き、そしてそれをアロンに見せた。そし

てアロンは驚く。

「0が多いいゝゝ！」 アロン仰天しつつ、渋々ゼニーを払った。

アロン達はいさつきピチの村に帰ってきた。もちろん、クルペッコのおまけ付きで。

ルリアとセルラーグは村長に報告（今回の狩は村クエ）しに行ったが、アロンはクルペッコの攻撃を喰らったせいで、背中に火傷を負っていたので報告を二人に任せ、一人診療所に向かう事にしたのだ。

「ああ・・・クルペッコ代の三分の一が消えた」

アロンが涙ながらに財布に向かい愚痴を言いながら、自宅に向かって歩いていると、何処からか声が・・・

「そう言う事だ。悪いな村長」

「そうか・・・分かったよ。仕方ない」

片方は村長の声だ。そしてもう片方はセルラーグ。「じゃあ明日の昼過ぎには船は出港する。アロン達にはこれから言いに行こうかと」

「そうか・・・」

アロンはそっとその場を離れ、とりあえず村の中央広場に向かい歩いて行った。

（セルラーグさん、明日行っちゃうんだ・・・）

アロンは今、村の中央広場にあるベンチに座っていた。家には寄っていないので防具を着ている。

スウーっと、心地良い風が辺りを通る。

(これからどうしようかなあ〜)

アロンは上を向いた。空は薄暗く、もうすぐ夜。

アロンはぼーっとしながら空を見る。

(・・・)

アロンがぼーっとしていたその時、

「おい、そのハンターっチャ!」

突然声がした。アロンはビックリ!! とりあえず前を向くが、そこには誰もいない。

(・・・空耳?)

「おい! そのハンター! こっちっチャ!!」

声は下からした。アロンは足元に顔を向ける。

そこには、どんぐりの仮面を付けた子供——いや獣人族の子供が・・・。

「あ、やっぱりっチャ!! あの時の!」

「はあ!？」

アロンは少し戸惑った。目の前には見知らぬ獣人族の子供。しかもアロンの事をなんか知っているみたいだ。

「オレチャマの名前はチャチャ! 今日、あんたの命を救ってやった最強のハンターっチャ!!」

「えっ!？」

アロンはさらに驚いた。いつ命を救われたっけ?

つーか意味が掴めない・・・。

「覚えてないっチャ? リオレイアの火炎ブレスからあんたを突き飛ばしてやったのはオレチャマなのチャ!」

「えー・・・!!」

「そうっチャ。オレチャマが薬草を採取しようと密林の湖のほとりに行ったら、あんたが死にそうな状態でいたので、仕方なくオ

レチャマが助けてやったのチャー!!」

チャチャの話を聞きながら、アロンは少し困った顔。

「・・・それ、本当？」

「本当っチャー!!」

アロンは少し迷ったが、確かにあの時、誰かに押された感じはした。

多分、彼の言っている事は本当の事だろう。

「そうだったんだ・・・チャチャだっけ？ありがとう」

アロンは頭を下げた。あの時自分を救ってくれたのが獣人族の子供だったなんて・・・

「あんた名前何っチャ؟؟？」

「僕はアロン。アロン・プラクティア」

するとチャチャは少し躊躇いつつ・・・

「じゃあアロン、今日はオレチャマを家に泊めて欲しいっチャー！」

「えー!!！」

アロンは少し慌てた。

「え、なんで!？」

「いや、オレチャマは訳合って今、旅をしているツチャ。だからあんたを助けた分、今日の宿ぐらい貸してほしいっチャー！」

（なんて図々しい奴なんだこいつ）

アロンは少し考えたが、「今日だけなら・・・まあ、いいよ」

「よし、さくせ・・・いや、とても助かるっチャー!サンキューアロン！」

「はあ・・・」

アロンはため息をついた。

（この子は一体何なんだ？突然泊めろとか言ってくるし）

アロンは足元のチャチャを見る。さっきはお礼を言っちゃったが、本当にこの子供が助けてくれたのか？ハテナが頭に浮かぶ。

なんだかんだ言ってアロンは押しに弱いのだ。

所変わってピチの村の船乗り場。

そこにルリアはいた。

「じゃあ船長さん、ホテルタまでお願いします」

「了解だ。出発するぞ」　ルリアを乗せた船は、海に向かい進んで行った。

ルリアのふところには、彩鳥の羽根がしまっており。

「今度こそ、絶対成功してみせる！」

ルリアの目は桃色に輝いていた。

翌日、朝早くから村人たちはピチ港に集まっていた。

理由は一つ。今日で貿易団とセルラーグはピチの村を去るのだ。

「皆さん、本当にありがとうございます」

村長が代表して挨拶を述べる。

「いえいえ、こちらこそいろいろと特産品を売って頂いて、ありがとうございます」

貿易船の船長はぼりぼりと頭をかきながらお礼の言葉。

アロンはセルラーグの元に駆け寄った。

「セルラーグさん、すみません。ルリアは昨日の内に出発しちゃうみたいで……」

アロンは軽く頭をさげる。

「別にいい。アロン、クルペッコ狩りの案内、ありがとな」

「いや、僕なんか足手まといだったし……」

ははは、とアロンは愛想笑い。

「……アロン、もっと強くなれ」

「え・・・あ、はい」

セルラーグはくるっと振り返り、船に向かい歩いていく。

「じゃあな」

右腕を上げ、軽く手を振った。

「セルラーグさん、ありがとうございました」

アロンの目は強く輝いていた。

第15戦：VSそれぞれの想い（後書き）

まさかのチャチャ登場！次篇では大活躍の予定！？かな？ さて、本当はまだ休載期間中ですが、なんとか1話分書き終わったので投稿しました。凄いスピード展開でしたが、付いてくれましたか？

そしてもう一つお知らせが。今話を持ちまして、四人目ハンターの案件募集を終了させて頂きます。案件を送って下さった皆様、本当にありがとうございます！ だれが選ばれたかは、次回の後書きにて発表させて頂きます。皆さん、本当にありがとうございます。

で、次回予告・・・次回は番外編でチャチャ目線でクルペッコ篇を振り返って見ようかと！！では次回で！！

番外戦：キャラクター紹介1

アロン・プラクティア

18歳 男 現在武器は太刀の「鉄刀（神楽）」を使用 防具は「イーオスシリーズ」 下位ハンター

ドンドルマ出身の弱虫ハンターで、本作の主人公。ピチの村へは弱虫な自分自身を変えるためにやって来た。

結構気弱で優柔不断、運動神経もあまりなく、ハンターには不向きな青年。

両親がハンターで、そんな両親に憧れてアロンはハンターになった（アロン15歳）。しかし、両親とはある狩りに行き、その狩場にて死亡。話では古龍がどうか・・・。

最近ではルリアの事が少し気になるらしい。

好きな食べ物はアノトプスハンバーグ。好きな鉱石はマカライト鉱石。

ルリア・ミサーラ

16歳 女 現在武器はライトボウガン「アサルトコンガ」を使用。防具は「ザザミシリーズ」 下位ハンター

アロンと同じく、ピチの村ハンター募集のちらしを見て、この村にやってきた。ちなみにルリアの過去については近日掲載予定。

性格は明るく、ちょっとわがままな感じ。アロンとは正反對。

彼女は現在ジャギ菌発作病を患っており、たまに発作が起こる。（薬を飲むことで対処可）発作をほっとくと呼吸器官が麻痺してしまい、最終的に呼吸が出来なくなり、死に至る。

現在彼女には片思いの人がいるらしく、彩鳥を倒したあかつきに

は、彼に告白するらしい。

好きな食べ物は飛竜の卵のオムライス。好きな鉱石はシープライト鉱石。

セルラーク・フェナス 19歳 男 現在武器はランス「シエルクロウランス」を使用。防具は「ディアブロXシリーズ」。G級ハンター。

ある貿易船の乗組員達に同行し、船が停泊した場所で狩りを行う流浪ハンターで、薬師の資格も持っている、天才君。

性格はクールで物静か。面倒事は嫌いで、我を行くって感じ。

現在、出身地等過去の事は一切不明。知っているのは貿易船の船長のみ。

ピチの村ではクルベッコを狩るつもり。

好きな食べ物は大王イカと女王エビのシーフードグラタン。好きな鉱石は氷結晶。 好

ガドラス・ビルザーク

37歳 男 ピチの村の村長。

現在のピチの村の村長で小太りのオッサン。独身なんです。

かなり大胆な性格で、結構うざいので村人からは少し嫌われている。

そんな村長だが、いつも村人の事を第一に考え、特にこの村のハンター、アロンとルリアには家を貸すなど結構優しい面もある。

現在花嫁大募集中。

好きな食べ物はギガントミートのステーキ。好きな鉱石は大地の結晶。

チェラグ・マーチン

68歳 男 ピチの村唯一の武器屋。

まだ登場回数一回の武器屋の店主。

性格は気さく。恐妻家としても有名。

チェラグは武器担当、妻は防具担当で現在店を営業中。村にハンターが来るまでは服屋として営業していた。

最近はルリアの防具を妻と一緒に直したぐらいしか仕事がない。

好きな食べ物？はブレスワイン。好きな鉱石はガブレイト鉱石。

ラル・タナサ

15歳 女 ルリアの友達。

ルリアの友達。ただそれだけのキャラ。

性格は少し幼い感じの少女で、かなり身長が小さい子。

ルリアとは家が隣同士なので、何となく友達になっていた。

今後少しは登場させるつもり。

好きな食べ物は炎熱マンゴーアイス。好きな鉱石は虹色鉱石。

ナタザー・カリキラ

40歳 男 ピチ診療所の医者。

ピチの村唯一の医者。

性格は慎重な感じで、一人でいるのが好きな人。

村人からは変人と思われるつつも、それなりに信頼もされている。注射は打つ方も打たれる方も苦手。

好きな食べ物は普通にカレーライス。好きな鉱石はユニオン鉱石。

魚屋の店主（本名はタカタリ・バドゥヤステ）

39歳 女 ピチの村ニコニコ魚屋店長兼ピチ農場総合責任者。

案外凄い肩書きの魚屋の店主。

性格は事細かい感じ。

好きな食べ物はラオシャンメロンとハリマグロの刺身。好きな

鉱石はピュアクリスタル。

番外戦：チャチャ・ストーリー（前書き）

ついに連載再開です！やーっと文化祭が終わり、これからは小説に集中出来そうです。これからは三日に一回のペースで更新出来たらと考えています（学校や部活があるので毎日更新は少し難しい・・・）
また、今回の後書きでは四人目ハンターの結果発表もあるので、そちらもよろしく願います。

番外戦：チャチャ・ストーリー

みんな！こんにちはっチャー！！

オレチャマの名前はチャチャ。

分け合って旅をしている最強ハンターっチャ。

そんなオレチャマは今、とある密林で迷子・・・いや、薬草の採取に来たっチャ。

「かなり広い密林っチャね」

正直、何処が出口なのか分からなくなって来たっチャ。

え？そう言うのを迷子って言うの・・・って、オレチャマは迷子じゃないっチャー！だ、だから薬草を・・・

ガサガサッ

「チャーーーーー！？」

い、今そこで・・・何か・・・動いたっチャー！？

ガサガサッ

「チャーーーーー！？」

やっぱり何か動いたっチャよ！！

そ、その茂みの中に何かが・・・

ひょこっ！！

「チャーーーーー！！」

何か出てきたっチャー！

オレチャマは思わず跳びはねてしまったっチャ。ああ情けない。

しかし、出てきたのは一匹のオルタロス。だけ。

オレチャマはその時、もう遠くまで走って行ってたっチャ。

べ、別に怖かった訳ではなく・・・その・・・こっちから声が・・・

「アロン！横に跳べ」

チャー！本当に声が、って、目の前にはリオレイアとクルペッコ、それにハンターらしき人影が三人・・・

そして今、リオレイアは一人のハンターに向かいブレスを・・・
その時、オレチャマの足に奇妙な感覚が。
下を見るとそこには、さっきのオルタロスが・・・！！

「チャーーーーー！！」

オレチャマは思わず、前に向かって無我夢中で走りだしたっチャ。
別に怖い訳では・・・

その時、オレチャマは何かとぶつかったっチャ。

その瞬間、辺り一面に閃光が。

オレチャマは無我夢中で穴を掘り、地面に隠れたっチャ。時には
隠れる事も必要っチャ。

んで、リオレイアのブレスはオレチャマの頭上を通過し、すぐ後
ろに落ちたっチャ。間一髪って所っチャね。

オレチャマはとりあえずモンスター共が何処か行くまで地面に隠
れてる事にしたっチャ。

どれだけ時間が経っただろうか・・・

オレチャマはそおーっと地面から顔を出したっチャ。

そこにはクルペッコの死骸だけが置かれてあったっチャ。

「た、助かったっチャ（へなへな）」

とりあえずオレチャマは、たまたまあったハンターの足跡らしき
物をたどって見る事にしたっチャ。

そして見事に密林を脱出し、近くの村、ピチの村に到着したっチ
ャ。

ピチの村はかなり小さな村だったっチャ。

オレチャマはとりあえず、今日の宿を捜す事にしたっチャ。

しかし、ふところにはたったの10ゼニーしか・・・

「どうしようかなあ」

オレチャマは途方にくれたっチャ。野宿はいや。

「そもそもこの村に宿屋なんて・・・」

その時、目の前に一人の男が。ベンチに腰掛け、ぼーっと空を見ていたっチャ。気持ち悪っ。

けど、その男には見覚えが・・・

確か、さつき密林でリオレイアにブレスを・・・

その時、オレチャマの頭の中に一つの作戦が。

オレチャマはその男に声を掛けたっチャ。

「おい、そこのハンターっチャ」

そして、見事に今晚の宿をゲット!!

一体どんな会話があったのかは、前話をチェックっチャ!!

「なんでこうなったんだろう!？」

帰り道に男——アロンがぼそりと呟いた。

翌日っチャ!!

オレチャマが目を覚ますと全く知らないベッドに寝ていたっチャ。

「そういえば・・・」

ここはアロンの家。昨日泊めて貰った家だったチャ。

「あ、起きた!？」

キッチンからアロンの声がしたっチャ。

「朝食食べる? サラダとトーストだけど」

「食べるっチャ」

オレチャマは朝食を貰う事にしたっチャ。

いいパンの臭いがするっチャ。

「あ、そうだ! 僕もう少ししたら港へ用事があるんだけど・・・
付いてくる?」

アロンはそっとトーストとサラダ、牛乳をオレチャマの前に出したっチャ。

「別にいいっチャ。それよりアロン、あの・・・お願いがあるっチャ」

「ん？」

オレチャマは昨日から考えていた事を話してみる事にしたっチャ。

「オレチャマを・・・ここに住まわせてくれないっチャ？」

正直、毎日の宿が不安定なオレチャマにとって、一か八かの大勝負に出たっチャ。

「えー!？」

向こうも驚いてるっチャ。あま、突然聞いたから驚くのは当然だと思っけど・・・

「うーん・・・僕は別にいいんだけど・・・ここは元々村長さんが管理していた家だから・・・村長さんに聞かないと分からないなあ」

「分かったっチャ。なら村長に聞いて来るっチャ!!」

せつかくの宿を捨てたくないっチャ。野宿は絶対にいや。

オレチャマは朝食を急いで平らげ、外に飛び出したっチャ。

「ちよつとチャチャ、役場何処だか分かるの？」

アロンの声を聞いたオレチャマは急ブレーキ。

「役場って何処っチャ？」

「はあ・・・」

アロンのため息が聞こえたけど無視。

「何処チャアアア？」

「何が何処だって？」

突然、オレチャマの後ろから声が・・・

「村長さん!!」

アロンがこっちに走って来るっチャ。

オレチャマが振り返るとそこには小太りのオッサンが・・・

「コイツが村長おおおお!!？」

思わず語尾の

「チャ」を忘れるほどの威厳ゼロの男だったっチャ。

「なるほど、君はここに住みたいのか」

「イエスっチャ！」

今、オレチャマ達はアロンの家の中でオレチャマの宿について話し合いの真っ最中っチャ。

「オレはべつにいいけど、アロン君はいいのか」

「はい、僕も別に構いません。なんだか密林で命助けられたみたいだし」

「本当おに、いいっチャ？」

「うん、別にいいよ」

「サンキューアロン！マジで助かるっチャ」

何か凄いスムーズにオレチャマの宿が決定したっチャ。

「で、アロン君。もうすぐセルラーグ君達の船が発するぞ。見送りに行くかね？」

「あ、はい、行きます。じゃあチャチャ、留守番よろしくね」

「任せるっチャ」

オレチャマの新しい生活の幕開けっチャ！！

番外戦：チャチャ・ストーリー（後書き）

四人目ハンター結果発表！　まずはお礼。皆様のおかげで結構案件が集まりました。どれもいい案件ばかりで、誰を四人目にするか本気で迷いました。案件を送ってくれた皆様、本当にありがとうございます。もう感謝で頭が上がりません。では、四人目ハンターを発表します。四人目は・・・キラ様考案の

「フィオナ・クレイン」に決定しました。ぱちぱち！　やっぱりあのグループには知的な女の子は必要だと考えました。キラ様、フィオナの案件、本当にありがとうございました。フィオナは次章の中盤辺りから登場させる予定です。そして他の皆様の考案したハンターも物語内にはしっかり登場します。皆様、本当にありがとうございました。

第16戦：VSチャチャ（前書き）

今日は、今まで休載していたと言うことで、お詫びにまだ三日経ってませんが、1話掲載したいと思えます。新章です。かなり長めになる予定です。はい。では、若干コメディー重視の第16戦、お楽しみ下さい！

第16戦：VSチャチャ

ピチの村から船で約三日の所にある貿易都市

「ホテルタ」

海に面した港町で、漁業が盛んな貿易都市。

ここには様々な物が売られており、町中多くの人でごった返している。

町の人口はこの辺の中では一番多い。

いつもがお祭り気分のこの町の港に、一人の少女が降り立った。

「船長さん、ありがとうございます」

オレンジ色のショートカット、少し小柄で意外とスリムな体。目は大きく輝いている。

「いいって。それより、しっかり相手に気持ちを伝えるんだぞ」

「は、はいっ」

乗ってきた船の船長にお礼を言い、少女――ルリアは町の中心部へ向けて歩いていった。

ここ、ホテルタはルリアの故郷だ。

「どうしようかな・・・一回実家に帰ってからにしようかな？」
ルリアの懷には先日倒したクルペッコの羽（彩鳥の羽根）がしまっている。

「おー！！ルリアちゃんかい！久しぶり！」

そう言ってくるのは、雑貨屋のおばちゃん。

「あ！おばさん！こんにちは！！」

ルリアは軽く挨拶。すると・・・

「おう、ルリアか！おかえり！！」

「あらミサーラさん、ごきげんよう」

「ルリアちゃん、おかえり!!」

次々に挨拶されるルリア。

ルリアは一つ一つ挨拶を返しながら、実家に向かい歩いていった。

ハンターズギルド（ホテルタ支部）

ルリアはギルドの前を歩いていた。

町のあちらこちらには大量の食料や道具、モンスターの素材等が売られている。

人々の声が、この町の賑わいを表していた。

（懐かしいなあ）

ルリアはそんな思いに駆られる。

その時、

ドンッ!!!!

突然後ろから誰かに押された。

「きゃ!」

ルリアは小さな悲鳴を上げ、バランスを保つ。

「あはははは! 相変わらずルリアはとろいな!」

後ろから男性の声でした。

ルリアはぱっと振り返る。

そこには一人の男の人が笑いながら立っていた。

「ちよっと、ウアルト、何すんのよ!」

「わりいわりい。そんなつもりは無かったんだよ。・・・ははは、

久しぶりだな、ルリア」

男——ウアルトはルリアの方を見た。

ルリアとウアルトはこの町で一緒に育った幼なじみだ。

ルリアの家とは近所なので、昔は良く遊んだものだ。

ちなみにウアルトもハンター。現在防具を着てないが、彼は上位ハンターだ。「で、お前、なんでここにいるの？ 確か今はピチにいるはずじゃ・・・」

ウアルトが聞いてくる。ルリアはちよつと答えにつまった。

「え・・・べ、別にそんな深い理由は無いけど・・・ただ・・・ちよつと・・・その・・・」

ルリアは少しもじもじくねくね。

「なーにもじもじしてんだ？ 気持ち悪いぞ」

「う、うるさい！」

顔面真っ赤のルリアはウアルトに向かい、最大パワーのナックルを放つ。

ドカツ！！！！

「ぐはっ・・・」

グシャっと言う音と共に、見事ウアルトの顔面に直撃した。

そして、ウアルトは綺麗な放射線を描き地面に落っこちた。その距離約2メートル。

「ちよつと・・・やり過ぎたかな？」

少しばかり、後悔の念が頭を過ぎる。

・・・数秒後、地面からウアルトがひょこつと起き上がった。

「・・・ごめんなさい・・・」

顔面蒼白のウアルトが呟いた。

その頃、ピチの村。

村の外れにあるアロンの家。

そしてその家からは、何やら騒がしい音が。

「チャチャ、お前僕のプリン食べたな！」

「いや、プリンなんて見た事ないっチャ」

そう言うチャチャの口の周りにはプリンのカラメルがべったり・・・

「じゃあその口の周りのカラメルは何!？」

「こ、これは・・・」

その時、

コンコンっ!!

「アロン君、いるかなあ?」

家の外から村長の声がする。

「はい」

ガチャつと、アロンは家のドアを開けた。

そこには予想通り村長の姿が。

「何か用ですか?」

「アロン君・・・目が怖いんだけど・・・何かあった?」

「いや、何にも」

明るい声とは裏腹に顔は笑っていない。

「チャ・・・」

チャチャは今のアロンに恐怖感を感じた。

「そうか・・・なら一つ頼み事が・・・」

「プリンおごってくれたら考えます」

「プリン!？」

村長の頭の中にはハテナマークが沢山。

「僕、今ちょっと糖分不足で・・・」

アロンの瞳は渴いていた。

「アロン君・・・」

村長はダッシュで甘味屋へ向かう。

「・・・チャチャ、本当に食べてないんだね?」

こちらへ振り返るアロンからは、ドス黒いオーラが・・・

「・・・ごめんなさいっチャ・・・」

チャチャはひたすら、土下座するしかなかった。

再びホテルタ。ここはホテルタのメインストリートにある食堂、
「美味屋」。

その店の中のテーブル席にルリアとウアルトはいた。

ルリアは「ザザミシリーズ」の防具。

ウアルトは先程とは違い、全身白い防具「ベリオシリーズ」の剣士バージョンを纏っていた。

お互い頭の防具は外している。

「ウアルトってもうベリオロス狩ったんだ」

「いや、別に俺一人で狩った訳じゃないよ!」

ウアルトは軽く照れ笑い。

「でも凄いよ!あの氷牙竜だよ。私なんて見ただけで怖くなって動けなくなると思うし・・・」

そう言うところルリアはウアルトの顔を見る。

スラっとした顔立ち、程よく筋肉が付いた体。そして何より・・・

「そうだ、ルリア、明日にでも一緒に狩りに行かないか?」

軽く微笑むウアルト。

そう、何よりこの笑顔。とても爽やかで最高に格好いい。

「・・・何、人の顔じろじろ見てるんだ?」

「・・・えっ!!」

ルリアに猛烈な恥ずかしさが込み上げる。

「おい、顔真っ赤だけど・・・大丈夫か?」

ルリアはその言葉でさらに恥ずかし度アップ。

「べ、別に何でもないから」

プイっとそっぽを向きつつ、強気で言うルリア。

「そう・・・じゃあ話戻すけど、ルリアっていつまでホテルタに居られるの?」

「あー・・・とりあえずは七日間ぐらいかな?」

今回の里帰りは、村長に断りを入れてきたので多少なら長く滞在

できる。しかしそうなる・・・

（そうなる、あの村にいるハンターはアロンだけ・・・何か不安）

「七日間か・・・じゃあラサナウ氷河に行かないか？」

「ラサナウ氷河って・・・」

ラサナウ氷河とは、ここホテルタから少し離れた所にある氷河の事。

「別名（凍土）。確かドスバギイの討伐クエストがあったはずだ」「バギイか・・・」

ルリアは想像してみる。（もし、私がドスバギイを倒せたとしたら・・・彩鳥の羽根を渡すチャンスに繋がるかも）

ルリアの周りには桃色のオーラが・・・

「よし、行こう！バギイ討伐で決まり！」

「おし、じゃあ作戦会議を開かねば」

ルリアとウアルトはすぐに運ばれてきた食事を食べながら、作戦会議を開いた。

その間、ルリアはずーっとにこにこ笑っていた。

その頃、ピチの村からホテルタとは反対方向に四日の場所に位置する島（ロザナ島）。

島の半分は砂漠のこの島で唯一の村（ジーン村）に一隻の貿易船が。

「ようこそいらっしやいました」

村の村長らしき人が船長に挨拶。

「いやいや、そんなにかしこまらなくても」

そんな二人の会話を尻目に、船から一人のハンターが降り立った。

防具は全身（ディアブロXシリーズ）だ。
背中には紫色のランスが。

彼は太陽があまりにも眩しかったので、手で目に入る光を遮る。

「おい、セルラーグ。オレ達がこの村に滞在する間、村長さんが
あんたを家に泊めてくれるってよ」

「そうか。なら村長に礼を言っといてくれ」

そう言うとき、セルラーグは村の探索と、これから狩る予定
のモンスターの情報収集へ向かった。

（今回はどれだけ面白い狩りになるのだろうか）
セルラーグはこれからの狩りに胸を躍らせた。

さらに再びピチの村。

「アロン君。プリン買ってきたよ」

村長は顔面蒼白で、息が切れていた。

（どんだけ走ったの！！！！）

アロンは心の中で軽く突っ込み。

「なんか・・・すみません村長」

「いや、いいんだ。はあ、はあ・・・あれ？チャチャ君は？」

「さあ？」

アロンはにこにこ笑顔だ。だが、家の中からは生臭い臭いが・・・
村長は気付かない振りをした。

「そつ、そうか。ならいいんだが」

村長は震える手でアロンにプリンを渡す。

「人間、食べ物の恨みは恐ろしいですからね・・・特に好物を
食べた後のデザートを取られた時なんかは・・・」

アロンはボソッと呟いた。

村長は何故か失禁しかけた。

（アロン君ってこんなキャラだったけ？）

「で、村長さん、頼みなのは一体？」

村長はびくつと身震い。「あ、ああ。実は最近、ザメラ水没林に大型モンスターが現れたみたいで・・・」

これから、三人の壮大な狩りが始まる。

そして・・・

「アロン様、元気で頑張っているでしょうか？」

ドンドルマから一隻の船がピチの村に向かい、出港した。

第16戦：VSチャチャ（後書き）

皆さん、どうでしたか？ 今章ではアロンと、後ほど登場する新ハ
ンターフィオナが水没林であのスポンジモンスターとバトル！

次章ではルリアとウアルトの凍土での狩り！ そしてさらに

次章ではセルラーグの狩りを予定しています。（あくまでも予定で
す） 若干ネタバレ気味ですが、楽しくをモットーに頑張ります。

これから今作をよろしくお願いします。 で、次回予告――

ーアロンは初めての水没林へ・・・そしてチャチャは！？ では次
回で！

第17戦：VSブナハブラ

ピチ農場。

「すみませーん」

アロンは農場の直売所にいた。

「はーい」

直売所の奥から出てきたのは少し小柄な少女。

「あれ？なんでラルちゃんが？」

少女はラル。ルリアの友達・・・だったっけ？

「今私バイト中なんです。で、アロンさん、今日は何か？」

「ああ、そうだ。あのさいキツギ藻ってある？」

「はい、ありますよ」

「じゃあそれを10枚と薬草を10枚、アオキノコ10本にハチミツを10ビン下さい」

「はい、毎度あり！」

アロンは財布を取り出す。

「あの、アロンさん」

ラルが商品を袋に詰めながら話掛けてきた。

「ん？」

「ルリアちゃんっていつ頃帰ってかるのかな」

「うーん、それはルリア次第だと思うけど」

「そうですか・・・ホテルタ土産、ちゃんと買ってきてくれるかな？」

「多分ラルちゃんには買ってくるよ」

「美味しい物がいいな・・・アロンさん、合計で500ゼニーです」

アロンは財布からゼニーを取り出す。

「何かいつもより安くない？」

「サービスです！」

アロンはゼニーを払い、商品を受け取る。

「ありがとうございます」

ラルの営業ワードを聞きながらアロンは農場を後にした。

その頃、ザメラ水没林の深部。

辺りを木々に囲まれ、薄暗くなっているこのエリアに大量のルドロス達が・・・

そして・・・

「グギャヤアア！」

一際でかい鳴き声が辺りにこだまする。

その鳴き声は水没林全体に響いた。

「グオオオオオ」

「グオオオオオ」

ルドロス達が一斉に叫びだす。

その声はザメラ密林にまで響いた。

村長宅。

「アロン君、今日は水没林の下見がてらルドロス狩りでもないか？」

今、アロンとチャチャは完全武装状態。そして村長とこれからの狩りについて話し合いをしていた。

「ルドロスですか・・・」

名前ぐらいは聞いた事があるが、実際に狩るのは今回が初めてだ。しかも・・・

「ちなみにルドロスってのは主に水中で生活しているモンスターだ。と、なると必然的に水中での狩りとなるが・・・アロン君、水中での狩りの経験は？」

「あ・・・ありません・・・」

「そうか・・・じゃあチャチャ君は？」

「オレチャマは泳げないっチャ」

「そうか・・・」

気まずい空気が周りに流れる。

「でも、浮輪があればオレチャマは泳げるっチャよ？」

「・・・」

沈黙する空気。

「アロン君、水没林の大型モンスターは違うハンターに倒してもらうよ」

「・・・申し訳ありません。けど、ルドロス狩りはやらせてもらいます。今の内に水没林に慣れておきたいので」

「そうか・・・分かった。では今回、ザメラ水没林にいるルドロスを6頭狩って来てくれ」

「分かりました」

アロンは村長からペンを借り、クエスト書類に必要事項を記入していく。

「チャチャも狩り、行くよね？」

「・・・いやって言ったら怒るっチャ？」

「ぶちギレ」

プリン的一件からずーっと機嫌が悪いアロン。

ザメラ水没林。

狩場の半分が水没しているこの狩場に二人のハンターが。

「やーっと着いた」

そう言うのアロンは今まで乗ってきた竜車から飛び降りた。

「ちよつと待ってチャ・・・」

チャチャはそーつと竜車から降りる。

「ここが水没林かぁ・・・」

辺り一面全て木。下には水。空には雲。そしてベースキャンプ。

「アロン、ここベースキャンプなのにモンスターがいるっチャよ！」

「へ？」

アロンが振り返るとそこには一匹のブナハブラが・・・

「虫っチャアア!!」

チャチャは超パニックっていた。

ブーーン!!

ブナハブラの羽音が響いている。

「チャチャは大袈裟だなぁ」

アロンは持参してきた毒けむり玉を投げた。

ポン!

玉から虫に有害なけむりが出てくる。

そして・・・

プウ~~~~ン・・・

ブナハブラは力尽き、地面に落ちていった。

「なんでベースキャンプにブナハブラが？」

「あ、アロン！」

チャチャがアロンの腕を引っ張る。

「なんだよ？」

「あ、あれ・・・」

アロンはチャチャが指差す方向を見た。

そこには・・・

ブーーン

ブーーン

ブーーン

大量のブナハブラの群れが・・・

「「NOオォー！」」

アロンとチャチャのむなしい叫び声が辺りに響いた。

「うわっ！ざっと20匹はいるぞ」

「アロン、毒けむり玉っチャ」

「・・・さっきの一個しか持って来てない」

「チャアアアア！」

アロンはとりあえず背中中の鞘から太刀を抜き放った。

「どうしよう・・・」

ブーーン

ブーーン

ブーーン

「・・・ここってベースキャンプだよね」

アロンはそう呟きながら太刀を振り下げた。

その一降りで仕留めたのはたったの一匹。

残りの19匹は・・・

「チャアアアア！」

チャチャに襲い掛かっていた。

（お気の毒に・・・）

しかし、アロンはある事に気が付いた。

（何でチャチャだけに・・・）

そう、ブナハブラは全員でチャチャだけを襲っているのだ。

「チャアアアア！アロン、助けてっチャ！」

アロンはチャチャの方を見る。

「見てないで助けてっチャアアアア！」

そこでアロンはある物を見つけた。

「チャチャ・・・」

チャチャの口の周りには何やらべったりとした液体が付いていた。

「お前・・・ハチミツ盗み食いしたか？」

「チャー！！！」

チャチャはビクツとしている。

「・・・ブナハブラは自分で何とかしろ」

「ごめんなさいっチャアアアアア！」

チャチャは泣きながら他のエリアに走って行った。

「さてと・・・」

アロンは身支度を整える。

正直、少し恐怖感はあるがドスジャギイの時ほどでは無い。

「・・・ロアルドロス、いないといいなあ」

そう言いながらアロンは水没林の中央に向かい歩いて行った。

第17戦：VSブナハブラ（後書き）

アロンとチャチャのコンビでの初狩りです。今回、早速ドジりましたが、この先上手くやっていけるのかは作者にも分かりませんね。（オイオイ！）

新章、VSロアルドロス篇はまだ始まったばかりです。アロン達はルドロス軍団に見事勝利出来るのでしょうか？ 今後も応援よろしくお願いします。では次回予告——またチャチャがやってしまいます。そしてアロンの怒りのメーターはどんどん上昇していき・・・

次回、アロンが壊れます。では！

第18戦：VSルドロス前編（前書き）

皆さん、更新が遅れてすみません。

何とか最新

話、完成しました。今回の後半から、キラ様考案のフィオナ・クレインが登場します。そしてさらに、新たなハンターも新登場。
VS ロアルドロス篇、ますますヒートアップです！！

第18戦：VSルドロス前編

ザメラ水没林、ベースキャンプから一番近いエリアにアロンとチャチャはいた。

このエリアはそれほど木々は多くなく、視界も良好だ。

ただ、地面が凄くぬかるんでいるため・・・

びしゃ！！

「チャっ！！！」

チャチャは地面に足を取られ本日三度目の転倒。

「また転んだの！？」

アロンは見ているだけで起き上がるチャチャを手伝わない。

「もう、水没林はいやだっチャ」

そう言うチャチャの顔には大量の泥が・・・

「・・・うわ」

「アロン、そのリアクションはなんだっチャ！」

「チャチャ・・・」

「だから引くなっチャ！！」

二人は仲良く（！？）次のエリアに向かい歩いていった。

次のエリアも視界は良い。むしろさっきのエリアより見通しが良い。

しかも、今、このエリアにいるモンスターはアプトノスだけ。

ただ・・・

「・・・ここから本格的に水中エリアになりそうだな」

アロンとチャチャの目の前には、明らかに深そうな濁った川が・・・

「オレチャマ、浮輪持って来てないっチャよ」

「参ったなあ」

実際のところ、アロンは泳げる。

しかし、泳ぎながらの狩りはと言うと・・・

「・・・チャチャ、ここで泳ぐ練習しようか」

「チャ!？」

チャチャはびっくり。

「ここ、凄く濁ってるっチャよ!」

「でもここには危ないモンスターもいない」

「だからってチャゝ・・・」

凄くいやそうなチャチャ。

アロンはそんなチャチャの頭を掴み、持ち上げる。

「え、ちよっ、ちよっと何するっチャ!？」

「こうする!」

アロンは手に持ったチャチャを川に向けて投げ放った。

「チャアアアア」

ドポン!!

綺麗に放射線を描きながら川に落ちるチャチャ。

(よくも僕のプリンと調合用のハチミツを・・・フッフッフ)

ぶくぶくぶく

いつまで経っても水上に浮上してこないチャチャ。

(少し・・・やり過ぎたかな?)

アロンがそう思い、川に飛び込もうとした。

その時、

ギロっ

(ん!?)

今、誰かに見られたような気が・・・

ギロっギロギロっ

「何かいるのか？」

アロンは辺りを警戒しながら背中の太刀に手を伸ばす。

ドポン!!

突然、川の中から何かが飛び出して来た。

「うわっ」

アロンは太刀を鞘から抜き放ち、構える。

「グオオオオオオ」

「グオオオオオオ」

そこには、二匹のルドロスの姿があった。

「こ、こいつがルドロスか・・・」

アロンはルドロスの背後に周りこむ。

その動きに一匹のルドロスが反応。すぐに後退しアロンと距離をとる。

もう一匹の方もアロンの動きに気づき、後退はせずにダッシュでアロンとの距離を縮めた。

「うわっ」と

アロンはダッシュしてきたルドロスに少し怯え、ちよつとだけ後ずさる。

「グオオオオオオ！」

ルドロスはアロンとの距離を三メートル程に縮めると、突然動きを止め、口から球体の水らしき液体を吐き出した。

びしゃ！

「ぐへっ」

足が震え、ギリギリで液体をかわせなかったアロンは、体全体に液体を喰らった。

「くそっ」

アロンは液体を吐いたばかりで無防備なルドロスの背後に何とか周りこむと太刀をルドロスに向かい振り下ろす。

「ウオオオオオン！」

ルドロスの悲鳴が聞こえた。

アロンはもう一匹の方にも注意を向けつつ、今、目の前にいるルドロスに向かい全力で斬り掛かる。

「おりゃああああ！」

突き、切り上げ、斬り下ろし。

ズサッと力任せに斬り刻む。

「グオオオオ・・・」

そして一匹のルドロスが絶命した。

「グオオオオオオ」

もう一匹のルドロスが背後から飛び掛かって来た。

「うわっ！」

アロンはルドロスの体当たりをもらに喰らい地面に倒れこむ。

「うつ・・・」

アロンはなんとか起き上がる。

「グオオオオオオ」

ルドロスはアロンに目掛け球体の水のブレスを放った。

びしゃー！！

アロンは何とかかわし、一気にルドロスの背後に回る。

（よし、いくぞ）

アロンが太刀を振り上げたその時、

ぼひゅん！！

「チャアアアア！オレチャマ復活っチャ！」

突然地面からチャチャが飛び出してきた。

「うわああああ」

突然の事にビックリし、思わずしりもちをつくアロン。

ルドロスはその隙に水中にダイブ。他のエリアに逃げてしまった。

「フハハハ！オレチャマはあのくらいでは死なないっチャって・

・あ、アロン？」

チャチャは見た。目の前にダークオーラを纏ったアロンの姿。

「死ね」

チャチャはどうとうアロンの逆鱗に触れてしまった。

「え？今回オレチャマ何も悪い事してないっチャ・・・あ、アロ

ンさん・・・ごめんなさい」

「プリン・ハチミツ・ルドロス」

アロンはその三つの単語を呟きながらチャチャの処刑を実行した。

その頃、ピチの村。

今、ピチ港に一隻の船が到着した。

「アロン様、元気でしょうかね？」

「ガハハハ！もう死んでるかもな」

「グーダ、少し静かにしろ。うるせえんだよ」

三人のハンターが港に降り立った。

「本当に・・・小さな村なんですな、ここ」

「ガハハハ！オレ様は腹が減ったぞ。まずは飯食べようぜ」

「黙る事が出来ないのかあんたは」

「なんだとー！！」

「グーダ様もギンエン様も少し声が大きいですよ。村の人に迷惑をかけてはいけません」

「なんだとおおおお！フィオナ、このオレ様に命令するきか！？」

三人のハンターは村の中央に向かい歩いていく。

「あの・・・命令ではなくてお願いを・・・」

「うるさい、オレ様は命令されるのは大嫌いだ。ゆうこと聞くのは狩りの時だけだ」

三人のハンターの内の一番大型で、背中に大剣を背負っている男・
・グーダはそう言うのと、一人で何処かに向かい、歩いて行ってしまった。

「はあ・・・」

先程までグーダと言い争い（？）をしていた少女・・・フィオナはため息をつく。

「フィオナ、落ち込むな。わりいのは全てあのデブだ」

そう言ってフィオナを慰めるのは、三人のハンターの最後の一人・

・ギンエンだ。

「フィオナ、俺らはとりあえずアロンを捜そう」

「はい、そうしましょうか」

ギンエンとフィオナはまず、この村の村長宅を訪れる事にした。
全ては再び、アロン・ブラクティアと会うために。

第18戦：VSルドロス前編（後書き）

新ハンターのフィオナ・ギンエン・グーダ初登場の今回、どうでした？ 三人はいつ活躍するのか、そしてアロンとの関係とは？

VS ロアルドロス篇（まだロアルドロス出てきてないけど）は、ますます盛り上がります。今後応援よろしくお願いします。

以上、モンハン3でラギアクルスに大苦戦中の作者でした。

そして次回予告——アロンとフィオナ達の関係とは一体・・・
そしてロアルドロスは登場するのか？ 次回は更新が遅れない

ように気をつけます！では！！！！

第19戦：VSルドロス中編（前書き）

皆さん、モンハンやってますか？ 僕は猛烈にプレイしております！！
最近ではラギアクルスとギギネブラに惨敗中ですが
めげずに頑張っています！ 2ndGのほうもG級ティガレックス
を今だに一人では倒せない状況です。 ああ情けない・・・。
そんな事はさておき、最新話が完成したので、そちらの方をどう
ぞ！

第19戦：VSルドロス中編

巨大都市ドンドルマ。 今、ここであるチームのうわさが広まっていた。

「知ってるか？「古龍騎士団」のうわさ」

「ああ知ってるよ。なんでも、チームメイトの四人が全員、一人で何らかの古龍を討伐した事があるって奴だろ？」

「そうそう、それだよ。でさ、実は今このドンドルマにその内の一人が来ているらしいんだ」

「へえ。一体誰が来てるんだ？」

「あの《炎王龍》を一人で倒した【獄炎を超えた紅き姫】。何でもチヨー美人だとか」

「なっ・・・【獄炎を超えた紅き姫】だと！おい、今彼女は何処に！？」

「確か・・・さっき貿易都市ホテルタに向かう船に乗ったとか」

「何っ！まだ出港してないよな」

「ああ、まだ出港までには時間がある。サイン貰いに行かないか！？」

「行く行く！」

二人の男は港に向かい走りだした。

古龍騎士団

それは今や伝説にもなっている最強ハンターチームの事である。チーム四人全員が必ず一対一で古龍に挑み、勝利を納めた事のある最強のハンター達。

彼らは、倒した古龍の防具を身に纏い、それぞれに倒した古龍に

ちなんだ通り名が付けられている。

【獄炎を超えた紅き姫】

【嵐に舞う大勇者】

【雷撃を撃つ神射手】

【大地を疾る蒼き剣聖】

彼らはハンター達から尊敬され、ギルドや世界政府からも一目置かれて存在。

彼らがひとたび狩猟に出たら、その狩りは絶対に成功するとまで言われる。

そして彼らはモンスターによる村の破滅をいくつも救ってきたのだ……。

その内の一人が今、巨大都市ドンドルマに来ているのだ。

ドンドルマから遠く離れた辺境の村、ピチの村。
人口30人ちよいの小さな村の村長の家。

「じゃあ君達がドンドルマ時代のアロン君の相棒なのかい？」

「はい」

ピチの村の村長、ガドラスは、目の前にいる二人のハンターを見る。

「えーっと……君が……」

「フィオナです。フィオナ・クレインと申します」

「フィオナちゃんか。で、君は？」

「ギンエン。カミザキ・ギンエンだ」

ギンエンはしれっとした態度で言う。

「カミザキとは、変わった名ですな」

「・・・ああ、俺は東洋出身だからな。ちなみにカンジだと“神崎銀炎”」

空中に指で書くギンエン。

「カンジとは・・・一体なんだ？」

村長の頭にはハテナマークが。

「カンジ——漢字とは東洋で使われている文字の事だ」

「ほほう・・・」

「あの、ガドラス様」

横からフィオナが会話に加わる。

「今、アロン様はどちらに・・・」

「ああ、アロン君なら今頃ザメラ水没林だな」

『えっ！！！！』

二人同時に驚いた。

「ガドラス様、水没林と言うと、アロン様は狩に行かれたのですか！？」

「あ、ああ」

「アロンは一人で行ったのか！？」

「いや、チャ・・・いやいや、一人だ」

（チャチャはオトモとしてだから狩りの契約はしてない。この場合はアロン君一人で狩りに行った事になる）

かなり驚いている様子のフィオナとギンエン。

「・・・あのアロンが一人で狩りなんて・・・」

「信じられませんね」

「そ、そうなのか？」

村長がおおずと聞く。

「はい。アロン様の狩りと言えば・・・」

「恐怖で足が動かず、ブルファンゴの突進をもろに喰らうし」

「フルフルベビーに頭を噛まれ、出血が止まらなかったり」

「コンガの放屁をもろに喰らってずーっと嘔吐し続けたり」

「ギアノスに囲まれて氷漬けにされたり」

二人はかなり苦勞しているんだと村長は思った。

「で、今回君達はアロン君に何か用でも？」

「いえ、特に用事はありません。ただ、久しぶりにアロン様に会いに行こうかなと思ひまして」

「なるほど、アロン君なら今日か明日には帰ってくるだろう」

村長は二人の方を改めて見る。

「時間に余裕があるなら今日は宿に泊まっていくといい。宿屋はこの先の道を真っすぐに行った所にあるから」

フィオナはそれに頷く。

「はい、そうさせていただきます。ガドラス様、今回突然の訪問ですみませんでした」

フィオナは深々と頭を下げる。

「いえいえ、こちらもちゃんとしたお出迎えが出来ずに・・・」

村長は軽く笑った。

「さて、そろそろ行くかフィオナ。グーダも捜さなくちゃいけないし」

「はい。ではガドラス様、私達はこれで」

「では、お見送りしましょう」

三人は家の外に出た。

外は風が気持ち良く、爽やかな青空が広がっていた。

しかし、ここザメラ水没林は青空ではなく、どんよりとした曇り空。

「うわっ・・・危ないなあ」

ザメラ水没林の川に潜り、慣れてない手つきでルドロスと戦っている一人のハンターが。

「グオオオオオオ！」

かなり奥の方から突進してくるルドロスが。

（やばっ！！って、それ以前に息がああああ！）

ハンター・・・アロンはひとまず水上へ。

「ぶはあ!!」

精一杯深呼吸をするアロン。

そして、アロンの下には先程のルドロスが・・・

「うっそー!!」

アロンは全力で岸まで泳いだ。

「やっぱり水中は無理だああああ」

何とか岸にたどり着いたアロンは弱音を吐いた。

「はあ〜」

アロンはとりあえずベースキャンプに戻る。

（なんだか疲れた・・・一回寝ようかな）

アロンは覚束ないあしどりでベースキャンプに向かった。

アロンはもう、三頭のルドロスを狩り終えていた。

恐怖を押し殺しながらの狩猟は身体的にもキツかった。

ベースキャンプに戻り、ベッドに倒れこむアロン。

顔は白く、体は微かに震えている。

「はあ、はあ、は・・・あ・・・」

アロンはそのままベッドで寝てしまった。

そしてベースキャンプの隣のエリアでは・・・

「グオオオオオオオオオオオオオオ!!」

巨大なスポンジモンスターが暴れ回っていた。

第19戦：VSルドロス中編（後書き）

ここにて古龍騎士団の設定が登場。今後、アロン達との関係はあるのでしょうか！？　そしてアロンの元相棒のフィオナとギンエ

ン（銀炎）とグーダ。彼らはアロンと合流出来るのか！？次回必見です。

話は変わりますが皆さん、モンハンやる時の防具ってどんなのを使ってますか？（特にトライ）　僕はぶっち

やけルドロスシリーズ（剣士）です。装飾品は無し。武器はボーンアックス改。かなりの初心者シリーズです。はい。　皆さんはど

んな防具と武器を使ってますか？　小説やゲームプレイ時に参考にしたいので、教えてくれたら嬉しいです。以上、作者からのお願いでした！！　ではまた次回で！

第20戦：VSルドロス後編（前書き）

今回は少し長めになってます。アロンは一体どうなるのか・・・
そして、今回のラストにはこの物語の鍵を握る発言あり。さあ、最
新話をどうぞ！

第20戦：VSルドロス後編

アロンは目を覚ました。

（ここって・・・あ、そうだ、水没林だ）

アロンは少し辺りを見渡す。

隣にはボロボロのチャチャが眠っていた。

（そうだ、僕はルドロス狩りをしている・・・）

アロンはそこである物に気が付いた。

（なんだ？あれ？）

アロンの目の前にはボロボロになっている防具らしき服が落ちていた。

しかも、よくよく見るとその防具はアロンと同じのヘーオスシリーズの剣士バージョンだ。

（・・・ん？）

アロンは突然寒さを感じ、自分の体を見た。

（あれ？）

現在アロンはインナー姿だ。

（え！！確か僕はベースキャンプに来て、ベッドに倒れて、そのまま寝て・・・あれ？僕、いつ防具脱いだけ؟؟??）

アロンはベッドから立ち上がり、地面に落ちている防具を拾いあげた。

ボロボロであちこちに穴が空いたヘーオスシリーズの防具。

（なんで！！！）

その防具はアロンのものだった。

（なんでこんなにボロボロなの！？）

アロンは辺りを見回す。

（誰がこんな事を）

アロンはベッドで寝ているチャチャの方を見る。

（まさか・・・チャチャは悪い奴だけどここまではしないし・・・）

その時、近くの茂みがガサガサと動いた。
「ひいゝ！」

思わず情けない声を出すアロン。
ガサガサガサガサ

「誰かいるの？」

その時、茂みから何かが出てきた。

「うわー！！」

アロンは頭を抱え込み、地面にしゃがみ込む。

「あ、起きたんだ」

「へ！？」

アロンはふと、頭を上げ前を見る。

そこには、人間がいた。

「大丈夫？だいぶルドロスに噛まれてたけど」

その人間は、少女だった。

彼女は大胆にもかなりの露出がある服を着ていた……いや、服
じゃなくて防具だ。

白く輝くその防具はたしか……

〈キリンXシリーズ〉

だ。彼女はかなり凄腕のハンターらしい。

「大丈夫？まだ具合悪いの？」

少女はざっと見て15歳くらい。

目は蒼色に輝き、可愛いらしい声、アロンの肩ぐらいにしかない
身長。

はっきり言って、まだ幼い子だ。

「きみは……？」

アロンはおずおずと聞いた。

「あ、わたしはナミリ。こう見えて15歳です」

（いや、15が妥当だろ！！）

アロンは心の中で突っ込んだ。

「ナミリ・・・ちゃんか・・・僕、今まで何を」

「え、何も覚えてないの・・・」

アロンはそれを聞いて変な勘違いを・・・

「な、何いゝ!!」

「どうしたの! 顔、真っ赤だよ」

しかしそんな声はアロンに届かない。

(防具を脱がされ、インナー一枚でベッド!!)

アロンは大パニック!

「うぎゃああああ」

「あの、アロン・・・さんですよね!？」

「ほへ!？」

アロンはぴたっと大人しくなった。

「な、なんで僕の名前を知ってるの!？」

するとナミリはベースキャンピングに置いてある小さな机の上から一枚の紙を持ってきた。

「ここに書いてあったから」

その紙はアロン明記のルドロス狩りの契約書。

「これって・・・」

「はい、あなたのです」

「え・・・」

少し・・・いや、かなり困惑気味のアロン。

「うーん・・・じゃあ、あなたが眠っていた間に起きた出来事を片っ端から言っていきますね」

「・・・頼む」

ナミリは今回、ゼナン島のザメラ水没林でシーブライト鉱石の採

掘依頼を受けて来た。

「ここがザメラ水没林かぁ」

全身をキリンXシリーズで揃えたナミリが呟く。

「待つて欲しいニヤゝ旦那ぁ」

後ろから付いてくるのはナミリのオトモアイルールのルンバだ。模様は白一色のアイルーだ。

「遅いよルンバ。早くしないと置いてくよゝ」

両手でメガホンを作りルンバに向かい叫ぶナミリ。

「旦那が早過ぎるんだニヤ!!」

「あれ？」

「無視かニヤ!？」

ナミリはルンバの言い訳を無視し、ベースキャンプにある小さな机に向かい走り出した。

「これって・・・」

それは、一枚の紙だ。しかもその紙はクエスト受託用紙。

「なにになに・・・？」

「あ、旦那、そうゆうのは勝手に読んじゃ駄目なのニヤ!」

ルンバを無視し、紙の内容を読み上げるナミリ。

「ねえルンバ」

「何ニヤ？」

ナミリはにこにこしている。

「この紙破いていい？」

「ニヤニヤ! 駄目に決まってるニヤ!!」

「あはは! じょーだんだよ」

「・・・旦那だから冗談でも怖いのニヤ」

ルンバはため息をついた。

「へえ・・・アロンさんって人が今ルドロスを狩ってるんだってさ」

「だから読んだらいけないのニヤ!!」

ナミリは紙を机の上に戻すと、背中にしよってある弓に手を伸ば

した。

「旦那？」

「・・・隣のエリアに何かいる」

「ニャ！？」

ルンバも自らの武器であるタルを真似したハンマーを握る。

「いくよルンバ！」

「はいですニャ！！」

隣のエリアにナミリが着いた途端、彼女は突然笑いだした。

「あはははは！何あれ」

そしてルンバが一足遅く到着。

「旦那、何がおかしいのニャ？」

「だって、あれ」

ナミリが指差す方向をみたルンバは絶句。

「ニャニャ！？」

そこには一人のハンターが俯せで倒れており、周りには三頭のルドロス達と・・・

「グオオオオオオオオオオ！！」

「ニャニャ！あのスポンジって・・・」

凄い雄叫びに怯えるルンバ。

「ルドロス達のボス、ロアルドロスだね」

ナミリはにっこりとした表情で答えた。

一方、ロアルドロスとルドロス達は倒れているハンターをじーっと見つめている。

そして・・・

「グオオオオオオ」

ロアルドロスの声が聞こえた途端、ルドロス達は一斉にハンターに噛み付きだした。そう、ルドロス達はハンターを捕食しようとし

ているのだ。

「あゝあ、食べられちゃった」

「ニャニャ！旦那、そんな事言っていないで助けに行くニャ！」

「えゝ！！めんどくさいんだもん」

プイッと後ろをむくナミリ。

「旦那、あんたそれでも古りゅ・・・」

「はいはい、分かりました！行けばいいいでしょ」

ナミリは渋々自らの弓を構えた。

ナミリはかなりの弓マニアで、この世界にあるほとんどの弓を持っている。

そして、今回ナミリが持ってきたのは、全体が綺麗な朱色に染まっている弓、「ブチヌキ」だ。

「・・・そこっ」

ヒュン！！

ナミリが放った弓は一発でルドロスの頭を貫通。

「グオオオ・オオ・・・オ・・・」

ルドロスはたった弓矢一本で絶命してしまった。

それにロアルド罗斯は気づき、辺りを見回す。

「うわ、あいつ凄く警戒してるニャ」

「大丈夫だよ。こっちは茂みの中にいるんだから」

そう言うとなミリはロアルド罗斯の警戒を無視し、再び弓を構える。

「だ、旦那あゝ」

「少し黙ってて」

ナミリは絶妙なポイントで弓矢を放つ。

ヒュン！！

ナミリの放った弓矢はまたしてもルドロスの頭を貫通し、ルドロスは倒れていった。

そしてさらにナミリは弓を構え、矢を放つ。

その矢はラスト一頭のルドロスの頭を貫通。

始めは三頭いたルドロスも、今は一頭もいなくなっていた。

そして、それを見たロアルド罗斯は・・・

「グオオオオオオオオオオオ」

・・・帰っていった。

「ニヤニヤ！あいつ、他のエリアに逃げていくニヤよ！」

「ずいぶん肝が弱いねあいつ」

ナミリはロアルド罗斯が他のエリアに行ったのを見て、茂みから出た。

「あゝあ、こりや凄い出血だね」

ナミリは倒れているハンターに近づくと、その場にしゃがみ込み、ハンターの頭を人差し指で突き始めた。

「おい、生きてますか死んでますか？」

「旦那あ、そのハンター生きてるかニヤ？」

ナミリの元にルンバが駆け寄ってきた。

「うーん・・・微妙」

「旦那、ふざけてないでちゃんと脈を計るニヤ」

「つまらないなあ」

ナミリは倒れているハンターの左腕を掴むと、その手首に神経を集中させる。

ドクン、ドクン。

「・・・ギリギリでセーフ」

ナミリはハンターの左腕を離すとその場で立ち上がる。

「さて、本来の目的の鉱石採取にでも行きますか」

「・・・」

「じょーだんだよ」

ナミリはハンターの両腕を掴む。

「とりあえずベースキャンプに運ぶニヤ。どうせ隣のエリアだしニヤ」

「はいはい」

ナミリはハンターを引きずりながらベースキャンプに向かった。

「この人凄く重い」

ナミリは愚痴をこぼしながらハンターをベースキャンプのベッドの上に乗せた。

「ルンバ、とりあえず近くの村行って竜車借りてきて」

「はいですニャ！」

ルンバは地面に潜り、近隣の村へ向かった。

「・・・とりあえずは出血を止めないと」

ナミリはまず、ハンターが纏っているボロボロのイーオスシリ―ズの防具を脱がした。

そして、あらかじめ持ってきていた救急箱から秘薬や回復薬グレート、生命の粉塵などを取り出す。

そして、ナミリの超乱暴な治療が始まった。

「チャ・・・し、死ぬところだったチャ」

チャチャがベースキャンプに戻ってくると、ベッドの上にインナー一枚で寝ているアロンの姿があった。

「あ、アロン・・・申し訳無かったチャ」

チャチャは寝ているアロンに向かい軽く一礼をし、チャチャはベッドにダイブした。

「オレチャマも眠いのチャ・・・」

チャチャはすぐに眠りについた。

＊ ＊ ＊

「って僕は、ベースキャンプじゃなくて、隣のエリアで寝てたのー!？」

アロンはびっくり。

「ま、そお言うこと」

ナミリはそう言うのと辺りを見回した。

「そろそろルンバが帰ってくるハズだけど」

「あのさ」

アロンはナミリに向かい言う。

「改めてだけど、僕を助けてくれて、ありがとう」

「どおいたしまして」

「で、ナミリちゃん、僕はまだ水没林に残るね」

「は!？」

驚くナミリ。

「僕は今回、ルドロスを一頭狩ってくる依頼を受けた。けど、まだ実際には三頭しか狩ってない。あと半分の三頭を狩らなくちゃいけないんだ」

アロンの顔はまだ青白い。

「あんた、そんな体で狩りが出来ると思ってるの？無理だよ無理！」

「けど・・・」

「大丈夫、あたしがあんたを助けた時にルドロス三頭狩ったから」

「でも・・・」

その時、ナミリは自分の右手をグーに握り、そのままアロンの横腹にパンチ！

「ぐはっ・・・」

アロンはその一撃で意識を失った。

「おとなしく言う事を聞いてろ」

ナミリがボソツと呟いた。

「旦那!!」

水没林の入口の方からルンバが走ってきた。

「どしたの？」

ナミリはアロンを抱えながら言う。

「そのハンター、もともとこの水没林に竜車で来たらしく、入口の所に一台竜車が置いてあったニヤ」

「じゃあソレを使うか」

ナミリはアロンを抱えながらベースキャンプのベッドの方に向かい叫ぶ。

「その奇面族の子、君も乗るでしょ？」

その声を聞いたチャチャは目を覚ました。

「チャ・・・？」

チャチャはふと前を見る。

そこにはアロンを抱えた可愛い少女が。

「早くしないと置いてくよ」

「わっチャ！」

チャチャはとりあえずそっちに向かい走った。

そしてピチの村に向かう竜車のなか。

「旦那、せっかくだからシーブライト鉱石、採取してくればよかったのにニヤ」

どんぐりメールを外したルンバが、竜車のたずなを持っているナミリに向かい言う。

「仕方ないよ。そんな暇無かったし。それにあそこら辺にはロードロスもいるんだよ。怪我人放置して採取には行けないよ」

「・・・さすが天才G級ハンターだニヤ」

竜車の中では彼女らの他に、一人のハンターと奇面族がスヤスヤ

と眠っていた。

空はもう、夕焼け色に染まっていた。

アロンが次に目を覚ましたのはなんと自宅だった。

「あれ!？」

アロンは辺りをキョロキョロ。

その時、

「アロン様、起きましたか？」

キッチンの方から一人の女性が歩いてきた。

銀色の綺麗な髪、金色とグレーのオッドアイの目、そして見馴れた顔。

「ふい、フィオナ!？」

「はい」

フィオナはにっこりと微笑んだ。

しかし、アロンは困惑気味。

「なんで? てか、どうして？」

疑問だらけで何を言っているのか分からなくなってきたアロン。

「アロン様は先程、あるお方が村まで運んできたんです。」

その方いわく、アロン様は狩りの目的を達成した直後に倒れたと言っていました」

「え・・・」

「びっくりしましたよ。アロン様が顔面蒼白で意識を失いながら帰ってきて。ナタザー医師いわく応急処置が完璧だとか」

アロンはそれを呆然と聞いていた。

(・・・ナミリって一体・・・)

そこでアロンはある疑問をフィオナにぶつけた。

「話はわかるけど、フィオナはどうしてここに？」

「え、あ、はい。私、久しぶりにアロン様に会いたくなって・・・
ギンエン様とグーダ様と一緒に遊びに来たんです」

夜のピチ港。

これから、今日最後の船が出港しようとしていた。

「ルンバ、早くしないと船に乗り遅れるよ」

ナミリがルンバに向かい叫ぶ。

「待ってニャー！」

ルンバは全力でダッシュしている。

「もう!!！」

ナミリは少し不機嫌だ。

その時、

「あんた、ナミリ・グラリスか？」

ナミリはその声を聞き、ふと後ろを向く。

そこには、一人の男性がいた。

防具「ネブラシリーズ」を着用し、背中越しには太刀の「飛竜刀

（双火）」を背負っている。

ハンターだ。

「あんた誰？」

ナミリが聞く。

「俺はギンエン。あんた、古竜騎士団の天才チビだろ？」

「・・・」

船の明かりがナミリとギンエンの体を照らす。

「【雷撃を撃つ神射手】の通り名を持つ女。そのキリンXの防具
が何よりの証拠だ」

「だったら何？」

「・・・アロンを助けたのは、あんたが二代目で、アロンがバリの息子だったからか？」

「・・・関係ないわ」

二人は無言でお互いを睨み付ける。

「・・・俺は知っている。先代古竜騎士団の「白い神」事件を」
ギンエンはナミリに向かい、さらに鋭い目で睨む。

「バリんさんは生きているのか？」

「・・・知らない」

「本当に？」

「ええ、本当に」

辺りの静寂にナミリの声が響く。

「あの人のうわさは今の古竜騎士団にも響いている。あたしもあの人が生きていたら、是非会いたい」

「・・・アロンにその事は？」

「言っていない」

「そうか」

そう言うときンエンは村のアロンの家に向かい歩いて行った。

「旦那、いまのは？」

ルンバが物陰から出てきた。今の話を聞いていたらしい。

「何でもない。行こう、ルンバ」

ナミリは船に向かい歩いて行った。

「まっ待ってニャ」

ルンバはナミリの後を追った。

全ては闇に潜む裏切りから始まったのだ。

第20戦：VSルドロス後編（後書き）

今回にてVSロアルドロス篇の前半部分が終了。次からは後半部分に入るハズですが・・・その前に、あるストーリーを数話入れたと思います。詳しい事はまだ秘密です。ヒントは今回のラスト辺りと関係あり。では、また次回で。

第?戦　く序曲・始まりく（前書き）

新章突入！　今回は、今から一年半前の出来事を書く〔過去篇〕です！！誰の過去かは・・・まだ秘密。

今回は過去篇序章なので文章は馬鹿みたいに短く、内容もよく分からないと思いますが、御勘弁を。　次回は今日中に掲載する予定です。

第?戦　く序曲・始まりく

大都市ドンドルマ。

その街の中央付近にある、とある建物。

そこに今、四人のハンターが呼び出されていた。

「一体・・・世界政府は何を企んでいるのか？」

一人の男性ハンターが声に出して言う。

「分からない、けど、何か重大な事が起きているんだと思う」

今度は一人の女性ハンターが言う。

「・・・・・・・・」

静寂が辺りを包む。

その時、建物のドアが開いた。

ガチャ!!

その音を聞き、四人のハンターは全員ドアの方を向く。

ドアを開け、建物の中に入って来たのは一人の老人だった。

「やあ、古竜騎士団の諸君。待たせたね」

老人はドアを閉めると近くにあった椅子に腰を掛けた。

白い髭に黒いサングラス、身長は低く、がりがりに痩せている。

「今日は諸君らに向かって欲しい場所があつてな、今こうして呼び出しをしたのだ」

老人は四人のハンターを順々に見ていく。

「・・・何処へ？」

ハンターの一人が老人に尋ねた。

「ポッケ村を知ってるかな？」

「ポッケ村・・・知らんな」

「今回諸君らにはポッケ村と言う辺境の村に行き、ある調査をして貰う」

老人は椅子から立ち上がった。

「良いな？」

「・・・何の調査だ？」 「それは・・・〔白き神の伝説〕についてだ」

白き神——それは・・・雪山に潜む伝説。

大地を従え、吹雪に舞う白い伝説の神・・・

「ギンエン、お前に頼みがある」

ドンドルマの路地裏で二人の男が密会していた。

「何だ？」

「・・・今から言う事はアロンには内緒だぞ」

「・・・ああ。で、話とは？」

「白い伝説の神と、先代古竜騎士団の最後・・・バリンの最後に
ついてだ」

「・・・・・・・・」

全ては一年半前、ドンドルマのとある建物に集められた四人のハ
ンターが鍵を握っている。

第?戦　く序曲・始まりく（後書き）

今篇は先代古竜騎士団が遭遇した「白き神」事件の全貌と、一年半前のアロン達のスィーオス狩りをお送りします。

ぶっちゃけ、今回はモンハン3のモンスターは出てこずに、2nd Gのモンスターが沢山(?)出てきます!!

そして次回から本格的に過去篇がスタート!!先代古竜騎士団全員登場です!　では!!

第?戦　く壱曲・旅立ちく（前書き）

新章〔過去篇〕　本格的に始動開始です！

第?戦　く壱曲・旅立ちく

今から約一年半前・・・

この大陸で一番の大都市、ドンドルマの中央付近には、巨大な焼肉レストランがあった。

店の入口に掲げられている看板には「焼肉火竜」と書かれていた。

店内は人だらけ。

テーブル席は全て埋まりカウンター席まで満員状態の店内。

「いらっしやいませ、いらっしやいませ！本日のオススメはアップケロスの舌、（アップケ舌）です！」

店員がでかい声で叫んでいる。

店内のファンは全部始動中。それでも店内は肉の焼ける香ばしい臭いが。

「おい、店員！」

そんな中、店内で一番奥のテーブル席に座る四人の客の一人が近くの店員を呼び止めた。

「グーダ、まだ食べるの!？」

「うるさいな！金はあるんだ！ならオレは食べるのだ」

「・・・文法おかしくない？」

今、肉を注文しようとした男――グーダはグラスについてである水を一口飲んだ。

「オレは肉を食べに来たんだ！沢山食べるのだ」

グーダは注文を取りに来たアルバイト店員に大量の肉を注文。

「えーと、アップケ舌二人前と、ポポノタン三人前とガウシカ舌三人前と、ケルビ舌五人前と・・・」

「お前どんだけ舌食うの!？」
今さっきグーダと口論していた男——ギンエンがため息をついた。

グーダの体型はがつりしている。大量の筋肉、スキンヘッドの頭、幼稚な脳みそ。

一方、ギンエンは銀髪の小くちくへアーに若干だがつり目。程よくついた筋肉に、できる脳みそ。

「あれ、フィオナ、肉、食わないのか？」

グーダが向かいに座っている少女——フィオナに向かい問う。

「はい・・・もう私、お腹いっぱい」

フィオナは右手で自分のお腹をさすった。

「フィオナはフィオナでまた、かなり少食だよ・・・」

ギンエンはフィオナの皿を見ながらしみじみ思う。ちなみに、

フィオナの皿にはまだ大量の肉が残っている。

「ふう・・・あれ？アロン様は？」

フィオナは自分の隣の席を確認。

そこには、さっきまでモスの丸焼きにかぶりついていた男——アロンの姿が無くなっていた。

「ん？アロン？」

フィオナにつられ、ギンエンも辺りを見回した。

しかし、いるのはギンエンとフィオナ、グーダの他には大量の一般客だけ。

「あのヤロー！昨日の狩りに続いて今日もいなくなりやがったか？」

ギンエンがボソツと呟いた。

彼らは昨日、四人である沼地にドスファンゴ狩りに行っていた。そこで四人はなんとかドスファンゴとブルファンゴの群れを討伐する事が出来たのだが、途中アロンが行方不明になる事件が発生したのだ。

理由は単にブルファンゴの突進を喰らい、ベースキャンプでへばっていただけなのだが・・・

「仕方ない、グーダがソレ食い終わったら、アロン捜しにでも行きますか」

ギンエンがフィオナとグーダに向かい言った。

ドンドルマ外門

ここに今、五人の人間がいた。

「・・・さて、そろそろ行くか」

そう言ったのは、古竜騎士団（先代）の一人、

【大地を疾る蒼き剣聖】

のバリン。バリン・プラクティアだ。

「あーあ、この町ともしばらくのお別れかあ」

そう言うのは

【獄炎を超えた紅き姫】

のキョンリー。キョンリー・ヘブリー。

「さて、そろそろ行くかい？」

ロン毛のこいつは

【雷撃を撃つ神射手】

のラシカボ。ラシカボ・ガトムだ。

「行きましょう！」

彼女はシャロン。シャロン・ファーンネス。

【嵐に舞う大勇者】

の通り名を持つ。

そして・・・

「古竜騎士団の諸君、健闘を祈る」

一人の老人が四人に向け一礼する。

「あいよ！じゃあ行ってくるわ！」

バリンが老人に手を振ると、四人は留めてあった竜車に乗り込み、ドンドルマを後にした。

彼らこそ、先代古竜騎士団だ

まだ当時16歳の主人公のアロンは、自分の分の会計を済ませ、バリン達にばれないようにドンドルマ外門まで来ていた。

（父さん、いってらっしゃい）

アロンは心の中でそう呟いた。

第?戦　く壱曲・旅立ちく（後書き）

先代古竜騎士団がポケ村に向かい出発、そしてアロンの父は古竜騎士団の一員だった・・・衝撃いっぱい今回、ハンター案件募集時にもやし様から頂いた案件のシャロンが登場！

若干設定は変わっていますが、性格などはもやし様の案件通りにします。

もやし様、案件ありがとうございました！

で、次回予告——アロン達が狩りに出発します！　では！

第?戦　く式曲・狩開始く（前書き）

2016年のオリンピック開催地、東京は駄目でしたね・・・残念です。

さて皆さん、今回は先代古竜騎士団の行動を中心にストーリーは進みます。一体「白い神」事件とは何なんでしょうか!？
では最新話をどうぞ！

第?戦　く式曲・狩開始く

ここはポツケ村。

大きな雪山の中腹にそびえるこの村は一年中雪が積もり、一年中寒い。

人口は20人強といった所だ。とても小さな村。

村人は皆、ガウシカの毛皮で出来たマフモフと呼ばれる防寒服を着ていた。

「寒うー!! 何ここ」

村の入口に一台の竜車が止まり、そこから四人のハンターが降り立った。

「うーん・・・ここは僕らには似つかわしくない村だね」

そう言うのは、黒いロン毛、黄色い目、細い顔、そして意外と筋肉のないスリムな体の男、ラシカボだ。

「ラシカボ、文句を言うな。これは任務なんだからな」

茶色の髪にネイビーの目、がつつりした体、そして結構イケメンの男、バリンが白い息を吐きながら言った。

「ラシカボ、バリン、とりあえず村長さんの所に行きましょう」

そう言ったのは、灰色のロングヘアーに色黒のスレンダーな体型、パーツの良い顔には荒々しい傷跡が左の額上部から右頬の下部までを縦断している女性、シャロンだ。

「村長の所って、あんたの目的は酒だろ」

バリンが呆れた目をしながらしれつと言った。

「当たり前よ。酒がなくちゃこんな村でやっていけないわよ」

シャロンは当然といった態度で話す。

「シャロン・・・」

バリンはマジで呆れた。

（まったく、こいつの豪酒っぷりといったら）

「おいバリン！」

「ん！？」

バリンが振り向くとラシカボが辺りをキョロキョロしていた。

「バリン、キョンリーがいない！」

「あんだとおおお！？」

バリンは辺りを見回すが、彼女の姿は何処にもいない。

「おいシャロン、キョンリー知らないか？」

バリンはシャロンに聞いてみた。

「知らない」

「そうか・・・あのヤロー！！」

キョンリーというのは古竜騎士団最年少の少女。

桜色の髪にかなり大きな目、低身長の体、スリムな体型。そして
いたずら大好きっ子。

「まったく・・・あいつを一人にすると何をしでかすか分からない
いからな」

その頃、キョンリーは村のギルドの中で食事を取っていた。

「うーん・・・味付けが少し辛い・・・」

キョンリーはテーブルに置いてあった塩を料理に振り掛けた。

「今度はしょっぱい」

キョンリーがテーブルに置いてある唐辛子スパイスを取ろうした

時、

「お嬢ちゃん、ちょっといいかな？」

「ふが！？」

キョンリーが振り返るとそこには一人の老人が。

「わしはトレジィ、君、レッツトレジャーしないかね？」

「いいです」

キツパリ断るキョンリー。

「何という即答!」

トレジィは凄く残念そうだ。

「すいません!追加注文いいですか?」

キョンリーはギルドの店員を呼び寄せた。

その時、

「キヤヤヤアアアア!!!」

女性と思われる悲鳴が村全体に響いた。

バリン達はその悲鳴を聞き、声の方向に向け走っていた。

「バリン、今のは」

ラシカボが走りながらバリンに聞いてきた。

「分かん」

バリンは走りながら答えた。

「バリン、ラシカボ、あれ!」

シャロンが指差す方向には、普通村にはいない生き物が・・・

「ギヤオ、ギヤオオオ!」

白い鱗と皮を身に纏い、集団で村人を襲っているのは肉食竜のギアノスだ。

「誰か助けてえ!!」

見れば若い女性と幼い子供がギアノス達に噛みつかれている。

「なんで村にギアノスがいるんだい?」

「ラシカボ、それはあとだ、今は村人を助けるぞ」

ギアノスはざっと10匹程度。しかし・・・

「ギヤオオオオオ!」

「なっ!!」

ギアノス達がいる場所の近くの建物の屋根には、ギアノス達より

一回り大きなギアノスが・・・

「ドスギアノスまでいるのか!!」

ドスギアノスは屋根から飛び降りた。

ドスン!!

「ラシカボ、シャロンはギアノス達と村人を頼む。俺はドスギアノスを仕留めて来る」

「了解だよ!」

「分かったわ!」

二人の返事を聞くと、バリンは背中の鞘から一本の太刀を抜き放った。

シャキィィン!!

「いくぞ!!」

バリンは自らの太刀でもある「氷刃【雪月花】」を構えた。

バリンは【大地を疾る蒼き剣聖】と呼ばれている。

そんな彼の防具は古竜・老山龍の最強の素材を使った蒼い鎧「暁丸・極」。

そう、バリンはあの老山龍に一对一で勝利したことがあるのだ。

「シャロンは村人を頼むよ。僕は醜いギアノスを撃ち砕く!」

全身キリンXシリーズのラシカボは、背負っていたヘビィボウガン「夜砲【黒月】」を構えた。

「君達は運が無かった。何故なら君達の相手が僕だからさ!」

ラシカボは通常弾レベル3をセットし、リロードする。

「ショット!!」

バン!!

ボウガンから打たれた弾は近くにいたギアノスの心臓に刺さった。そして、辺りには紅い雨が降り注いだ。

全てのギアノスは一旦、状況把握のためラシカボの方を向いた。

「今だシャロン!」

「分かってるわ」

シャロンはその場からダッシュし、噛まれていた村人の所へ。

「大丈夫？」

シャロンは女性と子供の二人を抱えた。

「う・・・うっ」

女性はまだ意識はある。しかし子供の方はぐったりしていた。

「マズイわね・・・」

シャロンはとりあえず近くの物陰へ。

それに気付いたギアノスがシャロンを追おうとしたが、とっさにラシカボがギアノスにむかい射撃。弾はギアノスの頭を貫通した。

「君達の相手は僕だよ。さぁおいで！醜いギアノス達よ」

ラシカボはどんどん弾を撃つ。

そして全ての弾はギアノス達を一発で仕留めた。

「やるねえラシカボ、張り切りすぎだ」

バリンは刀を構えながらドスギアノスとの距離を縮めていく。

「ギャオオオオオオオ」

ドスギアノスはバリンを発見。威嚇をしてきた。

「威嚇する暇があったらすぐに飛び掛かってこいよザコ！」

バリンは威嚇中のドスギアノスに何のためらいもなく刀を振り下ろす。

「ギャオ！？」

ドスギアノスの背中から大量の血が吹き出た。

「やっぱりギアノスに氷属性は効かないか」

バリンはドスギアノスに次々に刀を入れた。

「アロン、ぼーっとするな!!」

アロンはギンエンの声で我に返った。

ここは沼地。今、アロンはギンエン、フィオナ、グーダと共に狩りに来ていた。

「あ、ゴメン」

アロンは当時、使用していた武器、片手剣の「ドスバイトダガー」を構えた。

防具は初心者向けの「ハンターシリーズ」だ。

「まったく・・・」

そう言うギンエンは全身「クックDシリーズ」を纏い、武器「骨刀【竜牙】」を構えた。

「アロン様、ギンエン様、グーダ様、気をつけてください」

アロン達より少し後ろにはフィオナが。当時の防具は「ブランゴシリーズ」に弓の「ハンターボウ?」。

「いくぜ!!!!」

全身「コンガシリーズ」のグーダが自らのハンマー「アイアンストライク改」を構え、走りだす。

彼らの目の前には、赤い体の鳥竜種、ドスイーオスの姿が。

「ギャオ、ギャオオ」

ドスイーオスがグーダに向かい飛び掛かった。

「危ねっ!」

グーダはとっさに回避する。

そしてドスイーオスが着地したその瞬間、ギンエンとアロンはドスイーオスに向かい、斬り掛かりに行った。

第?戦　く式曲・狩開始く（後書き）

後書き・・・今回は何も書く事がないな・・・

と、言う事で、今僕がモンハンで使用している防具武器を紹介しようかと！

まずは2ndG！

剣士・・・全て「ナルガXシリーズ」、スキルは捕獲の見極め・回避性能＋2・罾師・回避距離UPです。捕獲向けですね。

ガンナー・・・全て「フルフルZシリーズ」、スキルは高級耳栓・広域化＋1・耐震です。

武器・・・太刀・・・「氷刃【雪月花】」と「夜刀【月影】」・・・ガンランス・・・「海滅槍アビス」と「バイオレットバースト」

・・・狩猟笛・・・「クラップカスターネット」と「ヴォルカニックギグ」

・・・ライトボウガン・・・「蒼穹桜花の対弩」

・・・弓・・・「アイシクルボウ？」「オオムラサキバサミ？」「プロミネンスボウ？」

見にくくてすいません！

次回は3「トライ」の方の武器防具を紹介します！

第?戦　く参曲・父と子く（前書き）

皆さんこんばんは!! 最近モンハン3で、ようやくリオレイアを倒す事が出来た作者、希夜です。

正直、リオレイアには大苦戦でした。2ndGに比べて、やたらに空を飛ぶんですよ。ああ、やりにくかった。

ちなみに僕は2回ほどリオレイアに捕食されましたね。

凄く大変でした。けど楽しかった!

では最新話をどうぞ!

第?戦　く参曲・父と子く

「・・・ここは？」

少年は目を覚めました。

「あ、目、覚めた？」

シャロンは少年の顔を覗き込む。

「今手当中だからじっとしててね」

シャロンは慣れた手つきで少年の傷の手当をする。

「・・・」

少年は今起きたばかりで思考回路が繋がらない。

「・・・あんた、ギアノス達に襲われてたんだよ!？」

「えっ・・・」

少年は戸惑っている。

「私はシャロン。あなたは？」

少年はゆっくり口を開いた。

「僕・・・ウアルト」

まだ14歳だったウアルトは言った。

「僕・・・ホテルタに住んでいるんだ」

「ホテルタ・・・って、この村からかなり遠くない？」

「うん・・・今日は母さんと雪山の絶景を見に・・・ゴホッ!」

「まだ動かないで!」

シャロンはとっさに自分のアイテムポーチから薬草を取り出した。

「はい、これ食べて」

「・・・」

ウアルトは無言で薬草を受け取り、口に入れた。

「ゲホッゴホッ・・・苦いこれ・・・」

「文句は言わない」

ウアルトは苦い薬草を頑張って飲みこんだ。

「ふん、まだまだひよっ子だな！」

バリンはドスギアノスに向かい次々に斬撃を入れていく。

「グギャ、グァ！」

ドスギアノスは短い悲鳴をあげ、一步後ろへ飛び下がる。

「逃がすかよ！」

バリンはソレを追い、一気にたたみかける。

「おりやああああ！」

ドスギアノスに向かい最大威力の斬撃（振り下ろし）を繰り出した。

「ギャオアアア」

ドスギアノスの体が真っ赤に染まった。

「ふん！」

バリンは刀を宙で一降りし、ドスギアノスの血を落とす。

そして、綺麗な手捌きで刀を鞘に戻す。

カチッ！

ドスッ！

バリンが刀を鞘に戻し終えた瞬間、バリンの目の前にいたドスギアノスはバリンを睨みながら地面に倒れていった。

「悪く思ふなよ」

バリンの頬に爽やかな風が当たった。

「さすがだねバリン。ドスギアノスをたった二分で倒すなんて遠くからラシカボが話し掛けてきた。」

「ラシカボ、そっちは終わったのか？」

「ああ、とっくに終わってるさ」

「そうか」

バリンはそう言うとその場に座りこんだ。

バリンの防具はドスギアノスの返り血がべったりと付いている。

再び、バリンの顔に爽やかな風が当たる。

「バリン、一旦全員で集まろう」

ラシカボは自らのボウガンを背中にしまいながら歩み寄ってくる。

「・・・そうだな」

なぜ人里にギアノス達が現れたのか？

「よし、一旦集まろう」

「アロン、一旦後ろに下がれ！」

ギンエンが叫んだ。

「え？うわっ！」

アロンは目の前のドスイーオスが毒霧を吐こうとしている事に気が付いた。

「あああああ！！」

叫びながら右側へダイビングジャンプ！！！！

バシヤ！！

顔面から沼地の水溜まりへ飛び込んだ。

「ぶはっ！！」

よろよろと立ち上がるアロン。

「アロン様、大丈夫ですか？」

遠くからドスイーオスに射撃しているフィオナが話し掛けてきた。

「あ、うん。何とか」

アロンは顔についた泥を手で拭き取るとドスイーオスの方を見た。今はグーダとギンエンが何とか抑えていてくれる。

「危なかった・・・」

アロンは再び刀を構える。しかし、

「アロン様、足が震えてますけど？」

「へ？」

アロンが下を向くとそこには自分の足が。
そして、ぶるぶる震えていた。

「アロン様・・・大丈夫ですか？」

「あ・・・だ、大丈夫。多分」

アロンは自分の右手をグーにして自らの足目掛けパンチ！

「だ、大丈夫だから・・・本当に」

その時、

「アロン、フィオナ！そっちにドスイーオス行ったぞ！！」

ギンエンの声を聞き、アロンは後ろに振り返る。

すると遠くから赤い何かが走って来た。

「嘘ダァーッ！」

アロンは全力でドスイーオスから逃げる。

「アロン、逃げてどうすんの！？」

ギンエンが太刀を構えながらドスイーオスに突っ込んでいく。

「ギンエン様、援護します！」

フィオナは自らの弓を構え、ドスイーオスに狙いを定める。

「オレも行くぜ！」

グーダも自分のハンマーを一旦しまい、ドスイーオスに目掛けダッシュした。「アロン、閃光玉を投げろ！！」

ギンエンが叫ぶ。

現在ドスイーオスに追われているアロンは走りながらポーチに手を入れた。

「・・・あった！」

アロンは閃光玉を握りしめると後ろに振り向く。

「それっ！！」

アロンはドスイーオスの顔目掛け閃光玉を投げた。

刹那、辺り一面にまばゆい閃光が響き渡った。

第?戦　く参曲・父と子く（後書き）

今回は短くてすみませんでした。

では早速、僕がモンハン3で使用している防具武器を紹介します！
剣士・・・防具は「ルドロスシリーズ」に武器は「骨刀アナンタ」と「ボーンアックス改」。

スキルは体術＋1・精霊の加護・水流【小】無効です。
ガンナー・・・防具は「バギィシリーズ」に武器は「トロペクルガン」。

スキルは捕獲名人・氷耐性＋10・散弾威力UPです。
なんか・・・地味ですみません。以上です。

では、また次回でお会いしましょう！！

第?戦　く四曲・白銀雪く（前書き）

現在台風18号が近くに来ているらしく、雨音が凄くてなかなか眠れません。　ああ、学校が休校にならないかなあ・・・
そんな事はさておき、最新話の方をどうぞ！

第?戦　　四曲・白銀雪

ポツケ村のギルド支部

「ハンターズギルドポツケ支部」。

内装はカウンターにテーブル席が一つだけの簡素なギルド。

今ここに六人の人間が集まっていた。

バリン、キヨンリー、ラシカボ、シャロン、ポツケ村の村長^{オババ}、訓

練所の教官の六人だ。

「じゃあ、この現象は一月前ぐらいから？」

テーブルの一番北側に座っているバリンがオババに向かい問う。

「ああ、あれはひどい吹雪の日じゃったかな？」

オババは言った。

今から一月ほど前、このポツケ村一帯に突如猛烈な吹雪が発生した。

雪山の中腹付近にあるこの村ではそんなに珍しくはないが、その日の吹雪は何かが違ったらしい。

オババいわく、その吹雪は白銀に輝いていたらしいのだ。

いつもの雪は白。しかしその日の雪は白銀。

そしてその吹雪は三日三晩やまなかった。

そして白銀の吹雪がやんだ次の日、村の外門で雪かきをしていた村人が近くの農場（ポツケ農場）にブランゴの群れが住み着いているのを発見、すぐにオババに報告した。

そのブランゴの群れは訓練所の教官が倒したらしいが、その後村にモンスターが現れるようになった。

ギアノス、ブランゴ、ランゴスタなど。

そしてさらに、その吹雪以来、雪山からポポやガウシカなど草食モンスターが姿を消したのだ。

「つまり、その吹雪の日を境に肉食モンスターが山から村に降りてきたり、草食モンスターがいなくなったりしたのか？」

バリンが今までの話の内容をまとめた。

「その通りじゃ。全てはあの白銀の吹雪から始まったのじゃ」

オババはそう言った。

「ふーん・・・世界政府が言ってた通りだ」

キョンリーが足をばたつかせながら言った。

「世界政府・・・が、ですか？」

教官が興味深げに聞いてきた。

「その通り。今回僕達はこの雪山での草食モンスターの行方の調査とポッケ村の被害確認のために世界政府から派遣されてきたんだよ」

教官の問いにラシカボが答えた。

「わざわざ古竜騎士団全員をですか？」

この問いにはシャロンが答えた。

「今回の件を世界政府は重く見ています。何しろ負傷者が出て来ているから・・・」

「そうですか。あの古竜騎士団が来てくれるとは心強い。現に昨日も村にブランゴ達が現れましたからね。どうか調査のお手伝いがあるなら何でも言ってお下さい」

「はい、ありがとうございます」

シャロンは頭を軽く下げた。

「しかし、その吹雪の正体は何なんだ？」

バリンがぼつりと呟いた。

「吹雪の日を境に、って事はその吹雪がモンスターに何等かの影響を与えたって事だよな？」

「そうじゃと思う」

バリンの疑問にオババが答える。

「白銀の吹雪・・・オババさん、教官さん、その吹雪の日に関わった出来事とかありましたか？」

バリンは次々に疑問を浮かべる。

「いや、特にはなにも・・・」

教官はそう答えたが、オババは違った。

「いやいや教官さん、確か吹雪の数日前に雪山で地震が」

「ああ、そうだった。確か吹雪の二、三日前に雪山で大きな地震があったんですよ」

「地震・・・ですか？」

バリンはそれに食いついた。

「ああ、大きな地震の後に今度は大きな雪なだれも発生したんだ」
教官の説明を聞いたバリンは、

「・・・どうやら一度現地に行った方が良さそうだな」

バリンは座っていた椅子から立ち上がった。

「そうですか・・・今現在雪山には立入禁止令が発令しているの
で、他のハンターはいないと思います」

教官が言った。

「そうですか、わかりました。では一度雪山へ現地調査をしに行
きたいと思います」

バリンは古竜騎士団のメンバーの方を見た。

「キョンリー、シャロン、ラシカボ、明日の早朝に雪山に向け出
発する。各自準備をしとけ」

「はい！」

「分かったわ！」

「了解だよ！」

バリンはメンバーの返事を聞くとオババの方を向いた。

「オババさん、今雪山には何か大型モンスターっていますか？」

オババは少し考えた。

「確か・・・フルフルが一頭出現したという情報があるが・・・」

「分かりました。ありがとうございます」

バリンはそう礼を言々と一人ギルドから出て行った。

「ではオババさん、私達もこれで」

シャロンが言った。

「気をつけてね」

オババが言った。

「調査よろしくお願いします」

教官が言った。

その頃、雪山

雪崩が発生し、雪山に立入禁止令が発令したせいで、ギルドも把握していない一本の隠れた道が出来ていた。

それは、雪山深奥に繋がる一本の道・・・

第?戦　く伍曲・烏竜種く（前書き）

皆さんお久しぶりです。やっと学校の定期テストが終わり、はれて自由の身となった作者、希夜です。

なんだかんだで更新が遅れてしまつて申し訳ありませんでした。

話は変わりますが、昨日ミゲルさんから頂いた感想の中に自分の小説の中にアロンを出してもいいか？

てな感じの事が書いてありました。

僕はキャラの設定さえ守ってくれたら、どのキャラでも使つて貰つて構いません。

別にミゲルさんに限つた事ではなく、他の人も感想とかで一言言つてもらえば全然使つて貰つて構いません。

ただ、キャラの設定だけは守って下さい。

そうしてくればアロンだろうがセルラークだろうが使つて貰つてもOK！

以上、お知らせでした

第?戦　く伍曲・烏竜種く

今から遡る事一日前・・・

大都市ドンドルマのギルドカウンター

「今日は何のクエスト行く?」

ギンエンがカウンターで狩猟の手続きをしながら、後ろにいる三人に質問した。

「オレは何でもいいぞ!!」

グーダが言った。

「私も特には何も」

フィオナが言った。

「できるだけ簡単なのがいい」

アロンが言った。

「じゃあ、えーっと」

三人の意見を聞いたギンエンはいくつかのクエスト受託用紙から一枚の紙を選んだ。

「これは?」

ギンエンはその紙を後ろの三人に見せた。

紙にはダイミヨウザザミの狩猟と書かれていた。場所は砂漠。

「私は構いません」

「オレも構わん」

フィオナとグーダは行く気満々。

しかし・・・

「え!ざ、ザザミか・・・」

イマイチ乗る気のないアロン。

「・・・ん?どうしたアロン?」

ギンエンがアロンに聞いた。

「え、えーっと・・・その・・・ザザミはまだ難しいと言うか・・・

・何て言うかその・・・」
超テンパっているアロン。

「・・・分かった。じゃあ・・・」

ギンエンはザザミのクエスト受託用紙をカウンターに戻すと、今度は違う紙をカウンターから受け取った。

「じゃあこれは？」

目的

ドスィーオス一頭の狩猟 場所
沼地

辺り一面にまばゆい閃光が走った。

「アロン、お前は一旦後ろに下がれ！」

閃光玉を投げたばかりのアロンは遠くから聞こえたギンエンの声に従い、一旦後ろに下がった。

アロンの目の前には、閃光をもろに喰らい視界が無い状態のドスィーオスの姿が。

「うおおおおおおお！！！！！！」

グーダが一気に走り出し、ドスィーオスとの距離を縮め、ドスィーオスの正面に立つと頭目掛けてハンマーを奮った。

フィオナもドスィーオスの背後に周りこみ、後ろから狙撃を開始する。

ギンエンは太刀を構えたままドスィーオスの側面（右側）に移動、そしてドスィーオスの体目掛け一気に刀を振り下ろした。

（・・・みんな、凄いなあ！）

アロンは近くの木の陰に隠れ、砥石を使い刀を磨いていた。

(それに引き替え僕は・・・)

両足は震え、顔は青白く刀を持つ手は震えている。

(はぁ・・・僕も父さんみたいに強くなりたいなぁ・・・)

アロンはまだ幼き日の思い出を思い出す。

いつも太刀を背中に背負っていた父

人々からは尊敬され、みんなから毎日のようにありがとうを言われていた父

時々、家の近くの山で狩りの稽古をしてくれた父

・・・そして、古竜騎士団として最高に格好良かった父・・・

「アロン、ボサツとするな！ドスィーオスの視力が回復するぞ！」

「えっ!!！」

アロンは思い出から我に返り、すぐさま辺りを警戒する。

「ギンエン様、視力回復しました」

フィオナの声が沼地に響く。

「グオオオオオオ！」

ドスィーオスがその場で雄叫びを上げた。

「くそっ、仲間のイーオスを呼び出すつもりか」

ギンエンは太刀をドスィーオスに向けつつも辺りを警戒し始める。

「グーダ、イーオスが来るかもしれない。注意しろよ！」

「おう！分かったぞ」

グーダは一旦ハンマーをしまいドスィーオスの側面(左側)へ移動した。

もし、イーオスが現れた状態でドスィーオスの正面に立っているものなら、間違いなく挟み撃ちを喰らうからだ。

「・・・来たぞ」

ドスィーオスの雄叫びが終わってから約10秒。

辺りには無数の赤い小型モンスターが。

「グオオオオオ」

「グオオオオオ」

鳥竜種イーオスだ。

「まずい、結構な数があるな」

ギンエンは刀を鞘にしまった。

「グーダとフィオナはドスイーオスを、俺とアロンはイーオスを片付ける。いいな？」

「おい！勝手に決めるなギンエン！」

グーダはハンマーでドスイーオスを殴りながら言ってきた。

「・・・じゃあグーダはイーオスがいいんだな」

ギンエンは近くにいたイーオスに向かい太刀を抜く。

「・・・オレはドスイーオスがいい」

「ならいいじゃん。フィオナも別にいいよな？」

ギンエンは木の陰に隠れながらドスイーオスに弓で狙撃をしているフィオナに向かい言った。

「私は構いません」

「了解だ」

ギンエンは目の前にいたイーオスに向かい刀を振るう。

「アロン、聞こえるかあああああ！？」

「へっ！」

遠くの木の下に隠れていたアロンは思わず立ち上がった。

「聞こえるかあああああ！？」

ギンエンの声だ。

「何？」

「お前イーオス狩るのを手伝え！」

「イーオス！？」

「ああ！」

アロンは自分のアイテムポーチの中を覗き込む。
解毒剤はまだあった。

「分かった、やってみるよ」

アロンは震える足にグーを入れると一旦深呼吸をしてから一気に木の陰から飛び出した。

アロンが沼地でドスイーオスと、バリンがポケ村でドスギアノスと戦っていた頃、大都市ドンドルマの外門に一人の女性の姿があった。

全身を防具「レイアXシリーズ」剣士バージョンを纏い、背中には一本の太刀が。

「ラリインさん、やっぱり行くのか？」

ラリインと呼ばれた女性はふと、後ろを振り返る。

そこには、一人の老婆の姿があった。

「はい、行ってきます。今回はギルドからの命令ですから」

ラリインは肩まである栗色の髪を風に靡かせる。

「それに・・・バリンもアロンも今、一生懸命狩りを頑張っています。なら、私も頑張らないと」

ラリインは門に留めてあった竜車に乗り込んだ。

「じゃあ、行ってきますね！」

「・・・気をつけなさいよ、ラリイン」

ラリインは老婆に向かい手を振った。

彼女、ラリイン・プラクティアが向かう場所とは・・・

崩竜伝説「白い神伝説」の発祥の地
そして白銀の吹雪が舞う極寒の地

第?戦　く伍曲・烏竜種く（後書き）

現在、モンハン3のオンラインで街をうろちよろするのが日課になってきている作者は最近、防具を変更しました。

前回・・・だったかな？「ルドロスシリーズ」を使用していると後書きで書きましたが、今は「ベリオシリーズ」に「飛竜刀【双火】」を使用しています。

スキルはランナー・回避性能＋2・寒さ【小】無効・アイテム使用強化を発動させて日々、狩りに勤しんでいます。

そして今だにネブラは一人では倒せない・・・
はぁ、レイアやラギアはもう一人で倒せるのに・・・

では次回予告――たまにはコメディーを多めに入れようかな・・・と。まあストーリーが今、相当シリアスに近い型になってきているので・・・難しいかなあ？

次回は今週中には掲載します。では！

第?戦　く六曲・進む時く（前書き）

古竜騎士団過去篇も後半に突入！

今後、ストーリーはどんどんシリアス&バトル重視に・・・

やっぱり過去篇でコメディーは難しいです。特にバリン視点の場合なんかは・・・

あ、それと近日から現代のロアルドロス篇後半部分の掲載も始まる予定！！現在執筆中です！！

第?戦　く六曲・進む時く

その日は空にうつすらと薄い雲があり、静かに雪が降っていた。
白く、幻想的な雪降る小さな村。

静寂が辺りにこだまするその村にはある一つの言い伝えがあった。

《天に舞う白銀の雪が吹き荒れる時、我ら崩壊の王が地鳴りと共に現れ、全てを無にするだろう。それは目覚めの時、大いなる剣を持ちし勇者が現れた時、それは、再び眠りに着くだろう》

ポッケ村の村長、オババは自宅の本棚から一冊の本を取り出した。
全体にホコリを被り、あちらこちらにシミが出来ている年忌の入っている赤い本。

表紙には竜人族の文字でこう書かれていた。

《崩竜・覇竜伝説》

オババは手でホコリを払いながら本を1ページめくった。

火山と雪山・・・

お互い真逆の場所に二つの王者は眠る。

黒煙を空に靡かせ、火山灰の豪雨をもたらし、マグマを自在に操る覇竜

崩竜
白銀の吹雪を纏い、地鳴りと共に雪崩を起こし、天候を支配する

それは、絶対の存在・・・

「ねえ、もつとお酒無いのお？」

顔を真っ赤にしたシャロンはトロンとした目で近くの村人に話掛ける

「すみません、少々お待ちを。誰か、酒を持って来てくれ！」

村人が厨房に向かい叫んだ。

「・・・シャロン、今日はもうほどほどにしておけ。明日は朝早いんだぞ」

バリンが飽きれながら言った。

ここはポッケ村唯一の食事所。

古竜騎士団のメンバーは明日の雪山調査のため、スタミナをつけるにここ、《タセヒ食堂》に夕食を食べに来たのだ。

「大丈夫よ。あたしは酒には強いし、朝にも強いし！！」

今、食堂にいるのはバリンにシャロン、他の客数人に店の店員。

「・・・お前、前にもそんな事言って“あゝ二日酔いだ、気持ち悪い”とか言ってたじゃん」

現在夜10時。キョンリーはもう眠いらしく、先に宿に行ってしまう、ラシカボは夜風に当たってくるとかで夜の極寒の外にホットドリンクを持たずに（忘れたが正しい）行ってしまった。

（ラシカボ、生きて帰ってこれるかな？）

そんな事を思いながらバリンはシャロンの酒のストッパーとして役目をはたしていた。

「店長！お酒もう1瓶追加！」

シャロンの座っているテーブルには大量の酒瓶の山が・・・

「もういい加減にしとけよ、明日はかなり早いんだぞ！」

バリンは店長に手の平を向け、もういらぬ事を伝えた。

「いいじゃん！別にあんたには関係ないんだから！！」

顔を赤く染めたシャロンはバリンを強く突き飛ばした。

「いてっ・・・関係大アリだ。明日はチーム行動なんだぞ！」

突き飛ばされたバリンは再びシャロンに近づく。

「いいじゃん、ちゃんと明日起きるからさ」

「夜更かししてる小学生かお前！」

「バリン・・・そのツツコミはイマイチよ」

「うるせえー！！」

その日、雪降るポツケ村にバリンの怒りの声が響いた。

その頃、暗闇があたりに溢れるポツケ村の入口の門の下。

「あー・・・寒い。ホットドリンク持ってくれば良かった」

黒い長い髪の男がボソッと呟いた。

彼は両手で自分の腕を摩っている。

空からは白い雪が静かにゆっくり降っていた。

黒い空に雪の白はとても幻想的だった。

・・・そんな彼の目の前には、一人の低身長の男の姿があった。

「もうすぐ・・・この世界も終わりを迎える。そしたら、全てが
終わる」

男はフラヒヤ山脈の方を向く。

暗闇のせいで良くは見えないフラヒヤ山脈。

「・・・ラシカボよ、頼むぞ」

長い黒い髪の男――ラシカボはコクリと頷いた。

「了解しました。我が主よ」

ポッケ村宿屋

「ただいま!」

ラシカボは外から戻り、そのまま自室には向かわずに一旦バリンの部屋に向かった。

コンコンッ!!

ラシカボはバリンの部屋のドアをノックした。

・・・しかし、何の反応もない。

「あれ? バリン?」

再びノック。

しかし、何の反応もなかった。

「・・・まだ食事所なのかな?」

ラシカボはもう一度ノックをし、反応が無い事を確認すると、自室に向かい歩いて行った。

途中、寝ぼけて廊下で寝ていたキョンリーを発見したが、無視して自室に向かった。

・・・ラシカボは不敵な笑みを浮かべていた。

「・・・全ては明日終わるんだ。なにもかも」

タセヒ食堂

「ありがとうございます！」

店の店員の営業ワードを聞きながら、バリンとシャロンは店を後にした。

「はぁ~~~~美味しかった!!」

顔真っ赤の上機嫌なシャロン、

「なんで・・・俺がコイツの金まで・・・」

少しがつくり気味のバリン。

「なんでって、あんたのツツコミがつまらなかったからに決まってるじゃない!!」

「・・・うるせーな！何でツツコミ一つで他人の酒代まではらわなくちゃいけないんだよ！」

「えー？何となく」

「・・・」

バリンは諦めた。

現在深夜12時

明日、シャロンは起きられるのだろうか・・・

そして、今日が終わり、明日になる。

まだ日が昇って間もない朝早く、ポツケ村の小さな外門の下に、六人の人間が立っていた。

「・・・相変わらず寒いな・・・」

まだ寝起きでぼーっとしているバリンが呟いた。

「バリン、ホットドリンク飲んだ？もう、あんたがリーダーなんだからしっかりしてよ！」

そう言うのは見事に朝、起きる事ができたシャロンだ。二日酔いの心配もなさそうだ。

「くぅー！！朝日が眩しいねえ！！」

相変わらずウザイ口調のラシカボ。

「・・・・・・」

まだ半分寝ているキョンリー。

全員が、己が倒した古竜の防具を身に纏い、各自最強の武器を携えている。

「はぁー！！」

べちべちと自分の顔を叩き、強引に目を覚ましたバリンは姿勢を引き締めた。

そして、こう言った。

「・・・今日はフラヒヤ山脈、まあ雪山での自然の調査だ。しかし、調査だからと言って気は抜くな。現在雪山では飛竜フルフルが確認されている他、先日までの異常現象から考え、今だギルドも発見していない未知のモンスターがいるかも知れない。まあ確率は低いが・・・心して掛かるように！！」

バリンはそう言うのと古竜騎士団メンバー全員と目を合わせた。

「行くか、雪山へ」

「OKだよ」

「いきましよう」

「何かいるといいな」

四人は近くに留めてあった竜車に乗り込んだ。

「気をつけて！」

「よろしくお願いします！」

見送りにきたオババと教官が手を振る。

「出発だ!!!」

四人を乗せた竜車は雪山のベースキャンプに向け発車した。

全員が緊張した面持ちの中、ラシカボだけが不敵な小さな笑みを浮かべていた・・・

第?戦 七曲・弱虫男 (前書き)

更新が遅れてすみません。

今回にて過去篇(アロンSide)は終了、アロンVSドスイーオスに決着が！

第?戦　く七曲・弱虫男く

「うおりやああああ」

アロンは近くにいたイーオスに向かい、思いっきり剣を振った。

「グオオン!？」

イーオスは少し怯みはしたが、すぐに体制を立て直しその場から後ろに跳躍する。

「あ・・・っうわ」

イーオスは少し姿勢を低くした状態でアロンに急接近、アロンに向かい体当たりの姿勢に入った。

「ちよつと、う、うわああっ!!」

とっさにアロンは楯を構え、イーオスの体当たりを防ぐ。

しかし、アロンは足腰に力を入れていなかったために少し後ろによろめいた。

「おい、もっと踏ん張れバカ」

何処からかギンエンのお怒りの声が聞こえる。

その間にもアロンに体当たりをしたイーオスは再びアロンに接近し始めた。

「うわっ!また来た」

今度はアロンの数メートルで停止したイーオス。

「グア、ギャオ」

するとイーオスは口から何かを吐き出した。
ペッ!!

「うわ、毒霧だ!」

アロンはその場から回転回避、何とか毒霧をかわした。
しかし・・・

「ぐあ、うへ、ど、泥が口に入った・・・うえ」

その場で四つん這いになり、思いつ切りむせるアロン。

「バカかお前!!」

とつさにギンエンがアロンに近づく。

「うわ、泥、まじい」

「何してんだ、早く吐き出せ・・・って、うおおおおお!？」

ギンエンはびっくり。いつの間にか辺りにはイーオスがいっぱい・

・

しかも、囲まれている。

「まったく、厄介な事になったな」

ギンエンは自分の太刀を構える。

ざっと10匹はいるだろうか、イーオス達は皆、威嚇行動をとっている。

そして遠くにはドスイーオスの足止めをしているグーダとフィオナの姿が。

「・・・アロン、いい加減剣を構えろ」

ギンエンはちらつとアロンの方を見る。

「・・・分かってる」

アロンは口の中の泥を唾と一緒に吐き出し、その場で立ち上がる。

「アロン、足、震えてるぞ」

「わ、分かってる!」

アロンは剣の柄で自分の両足を突く。

辺りには相変わらずイーオスの群れ。

「まったく・・・アロンといるといつもヒヤヒヤするぜ」

そう言うときギンエンは一番近くにいたイーオスに狙いを定め、一気に接近、イーオスが反応する前に背中に斬撃を入れた。

「グアアア!？」

斬られたイーオスの背中から、模様の赤とは違う紅色の液体が勢いよく放たれる。

「そら、もう一発」

ギンエンは再びイーオスに斬撃を放つ。

今度は体の側面に。

「グア!・・・ア・・・」

斬られた衝撃でイーオスは軽く吹っ飛び、地面にバウンド、それ以来一切動かなかった。

「ほらほら、どんどん掛かってこいよ！」

ギンエンの言葉を理解してるのか、してないのか、イーオス達は一斉にギンエンとアロン目掛けて飛び掛かってきた。

その頃・・・

「お、向こうもやってるな！！」

グーダが遠くでイーオス達と戦ってるアロン達をみて叫ぶ

「グーダ様、そこまで大きな声でなくても聞こえますよ」

フィオナが木の陰から言ってくる。

現在、ドスイーオスはもう捕獲可能状態まできている。

しかし、今回は捕獲用麻醉玉を誰も持って来なかった（アロンが持って来るはずだったが、アロンが忘れた）ため、必然的に討伐でクエストクリアを目指すハメになったのだ。

そして今、遠くから射撃していたフィオナは、ドスイーオスのあの動きに目が止まった。

何故かドスイーオスの口がモゴモゴしている。

「グーダ様、もしかして毒霧が来るかもしれません！一旦後ろに下がって」

「分かった！！」

グーダはフィオナに言われた通り一旦後ろに下がる。

そしてフィオナの予想通りに・・・

ペッ！！

ドスィーオスが毒霧を吐いた。

「今だ!!」

ドスィーオスが毒霧を吐き終える前にグーダがドスィーオスの背後に周り、一気に接近。

「うおりややややああああ!!!!」

力任せに思い切りグーダはハンマーを振るった。

ドン!!

「グギヤアアアア!」

ドスィーオスの悲鳴が沼地に響く。

「まだまだあああ!」

それでもグーダはお構いなしにハンマーを振るう。

ドン!

ドン!!

ドン!!!

生き物を鈍器で殴った時の、特有のぐちゃつとした嫌な音が辺りにこだました。

「さすがです、グーダ様」

フィオナもグーダの援護射撃を開始する。

完全に流れはハンターチームにあった。

「アロン、右だ!」

「うへ!?!」

ギンエンの声を聞いたアロンはとっさに楯を右側に向け構える。右側を向いたアロンの目の前には一匹のイーオス、しかも毒霧を

吐く寸前。

「うそおお！」

アロンはすぐに息を止め、楯を持っている左手に力を込める。
ペッ！！

イーオスが毒霧を吐いた。

ガキーン！！

何とか毒霧をガードしたアロン。

「あ、危ないなあ」

「アロン、もっと緊張感を持て！」

ギンエンから本日何度目かのお怒りの声を喰らった。

「そ、そんな事言われたって・・・」

「アロン！左！！」

「うわああああ！！」

アロンはすぐさま左側に楯を構える。

しかし・・・

「あ、あれ？何もいないんだけど・・・？」

アロンの目の前には何もいない。

「・・・アロン」

かなり冷たい目でアロンを見つめるギンエン。

「え？なんで？」

「・・・」

「・・・もしかして」

「んあ？」

「僕の事ダメした？」

「ああ」

アロンは哑然。

「別に俺は、アロン左、って言ったただけだ。イーオスがいるなんて一言も言っていないぞ」

しれっとした態度でギンエンは言った。

「なっ・・・！」

(こ、コイツう！)

少し怒りのメーターが上がったアロン。

「ほら、くるぞ！」

アロンの目の前には二匹のイーオス。

この二匹でイーオスは最後だ。

「さてと・・・」

ギンエンは刀を構えたまま一気に跳躍、イーオスに接近、そのまま刀を振り下ろす。

グシャ！！！！

「グアアア！？」

ギンエンに斬られたイーオスは一旦後ろへ下がろうとするが、ギンエンはそれを許さない。

ギンエンは一瞬のうちにイーオスの背後に回ると一気にとどめにはいる。

「オラアアア！！」

イーオスが振り返る前にギンエンの刀は振り下ろされていた。

グサッ！！！！

「・・・ッ！」

斬られたイーオスは何の声も発せずに倒れていった。

「・・・やっぱり弱いなイーオス」

ギンエンは刀についたイーオスの血を落とすと、ドスイーオスと戦っているフィオナ達の方に向かい走り出した。

「ギンエン、もう倒したの！？」

アロンはギンエンに向かい叫んだが、無視された。

「・・・」

アロンは右手に持っている剣に力を込める。

目の前には一匹のイーオス。

「・・・うおおおおおおお！！！」

アロンがその場から一気に走り出した。

もちろん、狙いはイーオスだ。

「グアアア！」

イーオスは毒霧を吐こうとしている。

それに気がついたアロンは右側に回転回避、毒霧が放たれたのを見計らって再びイーオスに接近し始める。

「うおおおおお！」

アロンはイーオスに肉薄すると、剣をイーオスに向かい振り下ろした。

グサツ！

「グアア！！！」

イーオスは怯んだ。

（お！チャンスだ）

アロンは次々に剣でイーオスを斬り刻んでいく。

「グアア！！！」

（あ、また怯んだ）

アロンは斬る！

そして・・・

イーオスは絶命した。

（呆気なかったなあ）

アロンはそんな事を思いながら剥ぎ取りをする。

（・・・フィオナの方に行った方がいいのかな？）

アロンは剥ぎ取りを終えると、結構ビビりながらドスイーオスの方へ向かった。

「あ！アロン！おせえぞお前」

アロンがドスイーオスの方へ向かった時にはすでにドスイーオスは足を引きずっていた。

「・・・回復される前にここで仕留めるぞ」

そう言うとギンエンは一気にドスイーオスに接近する。

「グーダは右、アロンは左、フィオナは後ろ、いいな！？」

「分かったぞ！！」

「了解しました！」

「・・・うん！」

四人は各自ドスイーオスの周りを囲み、一気にとどめに入った。

「うおおおおおおおおおおお！」

グーダは自分のハンマーを構えるとすぐさま殴りに掛かった。

「・・・そこっ！」

フィオナは軽く走りながら弓を構え、絶妙なタイミングで矢を放った。

「おりやああああ！」

アロンはドスイーオスの前足目掛けて剣を放つ。

「目え潰れ！！」

ギンエンは逃げようとするドスイーオス目掛けて閃光玉を投げた。

ドン！ピカア！

辺り一面にまばゆい閃光が走った。

「今だ！！！！」

四人が全力で各々の武器を奮う。

「グアアアアア！！」

ドスイーオスの悲鳴が聞こえ、それと同時に紅い鳥竜種はゆつくりと地面に倒れていった。

「おっしやあああ！」

そして、グーダの雄叫びが沼地全体に響いた。

その後、四人は剥ぎ取りを終え、ドンドルマに向かった。
アロンはそこで新たな防具を作ることになる。

第?戦　く七曲・弱虫男く（後書き）

今篇は、アロンが今着用している防具の制作秘話?を書いたつもりです。

まあ、アロンとフィオナ達は昔っから仲が良かった事をアピールするためでもありますが・・・

アロンは今後、過去篇のラストにまたちょこつと出ます。

では次回予告——えっく!!と、思うかもしれませんが、今回は一旦舞台を現代に戻し、「ロアルドロス篇後半部分」をお送りしたいと思います。

過去篇の続きは、またいつか「過去崩竜篇」として掲載する予定です。

ではまた次回で!!

番外戦：キャラクター紹介2（前書き）

過去と現在のキャラがごちゃまぜ状態の人のための番外編！
ちよい短めです！

番外戦：キャラクター紹介2

アロン・プラクティア

現代――「イーオスシリーズ」に太刀「鉄刀【神楽】」を使用。
過去――「ハンターシリーズ」に片手剣「ドスバイトダガー」を使用。

弱虫な今作の主人公！

いつも怯えてばかりだが時にブチ切れる事も。
今だに一人では大型モンスターを狩れない。
過去では皆と力を合わせドスイーオスに勝利した。好きな場所は森丘のエリア10。

フィオナ・クレイン

現在――装備、武器は不明（今後登場予定）
過去――「ブランゴシリーズ」に弓の「ハンターボウ？」を使用。

いつも敬語で礼儀正しく、とてもおしとやかな感じのハンター。
アロンとは昔からの仲間で、結構仲良し。
かなりの少食で、どちらかと言うとベジタリアン。
現在18歳の女の子。
好きな場所は雪山のエリア1、2辺り。

カミザキ・ギンエン

現在――「ネブラシリーズ」に太刀「飛竜刀【双火】」を使用。
過去――「クックDシリーズ」に太刀「骨刀【竜牙】」を使用。

アロンパーティのアニキ的存在。

結構クールな性格で時々アロンやグーダをからかったりする。

出身は東洋で、彼の名前を漢字で書くと（神崎銀炎）となる。

ちなみに頭は良い18歳の男の子。

好きな場所は火山（モンハン3の方）のエリア10。

グーダ・ガガロザ

現在――装備は不明（今後登場予定） 武器は大剣という事だけ
判明

過去――「コンガシリーズ」にハンマー「アイアンストライク
改」を使用。

アロンパーティの特攻隊的存在の筋肉バカ。

何よりも肉が大好きで、良く焼肉屋に出没する。

考えが単純な事しかできず、それが原因でよくギンエンと喧嘩する事も。

一応、アロンはグーダの舎弟。

好きな場所は砂漠のエリア2や5

バリン・プラクティア

過去――「曉丸・極」に太刀「氷刃【雪月花】」を使用。

アロンの父親で、先代古竜騎士団のリーダー。

太刀の腕前がとても良く、あの老山龍を一人で倒したほど。

人望が厚く、いろんな人から好かれていた。

現在、安否は不明である。

好きな場所は密林のエリア10

キヨンリー・ヘブリー

過去――装備は「カイザーXシリーズ」武器は不明（今後登場予定）

まだ15歳のわがまま少女。

いたずらが大好きで、よくバリンにターゲットを絞りいたずらを実行している。

しかし、狩りの腕は天才級。

甘い物が大好き。

好きな場所は孤島のエリア10辺り。

シャロン・ファーンネス

過去――装備は「クシヤナXシリーズ」武器は不明（今後登場予定）

顔にある大きな傷跡が目立つ女性。

かなりの豪酒でかなりお酒を飲む。

男女構わず年下好き（過去篇時25歳）で、よく子供なんかを可愛いがっている。

ちなみに防具のヘルムは緊急事態の時以外は外して狩りを行っている。

好きな場所は凍土のエリア2辺り。

ラシカボ・ガトム

過去——「キリンXシリーズ」にヘビィボウガンの「夜砲【黒月】」を使用。

かなりのナルシスト精神を持ったロン毛の男。

いつもウザイ口調で喋るので周りからは少し距離を置かれている。射撃の腕は拔群。

今回の過去篇の鍵を握っていたりする。

好きな場所は旧沼地の洞窟のエリア。

ナミリ・グラリス

現在——「キリンXシリーズ」に弓「ブチヌキ」をメインに使用。

現在の古竜騎士団の一員で、かなりの低身長な少女。

いつもオトモのルンバと一緒に活動している。

かなりの弓マニアで、目標は全世界の弓を集める事らしい。

射撃の腕はピカイチ。

好きな場所は孤島のエリア1とか3とか。

ウアルト・ファイル

現在―――装備は「ベリオシリーズ」武器は不明（今後登場予定）

ホテルタ在住のルリアの幼なじみ。昔、とある小さな村でモンスターに襲われた時、あるハンターがモンスターから自分を守ってくれた事があり、そのハンターへの憧れからハンターになった。

ちなみにルリアの気持ちには気付いていない模様。好きな場所は雪山のエリア2の高い場所。

ラリイン・プラクティア

過去―――「レイアXシリーズ」武器は太刀という事だけ判明。

バリンの妻でアロンの母親。

まだ本編であまり登場していないので、まだ詳しい事は書けませんが……

性格は少しおっとりした感じの人。

好きな場所は樹海のエリア5

番外戦：キャラクター紹介2（後書き）

過去篇前編はあまり進展が無かった気がするのは作者だけでしょ
うか？

またいつか過去篇後編の「過去崩竜篇」を掲載したいと思います
ので、その時まで楽しみに待っていて下さい！

で、改めて次回予告——次回、アロン達は感動の再会を・・・
（？）
では！

第21戦：VS現代（前書き）

新ストーリーのVSロアルドス篇後半部分がスタート！！
舞台は再び現在へ！！

第21戦：VS現代

時は・・・再び進む

過去を流れていた時間は一旦止まり、今度は現在の時間が流れ出す。

舞台はまた、現代へ！

アロン達がドスィーオスを倒してから一年半が経った。

アロンが水没林のクエストから帰って来て二日、フィオナ、ギンエン、グーダの三人はアロンの家に集合していた。

まだ日が昇って間もないピチの村の外れ、村から約1キロほど離れた崖の上にアロンの家はあった。

崖の下は海。今、その海は朝日でオレンジ色に輝いている。

空はまだ少し暗い。しかし、太陽はさんと海と大地を照らしていた。

「アロン、もう動いていいのか？」

「あ、うん。もう一応大丈夫だけど・・・」

「よし！じゃあさっそく狩りの準備だあ！！」

「グーダ様、まだアロン様は少し安静にしていた方が・・・」

「アロンは大丈夫って言うてる。じゃあいいじゃないか！」

アロンの目の前では、グーダとフィオナが軽い口喧嘩を、外ではギンエンがぼーっとしている。

アロンは思った。

（これが一年半前の日常なんだったな・・・）

翌日、アロンは自宅にあるアイテムボックスを開けた。

ガチャ！

そして、中から一着の服らしきボロボロの物を取り出した。

「あゝあ・・・かなりやばいなこれ」

それは、この前の水没林でルドロス達にボロボロにされたイーオスシリーズだった。

「あちこち穴だらけだ・・・って、ヘルムに関しては思い切り大破してるし！！」

アロンの言う通り、防具は全身穴だらけ、ヘルムは思い切り大破している。

この防具が、いかに水没林のルドロスが恐ろしいのかを表していた。

「はぁ・・・直るかなぁコレ、最悪、新しいの作らなきゃな・・・」

「アロンは再びイーオスシリーズの穴に注目した。

強引に裂かれたように開いた穴が全身合わせて六つある。

ルドロスの牙(?)は確か左右に一つずつだったはず。つまり、六つって事は最低でもあの場には三匹のルドロスはいた事になる。

「・・・マーチンさんの所に行くか・・・」

アロンはテーブルの上に置いてあった財布を手に取り、中身を確認する。

「・・・多分足りるよなコレ」

アロンは財布と防具を両手に抱え、家を出た。

その頃、巨大都市ロックラック。

街の周りを大砂漠に囲まれ、いつも砂嵐が吹き荒れるこの街に、

一人のハンターと一匹のアイルーが降り立った。

ちなみに、ピチの村とロックラックは意外と近い距離にある。船

と砂船を乗り継いで約一日半と言った所だ。

「着いたぁー!!」

たった今、砂船から降りてきたハンター・・・ナミリは思いつきり伸びをした。

「旦那、早く酒場に行くニャ!遅刻ニャよ!」

後ろからオトモアイルーのルンバがナミリをせかす。

「はいはい、分かってますよぉ」
ナミリはルンバを軽く睨むと、一人と一匹はロックラックの酒場
目指して勢いよく走り出した。

ロックラックの大衆酒場は、いつもかなりの人でごった返してい
る。

ハンター、一般人、職人にアイルーまで利用するこの酒場は、ド
ンドルマの酒場とひけをとらないほど大きい。

今日も、いつも通りに酒場は人でごった返していた。

「あれえゝ？みんな何処だ？」

低身長のナミリではこの場での人捜しはかなり難しい。
ドンっ！！

誰かとぶつかった。

「うわっ・・・いったあゝ」

「ちゃんと前見て歩け、チビスケ！」

ナミリにぶつかった大男はすたすたとその場を去って行った。

「旦那、危ないニヤ」

後ろから人の足を避けつつ、ルンバがダッシュで駆け寄ってきた。

「・・・・・・」

無言のナミリ。

「だ、旦那？どっかぶつけたかニヤ？」

「・・・・・・」

「旦那？」

「・・・・あいつ」

ナミリはボソッと呟いた。

「あいつ、今人の事チビスケって・・・」

「・・・ニやるほど」

ルンバは即座に理解。

低身長が悩みのナミリにとって、身長絡みの悪口は完全なタブー。どうやらナミリにぶつかった大男は言ってしまったらしい、身長絡みの悪口を・・・。

「・・・ちよこつと行ってくるね」

無邪気・・・ではない笑みを浮かべながら、ナミリは大男の所へ行こうとしている。

(ニヤニヤ！旦那がブチ切れモードになったニヤ！！)

「旦那、一旦落ち着くニヤ！」

ルンバはナミリの怒りを沈静させるために、ナミリの前に立ち、小さな両腕を精一杯に伸ばしとうせんぼうをし始めた。

「ルンバ、どいて」

ナミリはルンバの上をまたぎ、ルンババリケードを簡単に突破した。

「だ、旦那、ちょっと待ってニヤ〜！」

ルンバがナミリを追おうとしたその時、

「待て」

大男を追っていたナミリの前に突然、一人の若い男が割って入ってきた。

「あ、あんた・・・」

ナミリはその男の顔を見て驚きの表情を示した。

「私事で取り乱すな。我々は古竜騎士団なのだぞ。自覚を持て」

「・・・なんだ、今回の召集って古竜騎士団としての召集だったんだ」

ナミリの怒りはいつの間になくなっていった。

「ここから1番奥のテーブルにはもう皆集合している。早くしろ、ナミリ・グラリス」

「・・・今回は何のミッションなの？」

「着いたら話す」 こうした短い会話の後、ナミリとルンバは謎

の男につれられ、酒場の1番奥のテーブルに向かい歩き出した。

貿易都市ホテルタ

今、ホテルタの港に二人のハンターの姿が。

一人は全身「ザザミシリーズ」のガンナータイプに、軽そうならイトボウガンを背負っていた。

もう一人の方は、全身「ベリオシリーズ」の剣士タイプに、巨大な斧らしき武器、スラッシュアックスを背負っていた。

そう、ルリアとウアルトである。

「えーつと・・・凍土行きの船は・・・コレだ」

ウアルトとルリアの前には大きな一隻の船が。

「おいルリア、ホットドリンク持ったか？」

「・・・え？あ！うん、持ったよ」

「・・・何ぼーつとしてるんだよ」

「べ、別になんだっていいじゃない！」

「・・・顔が真っ赤になってるぞ」

「・・・っ！」

顔が真っ赤に染まっているルリアは、右腕を振り上げ、思いっ切り力任せにウアルトの右頬目掛け、拳を放った。

ドカッ！！！！

「ぐはっ・・・！」

ドサリ！！！！

殴られた衝撃で少し宙に浮いたウアルトは、約2メートルほど吹っ飛び、地面に勢いよく落っこちた。

「・・・・あ！」

我に返ったルリアは、倒れているウアルトに小走りで近づき、そしてウアルトの顔を覗いた。

「・・・・・・」

その時、

「痛ってー！」

バサッ！！！！

ウアルトが勢いよく上半身だけその場で起こした。

そして・・・・

ゴッーッ！！！！

「いっ・・・・！！」

「ぐあああああ！！！」

起き上がったウアルトの額と、ウアルトの顔を覗き込んでいたルリアの額がクリーンヒット！

両者とも大ダメージ！

「あああああ！！！」

ホテルタの空に、悲しい悲鳴がこだました。

そして再びピチの村。

「アロン、今度はどんな防具を作るっちゃ？」

「作るんじゃないよ、修理に出すんだよ」

アロンは、家で退屈そうにしていたチャチャを連れ、村の武具屋に向けて歩いていった。

（どうしよう・・・もし、修理が無理だって言われたら、また新しいの作らなきゃいけないんだよな）

「アロン、今いくら持っているっチャ？」

「・・・秘密」

本当はほとんどゼニーなど入っていない。

「・・・あ、アロン、一つお願いがあるっチャ」

「ん？何？」

チャチャは歩きながらアロンを見上げる。

「新しいお面が欲しいっチャ」

「お面？」

「そうっチャ」

アロンは歩きながらチャチャの顔を見た。

「何のお面？」

「えーっと・・・肉焼きのお面っチャ」

「肉焼くの？」

「焼くっチャ」

そんな会話をしながらアロンとチャチャは村の中央通りにある武具屋に到着した。

「こんにちは！」

アロンは挨拶をしながら武具屋の戸を開けた。

「おや、アロン君か。いらっしゃい」

店の奥から武具屋の店主のチェラグ・マーチンが現れた。

「こんにちはマーチンさん、あの、今日は防具の修理をして欲しくて」

アロンは左腕に抱えていたイーオスシリーズをみせる。

「あー・・・はいはい、修理ね」

アロンはマーチンにイーオスシリーズを渡した。

「うーん・・・こりやすごいな」

「直りますかね？」

「いや、これなら新しい防具を作った方がいいかもしれん」

マーチンはイーオスシリーズを隅々まで見て触った。

「え!!！」

アロンは少し驚いた。多少は覚悟していたとは言え、こうもあっさりと言われるとは・・・

「うーん、とりあえずはやってみるが・・・やっぱりわしは新しいの作る方がオススメじゃな」

「そうですか・・・」

アロンはそう呟くと、マーチンが持っているイーオスシリーズを見る。

どうやら、ここにて長く一緒にやってきた相棒との別れが来たようだ。

第21戦：VS現代（後書き）

ここでいくつかお知らせ！

その1！！

第0戦 プロローグを、少しリニューアルします！

理由としては、かなり読みづらく、ごちゃごちゃしていて分かりにくいとの意見が出たためです。

まあ、リニールアルといっても、内容自体は変わりません。ただ、少し表現が変わる程度です。

その2！！

この小説「モンスターハンター弱虫ハンター奮闘記」の、VSジャギイ篇（第3戦〜第8戦）の総集編を書こうかなあと、思っています！

ちなみに、この小説とは別に掲載をする予定です。

理由は・・・な、何となくです……。まあ、おさらい的な感じではない！！

以上、お知らせでした。次回予告——アロンが新しい防具を作ります！

では！

第22戦：VSロアルドロス（1）（前書き）

お知らせ！

第0戦 プロログをリニューアルしました！

是非、また読んでみて下さい！

多分、読みやすくなっていますよ！！

（リニューアルしたのは2009年11月です）

第22戦：VSロアルドロス（1）

アロンは今、武具屋に来ている。

マーチンにイーオスシリーズの修理は絶望的と言われ、渋々ながら新しい防具を作る事にしたのである。「うーん、いまアロン君が作れる防具といったら・・・ジャギイシリーズなんかはどうだ？」
マーチンはアロンに防具のカタログを見せた。

「あとは・・・レザーにハンター、アロイなんかも大丈夫じゃよ」
アロンはゆつくりとカタログを見渡していく。

（やっぱり、ドンドルマと地方が違うだけあって、知らないモンスター
の防具ばかりだ・・・）

アロンが知っているのはイャンクックやダイミョウザザミ、ババコンガやドスランポスなどだが、それらのモンスターの防具はカタログには乗っていない。

代わりに、ドスジャギイにクルペッコ、ロアルドロスの防具がカタログには乗っていた。

他にも、アロンが知らない所では、土砂竜、打魚竜などがあつた。

「どうしよう・・・」

まだこの村に来て二週間ちよつとのアロンには、この地方のモンスター
の素材などほとんど持っていないに等しい。

「あゝ・・・他には・・・」

「そうじゃな・・・」

「イャンクックとか、ダイミョウザザミとか・・・あ！フルフルの素材も少しあります」

アロンも弱虫だが、これでも一応はハンター、しかもドンドルマでは約三年ぐらいフィオナ達と狩りをしていたのだ。ハンター生活で序盤に狩るような大型モンスターなら狩った事はある（極小数だが）。

「悪いなアロン、そういったモンスターはこちらには出現しない

ならの、防具の作り方とかが分からないのじゃ」

「そんなぁ・・・」

落ち込むアロン。

その頃チャチャは、アロン達の話についていけず、自宅に向かい帰路を歩いていた。

その頃、セルラーグ達貿易船のメンバーは、ジーンヌ村と言う砂漠のハンター数0の村に停泊していた。

一年間の平均気温がまさかの38度！

大地はカラカラに乾き、空にはあつあつの太陽、そして村の近くにある唯一の川には今、ある大型モンスターが縄張りを作っていた。ジーンヌ村の村長いわく

「我々の唯一の水源に、突然奴が現れたんだ。硬くてごつごつしていて・・・ハンターさん、どうにか奴を討伐してくれないか？奴のせいで川に水をくみに行けないんだ」

セルラーグはそれを了承した。そのかわり、今晚の宿を提供して欲しいと言った所、OKが出た。

「さて、まずは情報を集めないと・・・」

セルラーグはとりあえず村の中央に向かう事にした。

「・・・ん？お、お前アロンか？」

ギンエンが聞いてきた。「アロン様・・・ですよね？」

フィオナが聞いてきた。「あれ？アロン変わったか？」

グーダが聞いてきた。

「僕だよ！アロンだよ！！」

そこには、アロンがいた。

ただし、いつもとは違うアロンだった。

今のアロンは「イーオスシリーズ」ではなく、「ジャギイシリーズ」を着用していた。

「・・・あ、そうか！お前防具が壊れてたんだっけ！」

ギンエンは納得。

今、アロン達がいるのはピチ農場。

実は、先程村長から農場に集まって欲しいと連絡があったのだ。
ちなみに皆の装備は、

アロン・「ジャギイシリーズ」に「鉄刀【神楽】」

グーダ・「ボロスシリーズ」に「ドラグロソード」

ギンエン・「ネブラシリーズ」に「飛竜刀【双火】」

フィオナ・「レウスSシリーズ」に「バーンエッジ」

「あれ？フィオナ今日は弓でも双剣でもないの？」 アロンはフィオナに聞いた。

フィオナは双剣と弓を使うバランスアタッカーだ。しかし、今フィオナが装備しているのは片手剣。

「アロン様、知らないのですか？水中で狩りを行う場合、双剣、弓、ガンランス、狩猟笛は使用禁止なんですよ」

ギルドは最近、水中でのモンスター狩りの許可をした。

今まではかなり危険と言う事で禁止されていたが、ルドロスやガノトス、エピオスなどが大量発生し、このままでは一般市民にまで被害がいくと判断したギルドが今回、特別に許可を出したのだ。その中で、いくつか水中での使用が禁止の武器が発表された。

まずはガンランス

水中で使うと暴発の恐れあり。

狩猟笛

水中では笛を吹きながらの狩りは無理。

弓

水中では弓矢を引けない。仮に矢を撃てたとしても水中なので勢いが出ず、威力ガタ落ち。

双剣

乱舞中に剣が海藻に絡まり、狩りが出来ないという事例が多数。

以上の事から、弓と双剣は水中では使えないのだ。

「ふうん、水中では・・・って、水中!？」

アロンがフィオナに何か聞こうとしたその時!

「やあゝみんな、待たせたね」

遠くから小太りのオッサンが走って来た。

「ガドラス様、皆揃いましたよ」

アロン達の前にやって来たのは村長。

「いやあゝ遅くなって済まない」

ガドラスの額には汗が出ている。

「そ、村長さん、もしかして・・・」

何かに勘づいたアロン。「む、そう言えばアロン君には言っていなかったな・・・」

村長はオホンっと、軽く咳ばらいをした。

「今回はみんなに頼み事があって・・・と言うか、アロン君以外は知っていると思うが、みんなにはあるモンスターを狩猟して欲しくてな」

村長は懐から一枚の紙――クエスト受託用紙を取り出した。

「ザメラ水没林のロアルドロスを狩って来て欲しいんだ」

（やっぱりだあ!!）

アロンの予感的中した。

第23戦：VSロアルドロス（2）（前書き）

はぁ、最近は寒くて布団から出たくない日が続いてますね。
何とかならないかな、この寒さ・・・

ってな訳で、最新話をどうぞ！

第23戦：VSロアルドロス（2）

ザメラ水没林

（うわー！また来てしまった！）

アロンは一人、ベースキャンプで落ち込んでいた。

「アロン、準備出来たか？」

ギンエンが声を掛けるも、アロンはズーっととうずくまっている。

「・・・とにかく行くからな」

ギンエンはアロンのえりを掴み、引きずり出す。

「うわっ、やだー！」

アロンは少し、いや、かなり嫌がっていた。

「アロン、早く行くぞ、ロアルドロス！」　グーダは何故かご

機嫌だ。

「行きましょう」

フィオナは少し不安そうだ。

「アロン、観念しろ」

ギンエンはアロンの腕をつねる。

ぐいっ！

「痛いっ！！」

アロンはすぐさまギンエンの手を振り払い、つねられた場所を軽くなでる。

「・・・嫌だなあ」

アロンはボソッと呟いた。

皆、ばらばらに行動してロアルドロスを探索する。そして見つけたら、すぐにペイントボールをぶつけて、他の者に伝える。

これが今回の作戦。

エリア1

基本的に穏やかな、このエリアにアロンはいた。

「・・・みんなが見つけるまでここにしよう」

今、このエリアにいるのはアプトノスの群れのみ。

相変わらず

弱虫なアロン。

「あ！あんなところに薬草が！」

アロンの目の前には採集ポイントが。

「ラッキー！」

アロンは当初の目的そっちのけで採集を始めた。

エリア3

大量の水がエリアを占める水中エリア。

ここにはグーダの姿があった。

「うむ・・・いない」

今、このエリアにはエピオスが数頭。

「よし、次のエリアに行こう」

グーダは辺りを確認し、隣のエリアへ。

エリア10

ザメラ水没林の中では、比較的ひらけているこのエリアには、フイオナの姿があった。

「・・・ここにはいないみたいです」

いるのはブナハブラとオルタロス数匹。

「とりあえず・・・隣のエリアに行きますか」
フィオナは辺りを警戒しながら隣のエリアへ。

エリア7

このエリアにはルドロスの巣がある。

辺りには、生物の骨や残骸が。

ここにはギンエンが来ていた。

「ルドロスが数頭だけか・・・どうしよう」

ギンエンは地図を確認する。

「・・・あとは、エリア8辺りか？」

ギンエンが地図とにらめっこしていたその時！

「・・・！ペイントの臭気！」

ギンエンはすぐさま地図をしまい、臭気の方へ走った。

「あれ、フィオナ？」

「ギンエン様？」

ギンエンは臭気の方に向かう途中、これまた臭気の方に向かう途中のフィオナと遭遇。

「フィオナ、この臭気は・・・？」

「多分、エリア1からです！」

フィオナは走りながら地図を取り出し確認する。

「エリア1だな、分かった！」

ギンエンとフィオナは急いでエリア1へ！

「な、なんでだぁ！」

アロンは葉草の採集中、突然ルドロス为数頭連れたロアルドロスが現れた。

「グヒュユウウ！」

縄張り循環中だったと思われるロアルドロスは、アロンを見つけた途端、威嚇を開始した。

「ぺ、ペイントボールを・・・それっ！」

アロンはロアルドロスに向かいペイントボールを投げる。
ベチャっ！！

見事命中。

「・・・と、とりあえず・・・斬ってみようかな・・・」

アロンは恐る恐る背中の太刀を手取る。

「グヒュユウウ！」

突如、ロアルドロスはアロン目掛け突進をしてきた。
ドスッドスッ！！

「うわっ、やばい！」

アロンは咄嗟に左へ回転回避、なんとか突進をかわす。

「くっ・・・」

アロンは再び太刀を構える。

一方ロアルドロスは体の向きを再びアロンに向けた。

ルドロス達はピタリロアルドロスにくっついている。

「ど、どうしよう」

アロンとロアルドロスの間は約5メートルほど。

「グヒュユウ！」

その時、突然ロアルドロスが上を向いた。

「・・・ん？」

そして、ロアルドロスはそのままアロンに向け、水球を放って来た。

バシヤっ！

「うおおおおお！」

間一髪軌道がズレ、直撃を避けたアロン。

しかし、少し喰らった。

「げっ、何だコレ」

アロンは全身水浸し状態。

しかし、ロアルドロスはアロンに確認の暇すら与えない。

すぐさま体制を立て直し、アロンに向け突進攻撃を放った。

「くそっ」

アロンはまたしても回転回避、ロアルドロスとの距離が遠くなる。

そして、遠くからロアルドロスは水球攻撃。

バシヤっ！

「あっ・・・！」

アロンは回転回避から立ち上がっている時に水球攻撃が来た。

（すぐには動けない・・・っ！）

アロンはその場で受け身の体制をとった。

しかし・・・

突然、アロンの目の前に人影が。

ガキーンっ！！

「アロン、大丈夫か」

「ぐ、グーダ！」

アロンの目の前には、大剣を構えたグーダの姿があった。

「ありがとう、助かったよ」

アロンは礼を言う。

「ガハハハハ！」

グーダは大声で笑った。

一方、ロアルドロスは再び突進の構え。

「グーダ、来るよ！」

「分かってら！」

グーダは再びガードの構えを取る。

どうやらかわす気はないらしい。

アロンはそのすきにロアルドロスの突進の攻撃範囲からはなれる。そして、ロアルドロスはグーダに目掛け突進を開始した。

ドスツドスツ！

「うおおおおおおおおお！！！」

ガキーン！！

グーダはロアルドロスの突進を大剣で受け止めた。　（すげえ！）

アロンは内心驚きつつ、鞘から太刀を抜き放ち、ロアルドロスのたてがみに狙いをつけ斬りに掛かった。

第23戦：VSロアルドロス（2）（後書き）

最近、作者は中国の古典文学（？）にハマっています。

例えば西遊記や三国志演義、水滸伝、封神演義などですね。とても面白いですよ！

古典とは全く関係ないこの小説の次回予告——VSロアルドロス、激化！

感想とかあったら是非、送って頂けると嬉しいです、はい。

ではまた次回で！

第24戦：VSロアルドロス（3）（前書き）

・ モンハン3発売から約四ヶ月、今だにストーリーはロアルドロス・

もう少しストーリーペースを早めるべきか、このままいくか・・・

いや、別に遅くたっていいじゃないか！！ロアルドロスでもいいじゃないか！！

ってな感じで最新話、新キャラ登場です。

第24戦：VSロアルドロス（3）

「うーん・・・アロン君達、大丈夫かなあ？」

ここはピチの村、村長の家。

ピチの村村長のガドラスは一人、机に向かっていた。

「はあ・・・面倒臭いなコレ」

今、村長はアロン達が受けたクエスト受託用紙の整理をしていた。

「あー！だるい」

何故、今村長がこんな事をしているかというと、実は村クエで使ったクエスト受託用紙は使用后、ギルド本部に提出しなければならない。しかし、村長はそんな事を忘れていたため、クエスト受託用紙に大量の不備が！

で、今その処理をしているのだ。

「・・・つまらない」

村長はだるそうにしながら、クエスト受託用紙にはんこを押していく。

「残りはあとで！」

突然、村長はそんな事を言い、書類へのはんこ押しを中断した。

「今日はいいい天気だなあー！！」

村長は家の窓を開け、空気を入れ換える。

四季がない、一年中夏のピチの村。

この村の人々は長袖の服など持っていない。

毎日がポカポカ陽気。

うーん、と、村長が伸びをした。

「昼寝でもするかな」

そんな事を言い、ベッドに向かおうとした村長。

その時、

コンコン！

誰かが村長の自宅を訪ねてきた。

「はいはい、今出ます！！」

（つたく、今から人が寝ようって時に誰だよ）

顔は笑顔、心は怒りの村長が玄関のドアを開けると、そこには一人の人間と一匹のアイルーが立っていた。

人間の方は女性――恐らくまだ未成年であろう、子供から大人へ変わる途中と言った感じの顔。

水色の鋭い瞳、色白の肌、髪は瞳と同じ水色でポニーテール。

そして何より、彼女が着ているのは防具。

全身を赤く燃えるような厚鱗や重殻を使用して作った火竜最上級の防具〔レウスXシリーズ〕だ。

今はヘルムを脱いでおり、右腕でヘルムを持っている。

レウスXは、フィオナの持っているレウスSのさらに上の防具だ。そして背中越しには一本のランスが。

今は折りたたまれているため、何のランスかは分からない。

一方、アイルーの方は至って普通のどんぐりメール、毛並みは蒼。見ただけで分かるほどのG級激強ハンターだ。

女性は、無表情で尋ねてきた。

「あなたはこの村の村長ですか？」

冷たく、情のない声。

「あ、ああ。そうだが・・・」

村長はオロオロしながら答える。

（なんだ、この子）

村長は少し、いや、かなりの戸惑いが。

「私はシュリネ・フェナス。ピチの村の村長、あなたに一つ、聞きたい事がある」

村長はシュリネの話を聞きつつ、まじまじとシュリネの顔を見る。

（うゝん、あれ？この子、誰かに似ているな？）

「・・・何か？」

村長はいつの間にかシュリネの目前まで来ていた。「ん、ああ、すまない」村長は急いでシュリネから離れる。

「で、聞きたい事ってなんだい？」

「実は今、私は人さがしをしていて、そいつは少し前までこの村に滞在していたと聞いた」

シュリネはここで軽く咳ばらい。

「そいつの名前はセルラーグ。村長、そいつは次にどの街に行くと言っていたか？」

「そうだ、セルラーグ君だ！」

村長はシュリネの問いを無視、そして大声で叫んだ。

「そうだ、この子、セルラーグ君に似てるんだ。うわあ、似てるな・・・ってあれ？」

村長は冷めた目をしているシュリネに向かい話し掛けた。

「すまないが、もう一度名前を言ってくれ」

失礼な村長、しかしシュリネは眉一つ動かさずに淡泊に答える。

「私はシュリネ・フェナス。セルラーグ・フェナスは私の兄だ」驚いている村長を無視し、シュリネは聞いた。

「私は兄の行方を追っている。村長、今兄がいる場所、知らないか？」

「うわあっ！」

アロンはぬかるみに足をとられ、転倒した。
べちゃっ!!

顔面から転倒したため、今アロンの顔は泥パック状態。

「アロン、早く来い」

グーダは大剣でロアルドロスの突進を受け止めながら叫んだ。

「悪い、すぐ行く」

アロンは立ち上がろうとするが、足がもつれて上手く立てない。

「バカアロン！」

グーダはそう言う一旦大剣をしまい、突進後の無防備なロアルドロスの背後に回った。

「うおおりやああああ!!」

グーダはロアルドロスの尻尾目掛けて大剣を振り下ろした。

ズサッ!!

「グオオオ!!」

ロアルドロスが怯んだ。ここぞとばかりに猛攻撃を開始するグーダ。

「すごいなあ」

アロンが四つん這い状態でぬかるみと戦っていると、背後に人影が。

「アロン、お前何してんの？」

「へ？」

アロンが首だけ後ろを向くと、そこにはギンエンとフィオナの姿が。

「アロン様、大丈夫ですか？」

フィオナはアロンに駆け寄り、手を貸す。

「ありがとう」

アロンはフィオナの手を借り、何とか立ち上がった。

全身泥まみれのアロン。「ったく、アロン、フィオナ、いくぞ」
ギンエンはため息を一つはき、グーダ援護のためロアルドロスの

元に向かった。

「アロン様、私達も行きましょう」

「う、うん」

アロンとフィオナもすぐにロアルドロスの元へ向かう。

アロンは、必死に恐怖と戦っていた。

その頃、ザメラ水没林の奥地では、不気味な何者かが眠りから覚めた。

鋭い目つきの巨大なモンスター。

ガドラスですら気付いていない、最強のモンスターが今、水没林の河に飛び込んだ。

自分のテリトリーである、この水没林に侵入した者を撃退するた
めに・・・

それは、エピオスやルドロスを喰らい、この水没林全てを支配する王者。

そしてそれは、確実にアロン達目掛けて進んでいた。

第24戦：VSロアルドロス（3）（後書き）

次回、ロアルドロス篇急展開！！アロン達に緊急事態発生か！？
そして、セルラーグの妹、シュリネの目的とは・・・

第25戦：VSロアルドロス（4）（前書き）

もう12月ですね・・・

師走ですよ・・・

今年はまだやり残した事がいっぱいあるのに・・・

第25戦：VSロアルドロス（4）

「おりやあああああああああ！！！」

グーダはロアルドロスの後ろ足目掛けて大剣を振り下ろす。
グサッ！！

「ゲオオオオオ」

あまりの痛みに悲鳴を上げるロアルドロス。

「まだまだあ！！！」

ドスッグサッバサッ！

次々にロアルドロスを斬りつける。

「グーダ、あまり深追いし過ぎるなよ」

そう言いながらギンエンはロアルドロスの尻尾に向かい太刀を入れる。

グサッ！

クリーンヒット！

しかし！

「・・・っ！」

ギンエンは咄嗟に左へ回転回避。

直後にロアルドロスは尻尾を左右に思いっ切り振る攻撃。

ビターンつと、空を打つ尻尾。

「危ないな・・・」

ギンエンは再び太刀を構え、ロアルドロスの尻尾切断に向け斬撃を入れた。

一方フィオナは、辺りにいるルドロス達の討伐を任されていた。

「はあああああっ！」

片手剣をリズム良く奮い、ルドロス達を次々に斬りつけていく。

「ゲオオオ！」

ルドロス達は必死に体当たり等で抵抗をするが、フィオナはそれを簡単にかわし、隙だらけのルドロスの後ろに斬撃を入れる。

「えいっ!!」

フィオナは目の前のルドロスに斬撃を入れ、ルドロスを絶命させた。

「ふう・・・」

フィオナの周りには大量のルドロスの死骸が。

「もう、ルドロスはいないみたいですわね」

フィオナはその場で休憩がてら、砥石を剣に当て、剣を磨き始めた。

その頃

ラサナウ氷河、凍土。

今はまだ昼間。しかし、あまりにも吹雪が凄すぎるため、前がほとんど見えない。

ただ、この吹雪でも分かるほどの威圧感。

ヒウウウウウウ!!

「・・・ルリア、睡眠液だけには気をつけろよ」

ウアルトはスラッシュアックスの柄をぎゅっと握る。

「分かってるわよ!」

ルリアもまた、ボウガンのストックをぎゅっと握りしめる。
吹雪はまだまだ止む気配はない。

ジーンヌの丘、砂原。

砂が宙を舞い、日差しがセルラーグの体から水分を奪う。

「・・・見つけた」

セルラーグの前には、濁った大きな沼。

そして沼の中にはごつごつした岩の塊のような物がいた。

「準備はいいか？」

セルラーグは後ろを見ずに言う。

「ああ、いつでも」

セルラーグの後ろには、一人の男性ハンターの姿があった。

「行くか」

セルラーグは片手にペイントボールを持ち、一気に沼へ向かって走り出した。

ロックラック大集酒場

「・・・皆、集まったな」

一人の男性が椅子から立ち上がる。

「ではこれより、今回のミッションの説明を開始する」

男性がしゃべっているのを、ナミリは退屈そうに眺めていた。

（はあ、つまーんなーいなあ・・・）

ふわあゝ、と、ナミリは大あくび。

「ナミリ」

男性はナミリの方を向かずに注意。

「すいまっせーん！」

そして、再びザメラ水没林。

アロンはロアルドロスのたてがみの破壊が任務。

「うおおオオオオ！」

アロンは両腕に力を込めて太刀を振るう。

ズサッ！！

傷が浅い・・・

「つくそ」

アロンは一旦ロアルドロスから離れる。

「えーっと、砥石、砥石っと・・・」

アロンはアイテムポーチを開け、中をあさる。

「あれ？砥石がない」

アロンの意識はいつの間にかロアルドロスから砥石へ・・・

「アロン、行ったぞ」

ギンエンの声を聞き、アロンはすぐさま意識を前方へ。

「うわっやべー！」

ロアルドロスとの距離はおよそ10メートル。

しかも、ロアルドロスは水球を左右に放ちながらアロンに向かい突進！

「アロン、タイミングを計って跳べ！」

ギンエンが叫ぶ。

「うっ……」

アロンは一気にその場から跳躍、タイミングを計らずにすっ跳んだ。

「アロン様！」

フィオナはビックリ！

アロンは見事に無事。

「あ、危なかった」

アロンはロアルドロスの方を向く。

もう既にギンエンとグーダは戦闘を再開している。

「……あの気力はどこから……」

アロンはアイテムポーチの奥底から砥石を発見、すぐに刃を磨ぐ。

「アロン様、大丈夫ですか？」

近くで刃を磨いでいたフィオナが駆け寄ってきた。 「フィオナ、

大丈夫。何とかなったよ」

何とか笑顔を作るアロン。

本当は内心ヒヤヒヤだったが……

「アロン様、あれはさすがに危ないです。もし水球に当たったりでもしたら、骨なんか折れちゃいますよ！」

「んな、大袈裟な……」

真面目な顔をして言ってくるフィオナ。

「私はアロン様が心配なんです。グーダ様のような体力はないし、ギンエン様のような知識もないし……」

嫌みか！？ と、アロンは思った。

「それに無茶ばかりして……」

「む、無茶って言うか、アレは恐怖で体が勝手に動いちゃうって言うか、何と言うか……」

「アロン様はもっと命を大事にしてください！」

大事にしてるよ、と、アロンは言おうとしたが、フィオナの顔を

見た途端、その気が失せた。

本当に、心の底からアロンを心配してくれているフィオナの顔。アロンは思った。

（・・・今まで、僕は何も考えていなかったのかも・・・）

もう何年も一緒にいたから忘れかけていた。

ギンエンもグーダも、フィオナも大事な仲間。

誰か一人でも欠けたら絶対に嫌だ。

フィオナも同じ気持ちなんだ・・・

「・・・そうだね、もう無茶はしないよ」

（恐怖さえ起こらなければの話）

何故だろう・・・今、全然恐怖心がない。

それは、ここに信頼できる仲間がいるからか？

「アロン様、絶対ですよ!!」

フィオナがぎゅっとアロンの手の平を握る。

「アロン、フィオナ、いつまで喋ってるんだ！早く応戦しろ！」

ギンエンの罵声。

「分かった、すぐ行く!!」

フィオナはアロンから手を離す。

「行こうフィオナ」

アロンは太刀を一旦鞘にしまう。

ロアルド罗斯はもう大分弱ってきていた。

その時・・・

「・・・っ!!」

アロンは突然、背筋がゾクツとした。

「あ、アロン様？」

アロンはその場で立ち止まった。

「何か・・・来る？」

アロンはすぐさま後ろを振り向く。

アロンの目線の先には海水が混ざっている濁った河。

「ん？アロン、どうした？」

ロアルド羅斯の動きに注意しながらギンエンはアロンに意識を向ける。

しかし、アロンはギンエンの問い掛けを無視し、背中の鞘から太刀を抜き放った。

「アロン様、何かいるのですか？」

フィオナの問い掛けも無視。

「これは・・・」

アロンの目の前の河は、うっすらと青白く輝いている。

そして・・・何者かの目が二つ、アロンを睨んでいた。

その目は紅く、とても凛々しかった。

アロンは直感した。

（こいつには・・・絶対に勝てない！！！）

「みんな！今すぐここから逃げろ！！！！」

アロンはいつの間にか叫んでいた。

「アロン、どうし・・・」

ギンエンが何か言い掛けたその時！

「グアアアアアオオオオ！！」

水没林一帯に凄まじい轟音が鳴り響いた。

「くっ・・・あ、あれは・・・」

アロンは両手で耳を抑えながら、前を見た。

蒼く、大きくモンスターが、そこにはいた。

背中の部分は青白く発光しており、ビリビリと、不気味な音がする。

大きな角、太い尻尾、鋭く凛々しい目。

硬そうな鱗や甲殻で体を覆っている、まさに王者。

「こ、こいつは!!」

その時、ソレは豪快に放った。

辺りが一気に青白く染まり、まるで閃光玉のようにアロン達の視界を奪った。

そして・・・

ビリビリビリっ!!

「ぐあああああああ!!」

体にはしる鋭い痛み。

アロンは痛みには耐え切れず、その場で気を失った。

今、何が起こったかを理解する暇も無しに・・・

第25戦：VSロアルドロス（4）（後書き）

アロン、大ピンチで今回は終了、果たして四人の安否は・・・

では！！

第26戦：VS海の王者（前書き）

緊急事態、アロン達の行方は・・・

第26戦：VS海の王者

ドッカーン！！

「な、なんだ！？」

ピチの村全体に響いた轟音。

まるで雷が落ちたかのような音だった。

それはほんの一瞬だったが、村人達は皆、それぞれに畏怖の念を感じていた。

「今のはなんだ！？」

村長は急いで家の玄関を開け、音のした方を確認する。

シュリネもそれにつられ、轟音のした方角・・・ザメラ水没林の方を見た。

「な、あれは・・・」

村長は驚いた。ザメラ水没林の方から、黒い煙が上がっている。

「・・・爆発？」

シュリネもザメラ水没林の黒い煙を見ながら考える。

「・・・っ！！マズイ！！」

煙を眺めていた村長が何かを思い出した。

「今、水没林には・・・」

「・・・どうした、村長？」

シュリネは青くなっている村長の顔を見た。

「もしかして・・・アロン君達に・・・」

「あ、アロン!!」

「アロン様!!」

グーダとフィオナは目を見開いた。

目の前には、恐ろしい蒼の大型モンスター、そしてそのモンスターの足元には……。

「マジかよ……」

ギンエンはこの大型モンスターに見覚えがあった。

背中からバチバチと電撃を放ち、海を支配する王者。

その蒼は海を表す。

「海竜……か」

ギンエンは呟いた。

「ラギアクルス!!」

「村長、何か私に水没林のクエストを受けさせてくれ」
シュリネは村長に向かい言った。

「なっ……危険だ! まだあの轟音の正体が分からない今、ハンターを水没林には……」

「村長、私を甘く見ないで欲しい」
シュリネは背中の中のランスをちらっと見る。

「それでも私はG級ハンター。多少の事では遅れは取らない」

「しかし・・・」

「大丈夫だ。それにあの轟音、少し興味がある」

そう言うときシュリネはアイテムポーチからマタタビを取り出し、
今までずーっと黙っていた蒼色のオートモアイルーに手渡した。

「レイ、行くか？」

「ああ、別に俺は構わないニャ」

シュリネのオートモアイルーのレイは渋い声で言った。

（ハードボイルド！）

村長は心の中でそうツツコミ。

「と、言う訳だ。何かクエスト・・・ルドロス狩り等でも構わない。
何か受けさせてくれ」

「・・・分かった。仕方ない、君を信じよう」

村長は思った。

（本当にセルラーク君にそっくりだ）

「最悪だな・・・」

ギンエンは刀を構える。前にはラギアクルス、後ろにはロアル

ドロス（死にかけ）。

そして何より・・・

「グーダ、お前はそのままロアルドロスの相手を頼む。俺はラギ
アクルスを引き付けておくからフィオナ、アロンを頼む」

「駄目です！！」

ギンエンがラギアクルスの元へ行こうとした時、フィオナが叫んだ。

「それではギンエン様が・・・」

「フィオナ、俺は死なねえよ、それよりアロンを頼むぞ」

その時だった・・・

ギンエンがラギアクルスに向かい走り出し、フィオナが何か言いかけ、グーダがロアルドロスに止めの一撃を放とうとした。

しかし・・・

「グアオオオオオ！」

ラギアクルスが叫んだ。 「なっ・・・」

「うう・・・」

「ぐあ・・・」

三人は皆反射的にその場で耳を抑える。

「くそっ・・・！」

ギンエン達はあまりの轟音で動けない。

そして・・・

「グワッ！！」

ラギアクルスの背中がビリビリと光り、海竜はその口から電撃を放った。

バコーンっ！！

まずは一発目、それはラギアクルスの目の前にいたギンエンに向けられた。

「・・・っ！！」

その瞬間、辺りにまばゆい閃光がはしった。

「ギンエン!!」

グーダが叫ぶが、ラギアクルスは二発目の電撃をグーダに向けて放った。

「なっ・・・!」

そして三発目はフィオナに。

突然の出来事にフィオナの体は咄嗟には動かない。 「そんな・

・」

ドッカーン!

ドッカーン!

ドッカーン!

ザメラ水没林の方から再び、あの轟音が響き渡った。

(またか、今度は三つ・・・)

シュリネとレイは村長から竜車を借り、ザメラ水没林を目指して走っていた。(間に合うか・・・)

村長から聞いている。

今、水没林には四人のハンターがいるんだと。

(・・・)

シュリネは竜車の手綱を引いた。

番外戦：四つ葉に込めた願い前編（前書き）

えー・・・今、本編は結構重要な感じのところです。今後のストーリーの発展上、皆さんに知っておいてもらいたい設定があります。それは、今回と次回の前後編で掲載するセルラーグとシュリネの過去篇です。まあ、詳しくは読めば分かるので、よろしく願います。

番外戦：四つ葉に込めた願い前編

・・・その日は朝から雪が降っていた。
空を覆う灰色の雲、吹き抜けるは冷たい北風。
雪は白く、大地を純白に染める。

一年中冬のこの村。

北の海に面した小さな村だ。

村の名は「ホーツ村」

人口は50人ちょい。

村人のほとんどが老人のこの村は、先程書いた通り一年中冬。
一年の半分以上は雪で覆われ、村の近くにある山脈の影響で、ほぼ毎日が雲の天気。晴れの日は数えるほどしかない。

村の家は全てレンガ作りの家。

時に気温が－20度まで下がるこの村では、レンガ作りの家でも寒いほど。
村の南側は「キル氷山」の山脈が連なる。

村の東側から北側にかけては「フザナ氷樹林」が広がっている。
村の西側は海。とても冷たい海。

村人はキル氷山から取れる貴重な鉱石を採集し、それを売る事で生計を經てている。

周りからはほとんど知られていない陸の孤島と化したホーツ村。

そんなホーツ村に、とあるひと家族が住んでいた。

レンガ作りの煙突がついた家。
この村では珍しい、若い四人家族。

「父さん、おかえり」

氷山での仕事を終え、ホーツ村の家に帰ってきた彼を、彼の息子が玄関でお出迎え。

「ただいま、セルラーグ。ほら、お土産だ」

そう言うと彼――レルラ・フェナスは手に持っていた氷樹リンゴを息子のセルラーグに手渡した。

「ありがとう!」

この村で、肉や果物、野菜は手に入りにくい。

それは、やはりこの気候のためだ。

村人の主な主食は、この気候でも育つ丈夫な芋。

「あら、あなた。おかえり」

レルラの声を聞き、リビングの方から一人の女性が。

彼女はリリ・フェナス。レルラの妻であり、セルラーグの母親。

「ただいま。あれ？シュリネは？」

レルラはセルラーグとは別に、もう一人の子供、シュリネを目でさがす。

「シュリネならもう寝たわよ」

リリはシュリネの部屋を指でさす。

「そうか」

レルラはそう言うと、シュリネを起こさないように静かに家に上がった。

レルラはこの村で唯一のハンターだ。

そしてリリは、この村で唯一の薬師。

この二人は、他の村人から尊敬を受けている。

家族は貧しいながらも、とても楽しい毎日を送っていた。

そんなある日の事。

レルラはいつも通り、ポポの素材を採集するためにキル氷山に来ていた。

レルラは上位ハンターだ。

防具は「ブランゴUシリーズ」で、武器はガンランスの「スノウギアIIドライブ」。

「おりゃー!!」

ズサッ!

ガンランスの矛先がポポの体をとらえる。

「グオオオン」

ポポに向かい突きを入れるレルラ。

ズサッズサッズサッ!

「グオオ・オオ・・・」 ポポは何度目かの突きを受けた時、力なく地面に倒れた。

「ふう・・・」

レルラは武器をしまい、慣れた手つきでポポから剥ぎ取りを行う。

「よし、ポポノタンが取れた」

その他にも毛皮、生肉、骨などを剥ぎ取り、アイテムポーチに入れた。

「あとはブランゴの毛皮とガウシカの・・・ん？あれは・・・」

レルラは近くの岩の陰に隠れ、前方によく目を凝らす。

レルラから少し離れた場所、そこには青いモンスター同士が数匹で争いをしていた。

「あれは・・・ギアノスとバギイか？」

ギアノスが三匹、バギイも三匹。そしてその六匹の近くには一頭のポポの死骸が。

「なるほど、エサの争いか」

ギアノスの三匹は必死にバギイに威嚇行動。

しかしバギイは威嚇を無視し、三匹がそれぞれに向かい睡眠液を放った。

ペチャ！

「グギャ・・・」

睡眠液を喰らったギアノス三匹は、あっと言う間に夢の中へ。

「珍しいな、あの二種がエサの取り合いをするなんて」

この氷山には沢山のポポが生息している。そのためなのか、ギアノスとバギイは無理にエサの取り合いはせずに、目の前のポポを取られたらまた別のポポを捕まえるという、肉食モンスターには珍しい行動がこの氷山では見られていた。

しかし・・・

（そう言えば今日、まだポポはさっきの一匹しか見かけてないな・
・・）

鉱石の採集などで忘れていたが、今日はやけにポポの姿を見かけない。

（いつもだったらもう十匹ぐらい見かけてもいいくらいなのに・
・）

目の前では、バギイ達がこの場でポポを食べていた。
それを見たレルラはさらに驚いた。

（なんで・・・・この場所で・・・・）

バギイやギアノスは、捕まえたエサは一旦巢に持ち帰り、種のボスにエサを献上する。そして、ボスが先に食べ、ボスが食べ残した物を子分達は食べるのだ。

（この場で食べるって事は、こいつらのボスはもういないって事か？）

レルラは不思議に思ったが、考えても仕方がないので、とりあえず次のエリアに向かい歩き出した。

しかし・・・

「このエリアにもいないなあ・・・」
レルラは盛大なため息をついた。

あれこれ氷山に来てから既に三時間、あれからポポは二頭発見できたものの、最初のと合わせてまだ三頭しかポポを発見できていない。

(何かがおかしい)

レルラは確認のため、氷山の奥のエリアに行こうとしたが・・・
「・・・もうすぐ日没だな」

レルラは空を見上げる。空は相変わらず雲だらけだが、うつすらとオレンジ色の光が視認できる。

「仕方ない、帰るか」

レルラはアイテムポーチの中を確認する。
やはり、いつもよりポポの素材が少ない。

「どうしたもんか」

レルラは氷山の出口に向かい歩き出した。

足元には大量の雪。

気をつけて歩かないと、間違いなくすっころぶ。

しかし、レルラは慣れた手つき・・・いや、足つきで雪だらけの大地を走り抜ける。

「・・・っお！」

走っていたレルラは、雪に埋もれている何かに躓き、すっころんだ。

バサッ!!

「な、なんだ!？」

レルラはその場で立ち上がり、埋もれている何かを雪の中から発掘する。

それは・・・

「なっ・・・！」

雪の中に埋もれていたのは・・・

「こ、これはドスバギイの死骸・・・」

そこにあっただのは、全身傷だらけのドスバギイの死骸だった・・・

「・・・と、言うわけなんだ。だから悪い、今日のタンはこれだけだ」

レルラは袋に詰めてあるポポノタンを村長に渡した。

ハゲで白い髭の87歳の村長は、レルラからポポノタンを受け取った。

「いやいや、そんな事はない。ありがとうフェナス君」

村長はレルラにポポノタンの代金を手渡した。

「・・・で、村長、今回の氷山はやけに静まり返っていた。何か、大型モンスターの情報とかは・・・？」

「いや・・・特には出てないなあ」

村長は白い顎髭をいじりながら言った。

「そうですか・・・」

レルラは思い出す。

あのドスバギイの死骸には荒々しい爪跡が刻まれていた。強引に引き裂かれたような傷跡だった。

「・・・」

そこでレルラは考えるのを止め、帰路についた。

「ただいま」

レルラが家の玄関の扉を開ける。

ガチャ！

すると、リビングの方から一人の少女が駆けてきた。

「おかえり！！」

「ああ、ただいま。・・・シュリネ、お母さんは？」

少女――レルラの娘シュリネはセルラーグの部屋を指差す。

「お兄ちゃんが熱出たってお母さんが・・・」

「セルラーグが？」

「うん・・・」

レルラはそつと家に上がるとセルラーグの部屋の扉をノックした。
コンコン！

・・・返事が無い。

「ん？」

コンコンコン！

再びノック。

すると突然、扉が開いた。

ガチャ！

「あら、あなた！」

扉から出てきたのはリリ。

「ただいま。セルラーグ、熱あるんだって？」

「・・・そうなの」

リリはセルラーグの部屋の中にレルラを招き入れる。

レルラが部屋に入ると、ベッドの上でセルラーグが苦しそうに眠っていた。

顔は青白く、息が弱々しい。

そして額には汗。

「珍しいな、セルラーグが風邪を引くなんて」

レルラは手をセルラーグの額にあてる。

・・・確かに、少し熱い。

「・・・ねえあなた、雪山草とか持っていない？」

「雪山草？」

雪山草とは名前の通り、雪山など寒い地方に生えている薬草みたいなものだ。 「そう。この種の風邪には雪山草のエキスが効果的なもの」

リリは薬師。ある程度の風邪なら対処薬を知っている。

「雪山草か・・・うーん持っていないな」

「そう・・・」

「なら、今から氷山行って取ってきてやろうか？」 レルラはまだ防具姿のままだ。今からならすぐにでも行ける。

「でも・・・」

「大丈夫。村長に頼んで採集クエストにしてもらうよ」

「けど、もうこんな夜遅くは危険じゃ・・・」

「・・・セルラークの方がもっと危険だ」

レルラはアイテムポーチの中を確認。

回復薬に砥石、元気ドリンクにホットドリンク。

それにペイントボールと一応閃光玉と音爆弾、そしてたいまつ。

（これだけあれば十分だろう）

「・・・行ってくる」

「・・・気をつけて」

リリは渋々了承した。

「雪山草はいくつ必要か？」

「五つあれば十分」

「分かった。じゃ」

レルラはそっと部屋をあとにした。

「お父さん、また狩りに行ってくるの？」

玄関で武器を砥石で磨いていたレルラにシュリネは聞いた。

「ああ。セルラーグのお薬を取りにね」

「・・・はい」

シュリネは何かをポケットから取り出し、レルラに手渡す。

「ん？」

それは、四つ葉のクローバーだった。

この地方でクローバーが繁殖する事自体が珍しいのに、その中からさらに珍しい四つ葉のクローバー。

「お父さん、気をつけてね」

シュリネがニコツと笑う。

「ああ。シュリネもいい子でお留守番してるんだぞ！」

レルラはその四つ葉のクローバーを大切にアイテムポーチの中にしまった。

「うん!!」

シュリネの明るい声を聞きながら、レルラは家を後にした。

レルラは軽い気持ちで氷山に向かう。

これが、レルラの長い夜の始まりだった。

番外戦：四つ葉に込めた願い前編（後書き）

次回後編！

レルラは氷山にて長い夜を過ごす事となる。それは一体・・・

ではまた次回で！

番外戦：四つ葉に込めた願い後編（前書き）

レルラの長い夜が今、始まる・・・

番外戦：四つ葉に込めた願い後編

星が夜空に輝くキル氷山。

夜風は冷たく、雪は本降りになってきた。

足元の雪は固まり、よりいっそう辺りを冷たくする。

辺りは静寂、何の音もしない。

夜のキル氷山はまるで時が止まったような感じの雰囲気。

「寒い〜〜」

レルラはホットドリンクを片手に、キル氷山エリア3を目指す。

キル氷山の中で雪山草が生えているエリアは3と4と5、この3

つは比較的穏やかなエリアだ。

ヒュウウウウ・・・

風が冷たい。

雪はいつの間にかあられになり、ブリザードを予感させる天気。

「少し急がないと」

レルラはその場でホットドリンクを飲み干すと、小走りでエリア

3に向かった。

その時は来た。

雪やあられがひどく、前を向いていられないほど強い。
辺りはもうすでに暗く、闇は雪と共に氷山を包み隠す。

（さすがにやばくなってきたな・・・一旦ベースキャンプに戻る
か）

風が荒い、あられが痛い、闇が視界を奪う、すべてが最悪。

まだレルラが氷山に入ってから一時間弱。

入山した時にはまだ天候は悪くなかったため、レルラは何も気に
せずに山へ入った。

相変わらず草食モンスターの姿はない。

それどころか、肉食モンスターの姿まで見えない。

まるで、もうこの一帯には生命がないような雰囲気を出していた。

雪山草が生えているエリアにレルラは着いた。

結局、ベースキャンプには戻らずにこのエリアまで来てしまった。

「さっさと採集して帰ろう」

レルラは雪山草が生えているポイントを探す。

ホットドリンクを飲んでいても寒いキル氷山の夜、しかも今はブ

リザード並の雪やあられ。

パチッ！

「ん？」

レルラは採集中、激しい風の音に紛れて奇妙な音を聞いた。
「ヒョイツと立ち上がり、辺りを確認するレルラ。」

辺りにあるのは闇。

「・・・気のせいか」

レルラは再び雪山草の採集を再開。
しかし・・・

パチッ！

再びあの音。

「・・・・・・・・」

レルラは手に持っている五枚の雪山草をアイテムポーチに入れ、
辺りを伺う。

「ん？」

白い雪、黒い闇の向こうに光が。
まるで幻想的な光。

白に良く似合い、黒に生える光。

「なんだあれ？」

パチッパチパチッ！

光はスッと消えた。

その瞬間！

「ヴォォォォォォォォ！！！！」

耳を裂くような轟音。

レルラは咄嗟に両手で耳をふさぎ、その場にしゃがみ込む。

「なんだっ!!」

レルラは前に何かがいるのを感じた。

その瞬間何故か、背筋がきーんと凍った。

体からは嫌な汗が吹き出る。

喉がやたらと乾く。

レルラはそーつと前を見た。

「・・・っ!!」

畏怖の念を感じさせる存在が、そこにいた。

「大変だっ!!」

その夜、ホーツ村に一人の老人の叫び声が響いた。

セルラーグはその声を聞き、目を覚ました。

「・・・?」

まだ頭が痛い、そして気持ち悪い。

まだぼーっとする頭、しかし、それは家の外から聞こえた。

「大変だっ!! キル氷山で雪なだれが!!」

それを聞いたセルラーグはベッドから起き、部屋の窓のカーテンを開けた。

いつもだったら真っ白で大きなキル氷山が見えるのだが・・・
「え・・・・・・・・！」

その夜のキル氷山は黄色かった。

山頂付近が黄色に輝き、山の中腹から下にかけては岩肌がまる見え。
え。

雪がない。

「え？何で？」

一方、村役場。

役場には村の大人達が皆、集まっていた。

「村長、あれはいったい・・・」

一人の老人が村長に聞いた。

「わからん、ただ、今あの山はとても危険な事だけは分かる」

村長はあごひげを撫でながら言った。

氷山はもはや、ただの山になっていた。

ゴオオオン！！

突然、目の前から黄色く輝く球体状の光線が飛んできた。

「くそっ・・・」

レルラは咄嗟にガンランスの楯を構え、光線から身を守る。

ガキーーーーン！

なんとか防いだが、

「うわっ・・・！」

あまりの勢いにレルラはその場でよろめき、地面に手を着いた。

その一瞬の隙を狙い、光線を発射した何かがレルラに急接近、右の拳を上げレルラに殴り掛かる。

「ちっ・・・」

レルラはすぐに立ち上がり、右足で大地と雪を蹴り右へ跳躍。

何かが放った拳は空を殴る。

「っと、危ないなあ」

レルラの額には汗。

天候は吹雪、暑さで汗をかいたのではない。

冷や汗だ。

「・・・何なんだ、コイツは」

レルラは前を見る。

そこに居るのは、畏怖の念を放つ黄金の猿。

頭からは左右に太い角が生え、口からは鋭く尖った牙、体毛は黄金に輝いており、時折バチバチっと電気のような音が聞こえる。

そして何より、その赤い両目からあふれ出る強力な殺意。

ヒューーーーーー！！

吹雪がより一層強くなる。

明らかに、この猿はレルラを殺そうとしている。

「・・・まだ、死ぬ事は出来ない」

ぶっちゃけ、ここからすぐにでも逃げ出したい。

もう分かる、俺では、コイツには勝てないと。

多分、G級ハンターでも恐れるであろう、それだけコイツからは畏怖を感じる。

まさに「金獅子」と言う言葉が似合う。

まさに獅子のような猿だ。

ハンターの勘が知らせる、もう絶対に勝てない、逃げた方がよい、と。

しかし・・・

「ここで引いたら、村が・・・」

ここ、キル氷山とホーツ村はかなり近い。

恐らく、今レルラが引いたら、コイツは・・・村を襲う。

老人が多いあの村じゃ、きつと・・・

「ガオオオオオン！」

「金獅子」が咆哮を上げる。

「・・・あの村には村長やリリ、シュリネやセルラークがいるんだ」

レルラは大地に積もった雪を踏み締め、ガンランスの矛先を「金獅子」に向ける。

残念ながら、その矛先は震えている。

しかし・・・

「お、俺は立派に下山して、セルラークにこの雪山草を渡すんだ」
レルラの頭に浮かんだのは、いつもの村人の笑顔、そして家族の優しい姿。

まだ幼い息子達を守るため、レルラはガンランスを構える。

討伐しなくても、撃退さえすればいい。

「行くぞー!!」

レルラはそう言うと、「金獅子」に向かい突撃して行った。
全ては、皆を守るために。

(暖かい・・・)

甘いパンプキンパイのいい香りが辺りに漂う。

(いい香りだ・・・)

すると、どこからともなく声が。

「こら、帰ったら手洗いうがいでしょ!!」

リリの声だ。

「えゝ面倒臭い!!」

セルラークグの声。

「あー!! パンプキンパイだ!」

シュリネの声。

二人はくんくんパイの臭いを嗅いでいる。

「もう、手洗いしてからよ。ねえ、あなたからも何か言ってよ」
リリが困った表情で俺に話し掛けてきた。

「こら二人とも、先に手洗いしてきなさい!」

「はゝい・・・」

二人は渋々ながら俺の言う事を聞いた。

フェナス家の日常。

それは・・・

（俺は・・・もう・・・）

辺りの雪が真っ赤に染まっている。

鉄の臭いが、寒さで麻痺しているレルラの鼻を刺激する。

雪の上に大の字で仰向けに倒れているレルラ。

正面には「金獅子」。

レルラから数メートル離れた先には、粉々に砕けたガンランス。

レルラは至る所からかなりの出血。

これが絶望、死って奴かと、レルラは思った。

約一時間にも及ぶ大決戦。

かなりの攻防戦、斬って撃って守っての繰り返し。　レルラは頑

張った。

結果、敗北。

先程電撃をもろに喰らい、ガンランスが壊され、レルラは倒れた。
寒さのせいか、痛みは感じない。

「・・・セララグ」

レルラは動かない腕に鞭うって、アイテムポーチから雪山草を取り出そうとした。

レルラは葉っぱを掴んだ事を指先で確認、グイッと引っ張る。

そして、それを見たレルラの頬に、一筋の涙が流れた。

それは、家を出る時にシュリネから貰った、四つ葉のクローバーだった。

レルラの脳裡に浮かんしたのは、シュリネの笑顔。

そして、改めて感じる死の恐怖。

誰もいない、孤高と化した氷山で、一人死んでゆく。いつの間にか吹雪はやみ、空に星空が輝いていた。

「シュリネ・・・リリ・・・セルラーグ」

「金獅子」は右拳を天高く上げた。

そして・・・

「ごめんな」

その言葉と同時に「金獅子」の拳は振り下ろされた。

それから30分後。

ホーツ村には、人々の悲鳴がこだまし、家は潰され、辺り一面に

血の臭いが漂った。

これは、のちに「金獅子襲来事件」と名付けられる事となった悲劇の事件の始まりだった。

「うっ・・・」

シュリネは目を開けた。

そこには、大量の瓦礫の山。

あちらこちらから火の手が上がっており、その火から上がっている煙が、天に向かい静かに昇っていく。

「は・・・」

水色の瞳は、その瓦礫がかつて、昨晚までこの村の一部だった事を理解しきっていない。

「あっ！お、お母さん！！」

シュリネはまだあまり働かない頭を動かし、瓦礫の下にいると思われる母親を探しながら、昨晚の事を思い出す。

突然、村の空が黄金に輝いたのは覚えている。

村人は皆、家の中や村役場の中からそれを見ていた。

そして、その輝きから突然、電撃が放たれたのである。

皆、何が起きたのかを理解する前に電撃を喰らい、痛みに苦しみ

ながら死んで行った。

その電撃は人、建物関係なしに破壊を続けた。

そして、その電撃の一片がフェナス家にも当たり・・・

その時、

「おい、こっちに子供の生存者がいるぞ！」

シュリネはその声にビクツとし、声のした方向を確認する。

そこには、ギルドナイトスーツと呼ばれる服を着た男性が数人。

「バリンさん、生存者いました！」

そう叫んだギルドナイトが、そっとシュリネに手をのばした。

「凄いな、ちょうど瓦礫と瓦礫の間にいたのか」

ギルドナイトはシュリネに怪我がないかを確認する。

「あの、えっとお母さんとお兄ちゃんは・・・」

シュリネは小さな声で呟いた。

「まだ、この下に人がいるの!？」

ギルドナイトの問いにシュリネは俯きながらコクリと頷く。

「本当か!？バリンさん、早くこっちに來て下さい!!」

ギルドナイトが叫ぶ。

遠くからは「ちよつと待て!」と言う声が聞こえた。

その後、その家からは一人の男子の生存者が発見さるが、その母親は遺体で発見された。

ホーツ村での生存者はこの子供二人のみ。
後は死亡が確認された。

そして、その中の一人、この子供達の父親の行方は不明。
子供の証言から近くの氷山を搜索したが、発見されず現在安否不明。

遺体すら発見されていない。

結局、今回の事件、何のモンスターの仕業だったのかはわからず、これまた子供達の証言から「金獅子襲来事件」と言う名がつけられる事となった。

そして、この子供達はしばらくの間、ギルドが設立している孤児施設での生活が待っているのであった。

それから数年後・・・

セルラークはハンターになった。

「俺は、この手で村のみんなや、両親を殺したモンスターを狩るんだ」

セルラークが、孤児施設を旅立つ時に言った言葉がこれ。

「お兄ちゃん・・・まだ、あの金獅子が何のモンスターなのか分かってないんだよ？そんなんで・・・」 「大丈夫だ」

セルラークがびしつと言った。

「この世の中の全てのモンスターを狩ればいい事だ。そしたら、必ず、そのモンスターとも対決する時が来る」

「だけど・・・もし・・・それでお兄ちゃんに何かあったら・・・」

「元気なさ気のシュリネ。　「もう・・・これ以上家族がいなくなるなんて・・・絶対にやだ」

シュリネは孤児施設での始めの数ヶ月、ずーっと泣きつ放しだった。

当たり前だと思っていた家族の温もりが、恋しかった。

「・・・俺は負けねえよ」

そう言ってセルラーグは旅立って行った。

背後で涙を流すシュリネ、しかしセルラーグは一度も振り返えらなかった。

それからすぐにシュリネもハンターになった。
理由、それは・・・

これ以上家族を死なせないため。
絶対に兄に追い付き、兄を死から守るため。

現在・・・ジーンヌ村。

セルラーグはこれからとある狩りを行う。

目の前には「土砂竜」

「さてと・・・行くか」

セルラーグはもう分かっている。

孤児施設を出た後すぐに出会った貿易船に同行するうちに、いろんな町からいろんな情報が入り、今、セルラーグは母や村人の命を奪い、父をも奪ったあのモンスターの正体を知っている。

しかし、今の自分では勝てない事も知っている。

だからセルラーグは正体があった今でも、自らの強さを鍛えるために、世の中の全てのモンスターを狩るのだ。

「ん？」

セルラーグは足元の何かに気がついた。

それは、砂原では滅多に生えないクローバー。

そして・・・

「フツ・・・珍しい」

セルラーグはそのクローバーの中から一本のクローバーを引き抜いた。

それは、四つ葉のクローバーだった・・・。

番外戦：四つ葉に込めた願い後編（後書き）

皆さん、明けましておめでとうございます！
そして更新が遅れて申し訳ございません。

セルラーク、シュリネの過去篇も無事に投稿完了、次回からまたアロン達のストーリーに戻ります。

と、言ってもアロン達のストーリーもあと数話で一時完結、今度はルリアのストーリーになるのですが・・・。

まあ、こんな感じで。

次回予告——過去とは違い、今は若干クールキャラのシュリネは、アロン達を助ける事が出来るのか！？

では！！

第27戦：VSラギアクルス前編（前書き）

連載再開いゝ！！

今まで勝手に休載しててすみませんでした。

本当に申し訳ない！！

で、一つお知らせ！！

この小説の始めの方（確か第1戦～第12戦、第15戦～第16戦、過去篇第壱曲）を大量修正＆加筆しました！！

今後もしくつか大量修正＆加筆していくつもりです。

良かったらまた読んでみて下さい！！

（上記の大量修正＆加筆情報は2010年3月現在の情報です！）

第27戦：VSラギアクルス前編

ドッカーンッ！！

巨大な音が辺りに響き、今まで気を失っていたアロンは目を覚ました。

「うう・・・」

体のあちこちが痛い、痺れる。

自らが着ている防具からは黒い煙が上がっており、焦げ臭い。

「痛つつう・・・ッ！！」

ハッ、とアロンは先程までの事を思い出し、急いで周囲を確認。

そして・・・

「っ！！」

アロンの目の前には・・・圧倒的な存在感を出す、蒼い海の王者の姿があった。

「グウウウウ！！」

ラギアクルスは低い唸り声を上げ、その凜とした瞳でアロンを見つめている。

「う、うう・・・」

その姿に怯え、アロンは地面に這ったままゆっくりと後退。

あまりの恐怖に涙すら出ない。

ただ、ひたすらゆっくりと後退していくアロン。

早くこの場から逃げたい、早く安全な所まで逃げたい。

そんな思いがアロンの頭をよぎった。

コイツには絶対に勝てない、と。

そんなアロンを見て、ラギアクルスは眼中になし、と言った感じでアロンから目を背け、アロンの後ろに目を向けた。

「うわ、あ、ああ・・・」

アロンはあまりの恐怖で呂律が回らない。

そして、ゆっくりと後退していたアロンの足に、何やら硬い物が当たった。

木や岩とかとは違う、何とも奇妙な感覚。

「えっ……？」

アロンはその感覚の元が気になり、後ろを振り向いた。

そこで、アロンは言葉を失った。

「……ッ!!」

アロンの足に当たった物、それは……

「ぎ、ギンエン!？」

それは、先程ラギアクルスから電撃を喰らい倒れてしまった……ギンエンだった。

目をつぶり、ぐったりと地面に倒れているギンエン。

防具は真っ黒に焦げ、顔や腕などからは大量の出血が……

「な……ッ!？」

今、アロンは気付いた、いや、気付かされた。

ギンエンから数メートル後ろには、ギンエンと同じように倒れているフィオナの姿が。

「フィ、フィオナ!？」 アロンはその場でガバツと立ち上がり、

走ってフィオナの元へ駆け出した。

アロンは気付いていないが、今、彼の足は震えてはいない。

「フィオナ!!」

アロンはフィオナの元へたどり着くと、倒れている彼女の体にそっと触れる。ギンエンと同じ、防具は黒く焦げ、防具の隙間からは血が流れ落ちている。

そして、意識はない。

「まさか・・・ッ!!」　そしてフィオナからさらに数メートル後ろには、ロアルドロス之死骸があり、その近くには・・・

「グ、グーダ・・・」

二人と同じで、ぐったりと倒れているグーダ。

防具は真っ黒、そして大量の出血。

「・・・嘘だ・・・」

アロンはハッと前を見る。

そこには、再びアロンを見つめるラギアクルスの姿があった。

その瞳は相変わらず凜としている。

「お前か・・・？」

小さな声で呟いたアロン。

その目は、いつものようなおどおどしたアロンの目ではなかった。

「お前なのか？」

その目は・・・ドス黒く濁っていた。

「グウウギヤアアアアア!!」

ラギアクルスはアロンに向かい、吠えた。

「・・・テメエかって聞いてんだよ!!」

アロンの中で、何かが動いた。

地面に落ちてた鉄刀「神楽」を拾い、アロンはラギアクルスを睨みつける。

そこに、いつものアロンの姿はなかった。

アロンの鋭い瞳がラギアクルスを睨む。

「グウウギヤアアアアア!!」

ラギアクルスは天に向かい吠え叫んだ。

「貴様ッ！！」

アロンの手には、先程フィオナに触れた時についた、彼女の血。アロンは足腰に力を入れ、両腕で太刀を構え、視線をラギアクルスの瞳へ向ける。

凜とした、真っ赤な瞳がアロンを捉えた。

しかし、アロンは怯えない。

逆にアロンの瞳からは大量の殺気が・・・

「よくも、俺の仲間を・・・」

そして、アロンは走り出した。

バカ正面から走ってくるアロンに、ラギアクルスは口から電撃を放つ。

ドッカーン！！

もの凄い轟音、地面に溜まっていた雨水が一気に蒸発、大量の霧が生じた。

辺りは霧で真っ白。

しかし・・・

「うおおおおおおおお！！」

アロンは構わずラギアクルスに接近、電撃を撃ったばかりで動けないラギアクルスの前足に斬撃を入れた。

しかし・・・

ガキンッ！！

「チッ・・・」

アロンの斬撃はラギアクルスの堅い鱗に省かれた。

「グウウウ！！」

その隙にラギアクルスは後退、一旦アロンとの距離を空ける。アロンはそれを追尾。

タツと地面を右足で蹴り、左へ跳躍。

そのままアロンから見て左側、ラギアクルスの右前足に再び太刀を入れる。

ズサッ！！

ガキンッ！！

しかしまた、堅い鱗に弾かれた。

「クソッ」

直後にラギアクルスが右前足の爪を立て、アロンに斬り掛かる。

「・・・チッ」

アロンは勢いをつけ回転回避。

スレスレの所で攻撃をかわす事に成功。

再び太刀を構え、ラギアクルスに斬り掛かるアロン。

・・・その瞳は、いつもの弱々しいアロンの瞳とは、全く違っていた。

弱々しく、情けない戦士ではない。

まるで血に餓えた、野生の猛獣のような瞳だった。

「・・・ここが、ザメラ水没林・・・」

シュリネは今まで乗つて来た竜車から降り、竜車の端をロープで水没林のベースキャンプにくくり付ける。

「旦那、少し・・・急いだ方がいいかもしれないニャ」

相変わらずの渋い声でこう言うのは、シュリネのオトモアイル、レイ。

「何だか・・・この水没林からとても嫌な気配を感じるニャ・・・」

「・・・嫌な気配？」

シュリネは支給品の地図を広げ、地形を確認しつつレイに質問。

「ああ、なんだか・・・水没林が騒がしい。きっとこの水没林を支配するモンスターか何か・・・」

レイはヒゲをびくびく動かし、神経を集中させる。「レイ、何か分かった？」

「・・・エリア1辺りに・・・何かいる」

レイは千里眼の術を習得している。

これでだいたいのモンスターの位置は把握できるのだ。

「エリア1ね、分かった。早く行こう」

「OKニャ」

シュリネは地図をアイテムポーチにしまい込むと、一気に走り出した。

目指すはザメラ水没林のエリア1!!

第27戦：VSラギアクルス前編（後書き）

随分と前の方にやったキャラクター人気投票の結果発表！！

確か過去篇の真ん中辺りでやったキャラクター人気投票の結果発表です！

正直、そこまで票は集まりませんでした。ああ・・・

ではベスト3を！！

第3位

チャチャ！

第2位

フィオナ！！

第1位

アロン！！！！

まあ・・・妥当な結果かなと僕は思います。

投票してくれた方には感謝感激です！！ありがとうございました！！

と、言う事で、ここで一旦人気投票は終了します！！

何かの間違いがないよう、今回の人気投票に関係する文章は一応、削除させて頂きました。

またいつか、やるかもしれないので、その時はまたよろしく願います！！

で、次回予告——VSロアルドロス篇クライマックス！！

アロンはどうなる!!

ではまた次回で!!

第28戦：VSラギアクルス後編

ザメラ水没林エリア1

ここに今、シュリネとレイが到着。

そこで一人と一匹は、とあるモンスターを発見。

「・・・ッ!？」

「ニヤニヤ・・・」

シュリネは目を丸くした。

「あれは・・・海竜!？」

今、シュリネの目の前には圧倒的な存在の海竜、ラギアクルスが
!!

「なんで・・・こんな所に・・・」

シュリネがラギアクルスの存在に驚いていると・・・

「うおおおおおおお!!」

突然の雄叫び、そしてラギアクルスの足元で何かが動いた。

「何あれ・・・?」

シュリネがよく目を凝らし、ラギアクルスの足元を確認する。

それは、人間だった。

太刀を構えた人間が、ラギアクルスに向かい突っ込んでいくのが
見える。

「グウウギヤアアアアア!!」

ラギアクルスが吠えた。しかし人間はそれに怯まず、ラギアクルスの前足に斬撃を入れる。

だが、その斬撃はラギアクルスの堅い鱗によってガキンツと阻まれた。

「ニャ・・・旦那、あそこに三人、ハンターが倒れているニャ。あれ、さっき村長が言ってた四人組のハンターって奴じゃ・・・」レイがシュリネに意見する。

しかし、シュリネはレイの話を聞いてはいなかった。

シュリネはラギアクルスではなく、ラギアクルスと戦っている人間をジーツと凝視。

そして、その人間の顔を見た瞬間、シュリネの頭に、とある人の顔が思い浮かんだ。

「バリンさん・・・」

シュリネの頭に浮かぶのは、古き記憶、あの忌まわしき事件。

あの悲惨な場から自分を助け出してくれ、施設に入るまでの間、身の回りの世話をしてくれたあの人。

家族が恋しく、いつも泣いてばかりいた自分を励ましてくれた。とても優しく頼もしい、自分と兄の憧れのあの人・・・

「旦那、旦那、ぼーっとしている場合じゃ・・・」レイの言葉を聞き、ハッと我に返るシュリネ。

「・・・」

シュリネは再び、人間を凝視。

その人間は、あの人ではなかった。

「旦那？何かあったニャ？」

心配そうなレイ。

「・・・いいや、何でもない。とりあえず、あのハンター達を助

けに行こう」

そう言うのとシュリネはアイテムポーチから閃光玉を取り出した。

「私が閃光玉を投げたら、レイは倒れているハンターの所まで行き、コレを使って」

そう言つてシュリネはレイにモドリ玉を渡す。

「私はタイミングを見計らつて、あの海竜と戦つて人間を連れ戻してくる。それでいい？」

「了解だ、ニャ」

レイはコクリと頷く。

「・・・じゃ、行くわよ」

シュリネは右手で閃光玉を握りしめ、海竜の元へ一気に駆け出した。

一方のレイも、モドリ玉をくわえ、倒れている三人のハンターの元へ。

そして・・・

「・・・ッ!!」

シュリネは閃光玉を投げた。

ピカアアアアア!!

辺り一面に輝く閃光。

その閃光により、今まで獣のような瞳で戦いをしていたアロンは、我に返った。

「うわっ・・・」

あまりの眩しさに下を向くアロン。

その時・・・

ぐいっ！！！！！！

「なあっ！？」

突然、何者かに担がれた感覚が！！

「え、うわっ！？」

「少し黙ってて」

何処からともなく聞こえた女性の声。

アロンは何が何だか分からず、ただされるがままの状態。

そして、そのままベースキャンプへ・・・

一方、二人の背後では閃光をもらに喰らったラギアクルスがじたばたと暴れ回っていた。

「突然の事ですまなかったな」

シュリネとアロンは現在、ザメラ水没林のベースキャンプにいる。

「いえ・・・と言うか、あなたは・・・？」

キャンプのベッドでは、先程レイがモドリ玉で連れてきたフィオ

ナ達三人がぐったりと倒れていた。

「ああ・・・私はシュリネ。たった今、この水没林から爆発音がしたから、真相解明のために来たのだが・・・まさか爆発音の正体がラギアクルスだったとはな・・・」

そう言いながら、シュリネは三人の傷の手当をする。

「あの・・・」

「何だ？」

アロンはおずおずと質問。

「僕・・・あの時、何してました？」

「は？」

シュリネは不思議そうにアロンを凝視。

「いや、あの・・・僕、あの時の事、あまり良く覚えてなくて・・・」

「・・・なるほど」

「え？」

アロンの頭には？マークがいっぱい。

「君は無我夢中でラギアクルスと戦っていたんだ。かなりの殺気を放ちながらな」

「は、はあ・・・」

アロンはまだふに落ちない様子。

「・・・とりあえず、一旦村に帰って、この事を村長に報告しないと」

そう言っつてシュリネはスツと立ち上がる。

どうやら三人の傷の手当ては終わったらしい。

「え、あ！はい」

アロンはいそいそと支度を始めた。

一応、今回アロン達が受けたロアルドロスの討伐依頼は、ロアルドロスを倒したので成功となったが、ギンエン、フィオナ、グーダが大怪我を追ってしまった。

そして、それ以前にラギアクルスがザメラ水没林に出現したと言
う事が、のちに大きなニュースとなる。

第28戦：VSラギアクルス後編（後書き）

次回、ロアルドロス篇最終話！！
舞台は再びピチの村へ！！

第29戦：VS旅立つ時（前書き）

ロアルドロス篇最終話！！
果たして、アロン達は！？

第29戦：VS旅立つ時

「・・・そうか、ラギアクルスが水没林に」

いつもはおふざけ100%の村長が、今は真面目な顔でシュリネとアロンの話を聞いていた。

「村長、私で良ければ今すぐにでもラギアクルスを狩ってくるが・・・」

シュリネは背中越しのランスをちらっと見ながら言う。

「いや・・・まだラギアクルスの情報が少ないから・・・むやみにハンターを行かせる訳にはいかないな・・・」

村長はかなり困った顔。

今、村長とシュリネとアロンは、ピチの村役場の中にいた。

ピチの村にはギルドがない。

なので、狩り等の計画などは必然的に村クエを受託する村役場で行われるのだ。

「そう言えば・・・ギンエン君達は？」

「ギンエン達なら、今ナタザーさんの所で治療を受けてます。でも、まだ目が覚めないとか・・・」

アロンの顔はイマイチぱっとしていない。

アロンとシュリネが村に帰った後、まず向かったのは診療所。

アロンは電撃の当たり所が良かったため、たいした怪我ではなかったが、ギンエン達は意識不明の重体。しばらくは診療所で安静に、と言う事だ。

「そうか・・・」

村長は盛大なため息をついた。

「・・・とりあえずは一旦、この事をギルドに相談してみるよ。」

ラギアクルス討伐は情報が入ってからだ」

幸い、ラギアクルスが現れたザメラ水没林とピチの村との間には、ザメラ密林がある。

たとえラギアクルスが村の方へ来ようとしても、あの大きな体では密林を突破するのに時間がかかるはず。

つまり、まだわずかながらに時間はあると言う事だ。

「とりあえずシュリネ君は、セルラーグ君を追っているんだよね？」

「え、ああ・・・」

シュリネはハッと気付く。

「だったら確か次にジーン村って所に寄ると、貿易船の船長さんは言ってたよ」

「ジーン村・・・」

シュリネは少し考える。 「とりあえず、まだ村は大丈夫だから、ジーン村に行ってみなよ」

そう言うのと、村長は懷から地図を取り出し、シュリネにジーン村の場所を教えた。

「なるほど・・・しかし、本当にいいのか？もしかしたらの事を考えると・・・」

今、この村にいるのは怪我人ハンターが一人に、意識不明ハンターが三人。

・
万が一、シュリネが村を出て行った後にラギアクルスが来たら・・・

「その時はまたその時で考える。とりあえず今は大丈夫だ」

「・・・すまないな」

シュリネは軽く頭を下げた。

「いやいや、別に大丈夫だから」

そう言う村長の顔はまだ曇っている。

「・・・では、明日の朝には出発しようかな」

その日の夕方、アロンは自宅のベッドで横になっていた。

「はあ・・・」

どうしてもため息が出てしまう。

（もっと僕に、力があつたらな・・・）

これはドスジャギイの時にも思った事。

あの時はルリア、今回はフィオナ達。

また、守れなかった。

自分のふがいなさに腹が立つ。

そして今回はさらに、下手をすれば村の人達にまで被害がでるか

もしれない。「海竜か・・・」

シュリネが言うに、アロンはラギアクルスと一太刀交えたらしいが、はつきりとは覚えていない。

「・・・」

あまりのネガティブさにアロンがげんなりしていると・・・

「アロンー！！こっち見るっちゃー！！」

「ん？」

遠くからチャチャの声がした。

アロンは上半身だけムクツと起き上がると、声のした方へ視線を向ける。

その時・・・

ブオオオンッ！！

ベチャッ！！

「うわぁー！！！」

アロンの視界が完全に真っ赤になった。

「な、何い！？」

突然の事で戸惑うアロン。

しかし・・・

「えいつチャー！！」

チャチャが何か投げたのを確認。

それがアロンの顔面にクリーンヒット！！

ベチャッ！！

「うぎゃー！！！」

アロンの視界がさらに赤くなる。

「ハハハ！！どうっチャ？オレチャマの特製トマト爆弾の威力は！？」

「と、トマト！？」

アロンは顔に付着した赤い物を指先にちよこつと触り、軽く一舐め。

その瞬間、お口に広がるリコピンテイスト！！

「どうっチャ！？元気出たかアロン！？」

「元気って・・・」

服も布団シートも真っ赤に染まり、部屋には甘酸っぱいトマトの臭いが充満中！！

「もっと元気出すっチャー！！クヨクヨしてたら何も解決しないっチャー！！」

「・・・・・・」

アロンはふと、考える。確かにそうだ。いつまでも力が欲しいとかばっかりクヨクヨ考えていても駄目なんだ。

力が欲しいなら、誰かを守るほどの力が欲しいなら、今からでも遅くはない、頑張って手に入ればいいんだ。

数多くのモンスターを倒して、色んな経験を積んで、みんなを守れるくらい、強く・・・

「・・・まさか、チャチャに教えられるなんてな・・・」

アロンは決心をつけた。もう怖いとか言ってられない。

この村のハンターになった以上、村の人達を守るのは当たり前。力をつけ、仲間も守れるくらいに強くならないといけないんだ!!

「ありがとうチャチャ、なんだか踏ん切りがついた」

「ハハハ、オレチャマはスーパーポジティブ奇面族、チャチャだからっチャ!!」

「なんだそれ!?!」

ここでアハハと笑おうとしたアロンは、超重要な事に気付く。

「そう言えば、このトマトって・・・」

「チャ? このトマト、あの箱の中に入ってたやつっチャ」

チャチャが指差す先には、でっかいダンボール。

箱の側面には・・・

「完熟トマト!!」

の文字が。

（確かアレって・・・今晚の夕食用に買ってあったトマトじゃ・・・）

「アロン、どうしたっチャ? アロン・・・」

その瞬間、チャチャは凍りついた。

「チャチャ・・・僕を元気づけようとしてくれた事はとても嬉しいし、感謝はしている」

アロンの顔は、さっきのトマトで真っ赤。

かえって怖い・・・

「でもね・・・アレは結構高い値段の高級トマト・・・食べ物を

粗末にして・・・部屋の中をこんなにして・・・」

現在、アロンの家内部は真っ赤。

何となく、殺人現場にも見えなくはない。

「あ・・・あああ・・・」

アロンから角が生えた！！ように見えたチャチャ。 「・・・な
んだか、すみませんっチャ」

皆さんも、食べ物で粗末にしてはいけませんよ！！

翌日、ピチの港。

「・・・よし、では」

完全武装したシュリネとレイが、ジーンヌ村行きの小さな船に乗り込む。

「もし、またラギアクルスが出没し始めたら私を呼んでくれ。すぐに討伐に向かいますから」

「それはありがたい」

現在、シュリネを見送るのは村長とアロン。

「シュリネさん、何かいろいろありがとうございました」

アロンは深く一礼。

「いや、別にいい」

シュリネは軽く微笑んだ。

「じゃ！」

シュリネは片手を上げ、船の中へ。

「行っちゃいましたね・・・」

「まあ、仕方ないさ」

アロンと村長がどんどん小さくなっていく、シュリネの乗っている船を眺めていると・・・

「あ！いたいた！」

背後から声が！！

「あれ？ ナタザーさん・・・とフィオナ！？」

後ろへ振り返ったアロンはビックリ！！

そこにはピチ診療所のナタザー医師と、あちらこちら包帯だらけのフィオナの姿が。

「フィオナ、もう大丈夫なの!？」

「はい、なんとか」

ニコツと笑顔のフィオナ。

「それよりアロン、ちよつといいか？」

ナタザーはフィオナと違い、少し困り顔。

「え？ どうしたんですか？」

「実はな．．．」

ナタザーの話をこうだった。

つい先程、フィオナの意識が回復、何とか一命を取り留めたのだ

が・・・

「ギンエンとグーダの二人の容態が急変してな」

二人の容態が急変。

この村の小さな診療所では、もうどうにもならないくらい深刻な状況だと言う。

そこで・・・

「ギンエンとグーダを、大きな病院があるホテルタまで船移送しようと思ってな」

「えっ・・・」

アロンはビックリ。

まさか、そこまで怪我がひどかったなんて・・・

「そこで村長、あんたに二人の付き添いとしてホテルタまで一緒に行って欲しいんだ」

ナタザーはこの村唯一の医師なので、村から離れる事が出来ない。アロンはこの村のハンター。何かあった時のために村から離れては困る。

「で、そうなるって普通、付き添いはフィオナになるはずなんだが・・・」

ナタザーはちらっとフィオナの方を見る。

「私は・・・この村に残ろうかと思って・・・」

「え!？」

「だって、この村のハンターがアロン様だけだなんて、心配じゃないですか!!!」

「へ・・・」

(た、頼りにされてないのか、僕?)

アロンの胸がチクリと痛む。

「それに、ラギアクルスの一件もあります。だったらなおさら私がこの村を離れるのはまずいのかと・・・」

「と、言う事だ村長。ホテルタまで行ってくれるか?」

ナタザーの目の奥が光った。

「いや、別にいいんだけど・・・何で俺なの？別に副村長とかでもないんじゃない？」

「だってアンタ、役立つ・・・じゃなくて、ギンエンとグーダと面識があるの、この中で村長だけだろ？」

「ん？ああ・・・」

（今役立つって言った！？役立つって言ったよね！？）

村長は内心ツツコミ！

「ああ・・・分かった、じゃあ、行ってくるよ」

村長は渋々ながら了解した。

「任せたよ、村長」

ナタザーは不適な笑みを浮かべていた。

そして・・・

「村長さん、二人をよろしくお願いします」

アロンは深々と頭を下げた。

結局、村長はギンエン、グーダと共にホテルタへ。
フィオナはアロンと共に村へ残った。

こうして、のちの大きなニュースとなる事件の、序章が幕をとじたのである。

第29戦：VS旅立つ時（後書き）

約14話も続いたロアルドロス篇完結！！

最後辺りはもうラギアクルスがメインでしたが。

まあ、ここで軽くロアルドロス篇をおさらい！！

- ・アロンとチャチャ、村長よりロアルドロス討伐依頼を受ける。
- ・アロン、チャチャと共に手始めに水没林ヘルドロス狩りに。
- ・アロン、疲労困憊のためルドロス狩り失敗、ロアルドロスに襲われている所をナミリに助けられる。
- ・村に帰還後、昔の仲間であるギンエン、フィオナ、グーダと再開。
- ・アロン、防具をイーオスシリーズからジャギィシリーズへ変更。
- ・四人で再び、水没林ヘルドロス討伐へ。
- ・ロアルドロスと戦闘中、ラギアクルスと遭遇。
- ・たまたま村に来ていたシュリネ、レイが、爆発音の原因解明のため、水没林へ。
- ・ラギアクルスの攻撃にてギンエン、フィオナ、グーダ、ロアルドロスが戦闘不能、アロンはラギアクルスへ立ち向かう。
- ・シュリネ水没林到着、アロン達を救助。

・村にて会議、シュリネはジース村へ、ギンエン、グーダ、村長はホテルタへ、アロン、フィオナは村で待機。

こんな感じかな？

さて次回予告——次回、新章VSドスバギイ篇スタート！！
主役がアロンからルリアへチェンジ！！

では、また次回で！！

第30戦：VSホテルタ（前書き）

新章、VSドスバギイ篇スタート&祝、30話達成イエーイー！！

と、言う事で新章です！！

時間的には、アロンとチャチャが一回目の水没林クエに挑戦している頃のお話です。

第30戦：VSホテルタ

巨大貿易都市ホテルタ

（グリア大陸）の最南端に位置し、ゆうだいな大海原に面した大きな街だ。

人口は、ここ周辺の街の中では1番多く、ハンターの数も多い。さすがに大都市ドンドルマやミナガルテには劣るが、それでも24時間、人々の声が絶えない、それだけ人口の多い大きな街だと言うことだ。

そんなホテルタの民家や、ギルド等などの公共施設は、全て木製で出来ている。

ここホテルタは自然災害がとても少ない。

大雨もなければ雪もない。

ただ、地理が南だけあって、毎日がかなり暑い。

日中は30度以上になるときも多々あるくらいだ。そのため、ホテルタの住民達は、災害対策を無視した、ただ風通しのみを考えた木製の家に住んでいるのだ。

まあ、全てが全て木製と言うわけではなく、一部にレンガや岩石土を使ったりもしているが。

そして、そんなホテルタは漁業がさかん。

他の街にくらべ、はじけイワシやサシミウオなどが安く買えたりもする。

ホテルタの港には、いつも大量の漁船が留まっている。

ホテルタの収入源の大半は、この漁業でまかなっているほどだ。

そんなホテルタの大衆酒場。

ホテルタのハンターズギルドも兼ねているこの酒場は、かなり広い。

多分、あの老山龍が軽く入れるくらいの超巨大酒場には、いつも人々でごった返している。

一般人からハンターまで、数々の人が利用するこの酒場の内装は、いたってシンプル。

まず、酒場の中央にはドカーンとそびえ立つ、巨大な木製の柱が一本。

その柱には、ハンターズギルドが提供しているクエスト用紙がビシッと張り出されている。

ハンター達は、その柱に貼られているクエスト用紙を確認し、狩へ出かけるのだ。

そして、その柱を囲むようにして、大量のテーブルと椅子が並べられている。ザッと200席以上はあるだろう木製のテーブルは、いつも8割方客で埋まっていた。

ある人は仕事の昼休み、昼食を取りに。

ある人はクエストに行く前、あるいは後に軽食を取るために。

ある人はこれから行くクエストの作戦会議に使ったり。

ある人は何らかの祝いの宴会を開いたり。

皆、それぞれの用途のため、この大衆酒場を利用するのだ。

そして、酒場の1番奥には料理の受付とクエストの受付、そして厨房がある。

恐らく、ここが酒場の中で1番混む場所だろう。

料理の注文とクエストの注文の客がごっちゃになってしまう。

一応、料理注文カウンターとクエスト受託カウンターは別々にあるが、それでも注文客が多く、今ではどのカウンターでも料理とクエストが両方受託できる状態になっている。

建物の中央にでかい柱が一本だけという、超風通し重視の酒場、それがホテルタの大衆酒場兼ハンターズギルドなのだ。

そんな、ホテルタの酒場のひとつの木製テーブルに、一組の若い男女がなにやら紙を広げ、何かを話しあっていた。

端から見たら、一般の客であろう二人、しかし彼らは一般人が着るような涼しげな普段着ではなく、ハンターが纏う防具を着用していた。

「いいか？ドスバギイは大体、この辺りに巣を作るんだ。だから張り込むならこのエリアだな」

広げた紙――ラサナウ氷河（凍土）の地図を指差しながらそう言ったのは、このホテルタに在住している上位ハンター、ウアルト・フリル。

現在、彼は凍土に生息する真っ白な飛竜、氷牙竜ベリオロスの甲殻等を使った防具〔ベリオシリーズ〕を着用し、背中には巨大な斧の形をした武器、スラッシュアックス〔ディーブレイク輝〕を背負っていた。

「へえ・・・じゃあシビレ罫なんかはこのエリアに置いたほうが良さそうね！！」

そう言って地図を凝視するのはもう一人の少女。

彼女はルリア・ミサーラ。

ここから更に南西に行った所にある辺境の島、ピチの村在住の下位ハンターだ。

ちなみに、ルリアの出身はここ、ホテルタだ。

今は、とある重要な事をするために里帰り中。

現在、ルリアが着用している防具は楯蟹ダイミョウザザミの甲殻等から作られる「ザザミシリーズ」を着用、背中にはライトボウガン「アサルトコンガ」。

ウアルトとルリア、これから、彼らはホテルタから船で北に行つた所にあるモンスターの狩猟地、ラサナウ氷河（凍土）にて、鳥竜種の一種であるドスバギイの討伐に向かおうとしていた。

ドスバギイ——それは鳥竜種の仲間で、全身を青い鱗で覆つた二足歩行のモンスターだ。

ドスバギイは体内で睡眠液を構成する事ができ、それを口から出し、相手に付着させる事で、相手を睡眠状態にする事ができる、結構危ない相手だ。

もし、その睡眠液を喰らったものなら、たちまち睡魔に襲われ、大の大人でも昏睡状態になってしまう。そして、ドスバギイは相手が寝ている隙に・・・きつとガブリといくだろう。

「いいか？ドスバギイと対峙した時は、出来るだけヤツの正面に立つな。あつという間にあの世行きになるからな」

「うん、分かった！」

ウアルトからの注意事項を、自らのハンターノートに書き込んでいくルリア。

「うーん、後は大体ドスジャギイとかと大差はないな。まあ、簡単に言うと・・・寝るな！！だな」

「うん！！」

かなりアバウトな注意も、ノートに書き込むルリア。超熱心。

「よし、じゃあそろそろ行くか？もうすぐ船の時間だし」

ウアルトは酒場の壁掛け時計を確認。

凍土行きの船が出港するまで、あと30分を切っていた。

「え！もうそんな時間！？」

ルリアは慌ててノートをしまい、テーブルに置いてあった地図もアイテムポーチの中にしまう。

「準備できたか？」

ちなみにウアルトは準備完了中。

「うん、もう大丈夫」

「じゃ、行くか」

こうして二人は酒場を後にする。

そして、二人は多少急ぎ足で港に向かって行った。

第31戦：VSポポ

ニガハム村・・・

ラサナウ氷河のすぐ手前にある、小さな村。

一年の大半は雪と氷に覆われており、今も粉雪が空に舞っている。

人口は百人ちょい、村の民家は全て石造り。

村の人々は皆、ガウシカの毛皮のコート（マフモフ）を着用し、生活をしている。

そんな極寒の村の栈橋に、一隻の小型の船が入港した。

「ここが・・・ニガハム村かあ」

そう言いながら船を降りるのは、ルリア。

現在、着用している防具からマフモフコートを羽織っている。

「ああ。ラサナウ氷河で狩りをする場合、ハンターが必ず立ち寄る村だ」

そう言うのはウアルト。

「ま、とりあえず村のギルドへ行こう。ここにいたら凍え死にそ

うだ」

ヒュッと吹く風に、ウアルトは身震い。

「うん・・・で、ギルドはどっち？」

ルリアは辺りをキョロキョロ。

あまり寒そうには見えない。

「ここを真っすぐ行つた所。早く行こう」

「あらー！！あなた達がわざわざホテルタから来てくれる、って
言つてたハンターさん？」

「あー・・・はい」

とりあえず相槌をうつウアルト。

ここはニガハム村のギルド。

現在、ウアルトとルリアは狩りの受付の真っ最中。

「あらまあ・・・わざわざ遠い所から、ありがとうございます！
」

・・・今回のドスバギィ狩りの依頼は、このニガハム村からの依頼。

村の近くの凍土（ラサナウ氷河）に、大量のバギィと、その親玉であるドスバギィが出没したので、村人に被害が出る前に狩って欲しいという依頼だ。

「いえいえ・・・って言うか、この村にはハンターっていないんですか？」

ドスバギイは大型モンスターの中でも、比較的簡単に狩猟が出来るモンスターだ。

睡眠液にさえ気をつければ、ほとんどドスジャギイと変わらないほど。

「うーん・・・いるはいるんだけどねえ・・・」

ギルドの受付のおばちゃんは少し困り顔。

「・・・え？」

「いるはいるんだけど、その子、まだハンターになって一年も経っていない若い子でねえ・・・まだ普通のバギイですらやっとか言ってるし・・・」

「あー・・・成る程」

まだハンター一年生、それならドスバギイはまだ早い。

「と、言うわけで、わざわざホテルタにクエストの依頼をしたわけさ。すまないね、わざわざこんな辺境まで」

受付のおばちゃんはそう言うと、受付のカウンターの下から、一枚の紙を取り出す。

「じゃあ、早速で悪いんだけど、先に受付の方を済ましてもらうわね」

「あ、はい。・・・ルリア、お前も・・・」

ウアルトが振り返ると、そこにルリアの姿はなかった。

「あれ？ルリア？」

「つまんない」

ルリアは村の中を歩いていた。

「ウアルトは世間話をする、いつも長引くんだから」

昔から、ウアルトは何か話し込むと、必ずと言っていいほど長引く。

話し終わるのを待っている身としては、かなりつまらない。

「はあ……」

ルリアは俯きながら、舗装されていない村の道を歩いていると・

「危ないですよお」

「ん？」

突然、何処からか声がした。

その時！！

どっすくんっ！！！！

直立不動のルリア。

目の前約一メートルの所には、成体のポポ。

上から降ってきた！！

「……は？」

突然の事に、ルリアは呆然。

「すみませんー！！怪我とかありませんか？」

先程と同じ声。

その声はすぐ近くの民家の屋根からした。

「すみませんね！！ぱーちゃんったら、屋上から飛び降りちゃったみたいで！！」

その声の元は、近くの民家――（ポポ酪農）と看板に書かれた
建物の、屋上にいた。
そこいたのは、小柄の少女だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7693h/>

モンスターハンター 弱虫ハンター奮闘記

2010年10月9日05時41分発行